等に命ずるも臣等は藩命を奉ずるの外を知らざるなりと小林頗る困色あり黑田等又此意を他の四藩に告げ又水野土方の二人に告ぐるに狀を以てして五卿の意を安んぜんことを請ふ既にして十八日大山格之助亦壯士三十五人野戰砲三門を以て太宰府に至る小林等逡巡手を下すに由なし五月七日に至り幕府更に命を五藩に下し五卿を小林に交付せしむ五藩命を奉せず六月二十一日に至り小林は遂に手を空しくして太宰府を發し博多に還れり

（幕令）

筑前太宰府に罷在候三條實美初五人の者今度大坂表へ被召寄候に付筑前表へ罷在候御目付小林甚六郎へ可被相渡候且又甚六郎得指圖大坂表迄之護衛可相心得候太宰府出張之家來へは甚六郎より相達候筈に候間可被得其意候

第二十三章　慶應二年夏期の毛利氏

官制改正○公父子以下出藝の幕命○第二奇兵隊脫兵事件○形勢切迫の戒告○戰鬪準備○諸方面指揮官の任命○軍令狀○萩城の警備○動員部署○士民警戒○公の新館移居○廣島應對の經過公示○沿海地方民心の鎭撫○戒嚴令○防長士民の哀訴○環攻軍の配置○開戰○藩士救濟令○他國船舶の檢索○幕府軍監長谷川久三郎等の護送

四月朔日公郊外に散策し藤花を長野村八幡社に觀午餐を湯田別業に喫し歸路五十鈴殿に至り初更館に歸る二日官制を改革し國用方軍政方の二局を國政方に併す政務の質畧簡易を謀り時局に應じ主力を軍政に盡さんが爲めなり

（達文）

政府局中にて御國政御國用と區別被立置候處御國用引請之御用筋第一足輕已下賞罰等悉皆御國政大關係有之候處士庶掛り合詮議にても御不便利之廉不少

且御軍政別局にして當今別て肝要之御用筋是亦御國政之大關係する處先年來被仰出候質畧簡易之御政體を以軍務一途被仰付度との御改正詮議筋をも漸く相擧當節に至り御國政御軍用とも御用向減少相成候事故右別局とも御國政方へ合併被仰付候得ば諸役一途に相成屹度御便利能可有御座との事にて伺之通被仰付候事

但御國政御國用御軍政三局控もの筆者等之儀は是迄之通區別被仰付置候事

乃ち山田宇右衛門國政手元北條新左衛門國用手元に命じて同役たらしめ渡邊伊兵衛用所役を遠近方に遷し中村文右衛門遠近方を差引方頭人に遷し大村益次郎を三兵教授となし軍政用掛を兼ねしめ兼常剛之助を以て用所役と爲す是日世子山口を發し西大津邊を巡視せんと欲し繪堂に次す俄に公命あり翌日山口に歸る蓋し藝州方面事情切迫の報あるを以てなり是時に當り閣老小笠原壹岐守廣島に在り將に處分令を下さんとし公父子興丸君三支侯吉川氏二家老を召喚するの命を發し限るに四月二十一日を以てし宍戸備後助等は一旦退て高森に次す（尋て更に廣島に赴く事は別章に詳なり）會、第二奇兵隊暴動の事起る當時藩議既に定まり決死防戰を期す而も幕府に對するには一に條理を盡して之れに當り我れより暴擧に出ることなきを力む今反て此事あり公深く之れを憂へ廣澤藤右衛門槇村半九郎等をして鎭壓の任に當らしめ又特に直目附柏村數馬を派して事を視しむ（事は別章に詳なり）七日公文學寮諸生を便殿に召し經を講ぜしむ九日幕府公父子孫吉川氏幷に老臣に二十一日を期し藝州に至るべしとの命を發し形勢日に迫ることを士民に警告す其文に曰く

今般幕府より御達之旨を以御兩殿樣幷に御末家樣方宍戸備前毛利筑前被仰達之旨有之來る二十一日期限にして廣島表御呼寄之儀藝州より御使者を以て被仰達候然處先日御末家樣方幷備前筑前とも廣島表罷出候樣との趣被仰達一應御請方藝州迄態と御使者被差立其御運びも未だ不相成内又々當度之御達振り實以不條理の至如何之御次第とも難窺候得共右期限後は直樣國内へ打入候に付援兵の覺悟致居候樣過る二日幕府より列藩へ布告相成候由素より一統覺悟

の前にて今日に至更に可爲驚愕事には無之候得共彌々以て切迫の形勢に付銘々不覺悟無之臨變一致決戰肝要之事に候此段爲心得相達候事

但去夏以來追々御沙汰の趣有之候處當節可相心得廉々別紙を以尙又被差出候事

右之通組支配中は不及申町地方末々迄爲心得普く御國内へ可被相觸候事

又諸郡代官所に令し農商をして其業を荒廢せざらしむ其文に曰く

此度幕府より御達之趣に付ては來る二十一日期限後何時如何樣之急變出來も難測然處農事急務之折柄に付自然戰爭相始候とも敵衝最寄之村々趣に依り立退不申ては彈丸之患も可有之候得共戰地懸隔候郡々は必動搖致間敷凡て農商とも兵事に關係無之者は各職業に安じ候樣無之ては持久之儀無覺束に付能々可申諭事

付たり諸役付兵卒等に至るまで更番にして疲勞なく久しきに堪へしむること肝要之事

十一日清末候曩きに南園隊總管佐々木男也等と石州口防禦に關する軍議を開き其約成るを以て是日之れを政府に報ず其文に曰く

一其場に臨み馳曳之儀は其日々々之指揮可有之候事

一必勝つを心掛妄に打入申間敷守備無油斷よき機會に乘ずる可爲肝要候事

一敵之首級に眼を掛申間敷唯々多く敵を放殺すべし小利を見る可らず全勝を得る可爲肝要事

一人之手柄を妬み或は臆病之心を抱き其危難を傍觀於有之は可爲大科候事

一自分手柄を心掛隊伍を拔掛致すべからず假令其場之高名有之とも可爲嚴科事

一敵地に入別て諸事謹愼荒增之所業有之べからず務て人心を得る可爲肝要事

右此度不肖の身として石州口一方之大任を蒙り手足惜く所を知らず諸子之力に賴り寸分之功を奏し大膳樣長門樣多年之御誠意相貫度依て宗藩軍令に基き

約束六ヶ條を定め諸子と誓如件

十三日世子湯田に至り薩藩黑田了介を召見し時事を聞き茶菓を賜ふ黑田將に東上の途に就かんとせるを以てなり山崎小三郎の客死を愍み其遺族に香花料金十兩を賜ふ（客歲横濱派遣の名を以て實は英國に赴き海軍術を修めしめしに倫敦に客死せしなり事は前卷末章に詳なり）十四日小寺昌次郎を以て坪井竹槌に代へ岩國の軍監と爲し木梨連を以て小倉宗右衛門に代へ德山の軍監と爲し松野四郎右衛門長沼聰次郎を以て萩の諸兵軍監と爲す同日諸役所及び後房に戒令し各〻緩急に臨み事務の紛淆怠慢なからしむ

町奉行郡奉行御代官所

右今般周く布告被仰出候通來二十一日期限後は趣により何時戰爭可立至候哉も難量實に安危存亡之際に候處今更不能申事に候得共銘々引請之兵卒器械兵粮は勿論一統持久尤動搖不致各〻産業に安じ候樣兼て諸事手當向肝要之事億萬一不行屆有之候ては持久無覺束而已ならず全軍之氣鋒にも相係り不一形次第に付引請々々に於て專一に取調べ置事に臨み毛頭不覺悟無之樣可被相心得候此段爲念達被仰付候事

御武具方

右（同前）不能申事に候得共戰之勝敗は器械彈藥之善惡足不足に有之事に付事に臨み諸手差閊無之樣兼て手當向肝要之事に候自然戰相始候共器械製造彈藥調造等取掛居候者は戰地に不致注意別て專一に仕調不申ては不相濟事にて何分にも持久之目途を立各引請に於て厚く相心得可被遂心配候此段（同前）

諸役所

右（同前）不能申事に候得共各引請之御用筋事に臨み差閊無之樣兼て取調らべ置候儀肝要之事候一局中之混雜よりして諸人の迷惑に立到り終に全軍之氣鋒にも關係せしめ不相濟事に付厚可被相心得候此段（同前）

諸御殿

右今般（同前）何時戰爭可立至候哉も難量御座候處先達て御沙汰相成候通異變之節御立退之儀何時も御差湊無之樣肝要之御事に候自然其期に至り御混雜有

之候ては全軍之氣鋒にも相係り旁御一大事之御事に付厚相心得可被遂心配候
此段（同前）

御靈社附萩御寺々　寺社奉行所

右（同前）何時戰爭に可立至哉も難量御座候處先達て御沙汰相成候通異變之節
御遷坐之儀何時も御差湊無之樣肝要之事に候自然其期に至り御混雜有之候て
は不相濟事に付厚相心得可被遂心配候此段（同前）

十五日五十鈴殿修繕功を竣り世子移居す十六日清末侯山口に來り十七日公に謁
す石川幹之助を以て大島郡軍監兼參謀と爲し代官齋藤一郎兵衛と協議事を處せ
しむ十八日公清末侯の旅館に臨み宴を開き侯の從臣をして之れに陪せしむ赤川
又太郎を以て用所役と爲し井上聞多に越荷方用掛を命じ幷に伊崎竹崎の農兵を
管轄せしめ第一第二大隊に命じ其全隊を以て山口守衛の任に當らしむ十九日山
田七兵衛を以て干城隊頭取長沼太郎兵衛を同助役と爲す同日小姓井上兵部を三
田尻熊毛上關大島郡に佐々木武雄を德地山代阿武郡に遣はし諸兵屯戍の勞を慰

せしむ二十日清末侯復た兩公に謁し時事を議す木梨平之進をして使命書を齎ら
し津和野に赴き緩急兵を國境外に出すことあるべき旨を告げしむ（平之進津和野に至り其臣羽田多
橘に面して使命を述ぶ多橘之れを藩主亀井隱岐守に稟す隱岐守用人馬場愛亮をして其意を傾せし旨を答へしむ）其文に曰く

此度貴藩罷出御內達致し候趣旨は先日大膳父子幷長門惣領與丸出藝之御達に
付宍戸備後助又々出藝仕候就ては平常御沙汰可相成と一同渴望之折柄仄に傳
承仕候得者削封廢蟄之御處置被仰出哉に被相伺人心洶々鎭撫方不一形一層之
苦心を增し若右實說にて御裁許書等御渡相成節は昨年大小監察落意承知も虛
言同樣にて備後助迚も御請込は仕間敷然るときは討入は眼前之事に候弊藩國
情に於ては君寃徹上の一念三ヶ年之今日迄焦思欝閉臣子の衷情を盡し候も泡
影に歸し此上は無是非依嶮征師相待ち臣子の分相決之外手段無之次第は地を
易へ御洞察可被下候萬一も右場合に迫り候節は領內士民封境諸口へ出張可仕
十里餘之御隣接殊に積年御隣交之御因合弊藩に於て毫も懸隔の底意は無之候
得共御領內人民何歟と疑惑騷擾致候ては不相濟甚以痛心此事に御座候前件の

趣篤と較量之上御領内御鎭撫兼て御布告相成候樣希望致候

同日條令を定め司令士及び代官役に頒示す

（司令士への分）

條々

司令士中へ

一關東之情實を洞察するに此度の沙汰を不受時は彌以不條理に出斷然決戰之覺悟相見候に付輕侮怠惰之心を懷き候ては勝算無之は必然なれば兼々心を用ふべき事

一待敵の心得は去丑の六月布令之通厚く可相守事

一火技戰之法は敵の陣を擊碎するを要とす刀槍戰の如く一二の敵を刺殺するを以勳功と不可心得事

一平日無事之時兵卒を愛使せしめ戰爭に至り益一致互に手足之頭目を掩ふ如く志氣挫折せざる儀肝要之事

一兵卒は更番にして疲勞なく久しきに堪しむるを要とすべき事

一敵之距離を測り命中候樣可令指揮猥に彈藥を費すべからざる事

一夜警之爲嚴重之備可有之事

一萬一我不利にして隊伍崩亂に至るとも急速集合再び守返の策略は平日の心得に有之事

一敵軍攻來候時は國境にて致防禦輕易に國外に進み戰爭は嚴禁なれども時機に因り侵入するは不苦尤掠略等之儀堅く相戒め他國の人民たりとも精々可加撫育事

右敎示する條々必ず堅守すべし若此意に違背し不覺悟を取に於ては嚴科申付る者也

寅四月

（代官への分）

（初二項は前と同じ）

一耕作幷職業之儀は戰爭に至るとも不可廢事に付過日布告之旨不可忘候事
一老幼之者戰之時に至り饑渴之憂無之樣豫め手當可致候事
右掲示する旨を體認し其職を盡すべき者也

寅四月

文中火技戰に關する項は首級の獲得を貴ひたる古戰法を排斥して近世戰法の普及を謀りたるを見るべし二十一日清末侯將に山口を發し歸途に就かんとし公館に上り別れを告ぐ公近侍宮城直人を其旅館に遣はす此朝公銃陣演習を練兵場に觀午餐後湯田附近を散策す此日重見次郎兵衛を以て毛利出雲一手兵の軍監と爲し小郡宰判千切口關門の守衛を專掌せしめ杉梅太郎を以て大檢使役と爲し現務を除き國政方內用掛用所役の事務を聞かしめ松原音三に亦用所役の事務を聞かしむ二十二日朝公復た練兵場に臨み砲步兵の操練を觀る同日村上河內に命じ事あるの日久賀村に出發せしむ又老臣宍戶備前等に藩境諸方面の指揮を命じ山內梅三郎に馬關口指揮役同一の心得を命ず（此辭令に所謂指揮とは總奉行の謂にして總奉行は舊例八家に限る左記諸人は八家若くは其嫡子にして獨り山內のみ然らざるも從來奇兵隊總督たり山縣狂介より總奉行任命の事を木戶に內議し木戶は政府諸員と協議せしも前述の舊例あるが爲めに直ちに總奉行に任ずることを得ざるも之れと實際相異ならざるの名義を付せりと山縣へ答へしこと木戶の書翰中に見ゆ）

右異變之節小瀨川口先鋒遊擊隊其外二三の手御人數御手組被仰付候に付人數出張之節は指揮被仰付候事　　宍戶備前

右異變の節船木宰判諸兵御手組被仰付置候に付右人數出張の節は指揮被仰付候事　　毛利能登

右異變の節小郡宰判へ諸兵御手組被仰付候に付右人數出張之節は指揮被仰付候事　　毛利出雲

右異變の節兩大津宰判へ諸兵御手組被仰付置候に付右人數出張之節は指揮被

毛利豐之進

仰村候事

右異變の節三田尻宰判へ諸兵御手組被仰付置候に付右人數出張之節は筑前代として指揮被仰付候事　毛利常太郎

右異變之節萩表御守衛人數御手組被仰付置候に付右人數出張之節は指揮被仰付候事　毛利宣二郎

右異變之節上ノ關宰判へ諸兵御手組被仰付置候に付人數出張之節は隱岐代りとして指揮被仰付候事　毛利伊賀

右異變之節佛坂口守衛被仰付置候に付北第一大隊幷佛坂近邊之諸兵相集め指揮被仰付候事　御神本主殿

右異變之節小郡口諸兵幷南第十二大隊指揮被仰付候に付毛利出雲と申合せ候樣被仰付候事　鈴尾五郎

右異變之節山代德地宰判へ諸兵御手組被仰付候に付右人數出張之節指揮被仰付候事　益田孫槌

而して之れに軍令狀を賜ふ其文に曰く

條々

一今般從關東軍勢差向候は全以朝廷を奉誣私之非を遂る所爲に候曲直の在る處天人是れを知長防微力と雖ども方鎭の任且は武門の習ひ及一戰之條諸手を整へ無忽可有駈引事諸手の者本陣之令に不可背總て諸隊總督諸兵司令は本陣之約束を守り兵卒は其長の差圖を請け進退す可し背令のものは可爲不忠事

付たり總督司令時に本陣に至り存付旨趣無腹藏可申談事

一諸口分配之諸手一向に可遂防戰候縱令一方小敗雖有之聊無內顧之念堅く請場を守る可き事

一防戰持久を主として經卒に境を越て進む可らず自然不得止時は人數を分ち嚴重に境を守らしむ可し勿論應援手組忽せあるまじき事

付隣國に入るときは借地の由可申達候不敵對のものは信義不可失事

一他國雖押出猥りに百姓を遣ひ農業を不可妨農家之物を押借掠取等私に分捕致し候儀堅禁止之事

一沿海の地敵軍艦を以て迫ると雖ども人數を出して專ら海岸を守り或は敵に應ぜんとして東西奔走す可らず敵の揚陸するを待決戰之心得可爲肝要事

一諸手互に救應せしめ一手之功を不可貪兼又申合する旨臨時違約不可有事

一拔掛は一軍之紀律をみだす基也縱令雖有功名背軍令之罪不可遁事

付たり本陣之命を不請して山口へ注進せしむる者は戰場を逃るの令に同じかる可き事

一猥りに彈藥を費すを禁ず敵間を計らず發砲し或は敵間近しと雖令亂放ものは不覺の沙汰たるべき事

一喧嘩口論總て非禮非義之振舞有間敷事

右之條々堅く可相守者也

慶應二寅四月　（黑印）

二十三日奇兵隊軍監山縣狂介に他藩人應接掛を命じ馬關に駐在せしむ（山縣狂介より應接擔當者の任命を請ひ開戰に至れば愈〻其要あるべきを云へることあり此命蓋し之れが爲めなり）二十四日公近侍の諸臣等を率ゐ銃陣を大場原に演じ畢て高田殿に至り諸員に酒を賜ひ薄暮館に歸る太田市之進に三田尻毛利筑前一手參謀心得を命じ草苅八十八に第三大隊軍監兼參謀を湯川平馬に南第十一大隊軍監兼參謀を田坂宇右衛門に北第二大隊軍監兼參謀を命ず二十五日戰期已に迫るを以て諸隊に令し其兵士の歸省を止め又山口守衛の任を命ぜられたる諸兵は直ちに任務に就き其他は緩急直ちに出兵の準備を爲さしむ

方今彌以切迫之時勢に相見候付干城隊大隊等兼て山口御守衛被仰付置候部は惣出張被仰付其餘諸口共土着兵之儀は一左右次第持場急出張被仰付尤司令等之儀は別請之地へ被差出置候此段心得のため達被仰付候事

但諸口指揮役之心得を以番兵等差出候儀は不苦候事

二十六日岩國に令して小瀨川口關門の警備を嚴にす其文に曰く

其御領小瀨川口關門御固之儀是迄迚も御疎は有之間敷候得共時勢益切迫にて彼地は尤要衝之場所柄候得者物頭役之衆又は其外御見計を以被差出別て嚴密相成度事候間此段及御達置候樣との儀候

是れより先き干城隊附屬足輕書を政府に上り事あるの日先鋒の任に當らんと請ふ是日批して其志を賞し且つ命を待たしむ五月朔日廣島に於て處分令の發表あり（事は別章に詳なり）二日諸吏に令し器械彈藥其他防戰の準備に關する事務を査點し來十日を期して決了すべきことを命じ益田孫槌の林光關門守衛を免し高洲三郎阿曾沼外次郎和智帶刀を以て之れに代へ又有事の日北第二大隊中榎本伊豆の家兵一小隊半兒玉主稅の家兵二小隊は野坂口に同隊中宍戸播磨根來上總繁澤河内渡邊丹波益田與三内藤篤之助の家兵各半小隊は北第一大隊御神本主殿の家兵半大隊と共に土床口に派出すべきことを命じ又神村熊次郎の家臣九名粟屋孫二郎の家臣七名を南第十五大隊中四番小隊に編入し有事の日千切口關門を守衛すべきことを命ず四日諸士に戒令して必ず應分の小銃を準備せしめ兒玉若狹に命じ千切口關門戍衛兵を管轄せしめ高橋孝太郎に命じ德地宰判軍監參謀の心得を以て農兵狙擊兵を管轄し代官役司令士等と協議處理せしむ五日公吉敷附近を散策す同日馬關に碇泊する軍艦に令して濫に大砲を放發し彈藥を徒費するを戒禁す是れより先き前月二十七日萩方面の事變に際し公父子俱に未だ出馬來城に至らざるの間禎之丞公子を以て事に當らしむることを令す此月二日に至り萩干城隊鐘秀隊及び北第五大隊萩在住散兵隊に命じて各一小隊旬日ごとに城内に交番し晝夜東西海岸を巡邏せしめ其四日更に令して六日以降は各一小隊旬日毎に交番し萩干城隊は萬年寺に鐘秀隊は長德寺に在萩散兵隊は宮崎大宮司宅に北第五大隊は

三摩地院に器械彈藥を備へ之れに派出すべきことを命じ尋て諸兵の部署及び派出の順序を定むること左の如し

萩御手配

萩干城隊

騎兵塾之面々

鍾秀隊

右御城

北第五大隊

右二ノ曲輪

第五大隊

右三ノ曲輪

但御本丸幷諸御門之儀は兼て御門預りにて被爲濟候事

平安湖北南惣門之儀も同斷

中の惣門之儀は締切被仰付候事

萩居合　散兵隊

右小畑鶴江邊

當島在住　散兵隊

右櫛ヶ浴（エキ）玉江邊

萩町兵　一大隊

右西ノ濱

萩町兵　一小隊

右非常廻番

北第六大隊

二番　砲隊

御細工人　砲隊

當島農兵　四小隊

右之通り此度御手配之方向被相定候上は御城圍守は申に不及銘々持場妄に動搖不可有之尤敵之形勢に依り進退分合救應等臨機之御指揮可被仰付事

萩諸兵出張之次第

東西教練場鶴江之臺場二砲門司令幷砲卒共東西同斷保護砲隊分隊宛同斷

右藝州境石州境赤間關之外兵端相開候節は急觸達被仰付候付兼て御沙汰相成居候揃場へ出張被仰付候條申合置無遲滯可被罷出候事

但出張之上は時々臺場廻見敵艦見請之節は政事堂へ注進可有之に付自然急難之模樣相見候節於明倫館遠響三發相圖被仰付其節は諸兵持場々々へ急出張被仰付事

付たり御國境其外兵端相開候共萩近海無事之節は三日交代被仰付候事

惣出張之面々

右同斷之節峠外罷出候儀被差留一左右次第各持場出張無遲滯樣身支度致置候樣被仰付候事

一萩近海へ敵艦相見候節は五ヶ所於鍾樓大板二ッ切被成御打尤萬一急襲之形勢見請候節は明倫館に於て遠響三發相圖被仰付候其節は各、持場急出張被仰付候事

一惣出張之上は引請々々申合せ持場近邊廻番被仰付候事

一酩々揃場屯集之上人數着到被仰付候事

但揃場急出張之節は於持場着到可被仰付候事

北第五大隊

右天樹院

第五大隊

右金剛院

右之通り異變之節屯所替被仰付候事

五月六日

九日小笠原閣老遂に宍戸小田村二人を拘囚す（事は別章に詳なり）十日公曩きに公子禎之允に命じ老臣毛利隱岐の女マサ子を養はしむ頃者之れを清末侯に配すべきの約を成す是日侯使を遣はし其忝きを謝す公子も亦爲めに使者を公に致す十一日干城隊の請を許し公館に宿直せしむ戰期已に迫るを以て慈芳夫人等の公族を太田に移さんとし公族附屬の吏員に令し準備せしめ期するに此月二十日を以てす長府侯病あり此日公近侍を遣はし物を贈て之を慰問す十三日更に土民を警戒す曰く

今般藝州應接之始末萩山口兩所に於て三通の書面を以相示し銘々覺悟勿論之儀候處來二十一日より幕兵御兩國へ打入之沙汰に及び候由相聞是迄之儀は屢右樣之沙汰有之候得共先は兵威を以壓倒し御國内之離間を相窺候趣も有之探索方申出令符合候處此度之儀は藝州出張之幕兵暴行之廉不少尙過る朔日幕府不條理之上意外之御達に就ては御末家樣方より御返却相成候由旁以斷然相迫候は必然に付緩有之間敷候出張之儀は別段沙汰被仰付候事

十四日藏元役松原音三（山縣九右衛門改名）に干城隊頭取兼務を命ず十五日曩きに山口上宇野令字法泉寺に經營せる公館已に落成せしを以て是日公祖先の靈牌を奉じ此に移る（同日午後世子來りて之れを賀し畢りて執政加判以下營作頭人に宴を賜ひ足輕以下役夫に至るまで各〻酒を賜ひ公及び世子出でゝ之れを見る）是に於て政府より士民に令して曰く

此度幕府御處置振且來二十一日迄御末家樣方御達書御返却御歎願相成候由に付ては如何樣之變不日出來も難計然處於此御方は專防戰之御手段無拔目樣被成置候外有之間敷候處唯今之御茶屋御手狹に村御軍議は勿論外御差湊も有之候付今十五日新御屋形御出直樣被成御滯坐候此段内意相達候事

軍政掛馬屋原右兵衛をして千切口軍監參謀を兼ねしむ十六日伊勢新左衛門（北條改姓）に郡奉行役の事務を兼ぬ聞かしむ十七日午前公兵學校に臨み氷上屯集第五大隊銃陳操練を觀る同日廣島應對の經過及び宍戸備後助小田村素太郎拘禁の始末を藩内に公示す其文に曰く

先般殿樣若殿樣興丸樣幷御末家樣方へ御達之儀有之廣島表へ御出被成候樣自然御病氣に候はゞ御名代四月二十一日迄に被差出候樣にと幕府より御達有之

候然處御兩殿樣御機嫌相興丸樣御幼年之儀に付右御三方樣御名代相兼備前嬭子宍戸備後助被差出尙又御末家樣方にも御氣分相に付御名代として御家老之內一同御差出に相成過朔日御裁許申渡之旨有之に付御名代中一同國泰寺へ罷出候樣閣老小笠原壹岐守樣より御達被成候處備後助儀足部之腫物相煩罷出候樣難相成に付快氣迄御猶豫之儀申出御末家樣方御名代も備後助快氣之上一同罷出御達之旨拜承仕度段をも申立候得ば備後助に不拘末家名代中之儀罷出候樣にと再應御達に付當日御末家樣御名代中國泰寺へ罷出候處御本家へ當る御裁許被仰渡有之候に付末家名代之者本家名代相兼候儀は難相成段出藝以前御書取を以御達も有之備後助快氣之上被仰渡候御筋合共には無御座哉甚以不條理至極如何之御次第哉と一同及詰問候處其方共本家名代に相立候譯には無之各主人共より本家へ可申達との御旨趣抔甚以曖昧之答振彌以難及落着且又御裁許振國內士民意外之御處置に付是迄國情追々申立置候趣も有之旁以容易に御請難申上筋屢演說候得共有無之御沙汰無之に付尙亦國情申立儀も可有之段書面差出置御末家樣御名代中一應高森驛迄引取候尤宍戸備後助小田村素太郎は別段御用有之候に付滯藝候樣にと御達有之滯留之內過る九日備後助素太郎兩人國泰寺に御呼出有之候得共此內以來之病氣未遂快氣罷出候樣難相成素太郎儀備後助快氣之上一同罷出御用向拜承仕度段一同申出候處氣分相に候はゞ御役方旅宿へ被差越可被仰聞素太郎儀備後助旅宿迄罷出候樣再度御渡有之候に付備後助旅宿へ兩人相揃控居候內御軍勢被差向兩人共御不審之趣有之松平安藝守樣へ被成御預候段被仰渡候由御名代肝要之御用向は御末家樣方御名代へ被仰渡最前御授振共違却仕候御取扱而已ならず備後助御預之次第件々幕府之御處置難得其意畢竟暴威を以相壓し候策と相見實以不堪憂憤候右御裁許振は御末家樣より追々被仰立候趣齟齬仕被仰渡之次第も不相立儀に候素より御末家樣方に於ても御受込難相成筋を以來二十日迄に御返却相成候御樣子にも被相伺候得共臣子之分難默止不取敢長防士民中差出候歎願書尙又當役中之分共一同御末家樣へ差出置候に付御周旋御盡力素より可被爲在之處幕府是迄の

御所置振且兩國之儀に付ては從朝廷迫々被仰出之儀も一切御遵奉無之由相聞候次第にては迚も衷情御酌分は有之間敷被相考從來被爲對幕府へ御信義不被爲失候樣にと厚く御取扱有之此度之儀も條理を盡し被仰解候事に有之候處其末今日之次第に立至り候段遺憾至極之事に有之候處此餘は曲直之有る所天人共に知る之理なれば御國内一團之正義と相成戰期に臨み臣子之分を盡し平生之鴻恩を可奉酬之外更に他念無之候此段能々可被相心得候事（五月）

十八日田坂半右衛門の北第二大隊軍監を免す十九日夫人萩を發し山口宮野殿に移る公奥番頭上山縫殿を遣はし小重一組を贈り且つ其從者に酒肴を賜ふ同日井上聞多を奥阿武郡一手兵の參謀と爲し清末侯を輔佐せしむ石州方面なり二十一日小幡圖書を北第五大隊用係に田上宇平太を其軍監と爲す同日政府は書を沿海地方の代官役に下し幕府軍艦の恐るゝに足らざるを示し以て民心を鎭撫せしむ

一筆致啓達候幕兵軍艦を以沿海之地を脅かし候儀も可有之に付海岸居住之者不令騷擾候樣追々沙汰被仰付尙又防禦心得方之儀御直書付御軍令等にも被仰出候付ては方角々々頭立候面々無疎事に有之候得共當節にても下々兎角令騷擾候體も有之由相聞左候ては異變之節は被想像候元來軍艦一艘之乘組人數三百人としても揚陸は二百五十人位にて四艘にて漸く千人前後之事に付大敵と申にも無之候處一途幕之海軍へ眼を着け居候ては陸軍之御手組へ差支候氣味も有之彼是駈引も有之事と被相考候縮る處前斷之主意を以居民克々御鎭撫相成候樣存候別紙幕船付立御心得にも可相成に付差越候間居合司令士中へも御廻し可被成候爲旁得御意候恐惶謹言

五月二十一日　　御國政方各中

二十三日虛無僧の封内に入るを禁ず間諜を防がんが爲めなり二十五日楠公戰死の忌日に當るを以て祭事を修む手廻頭柳澤備後命ぜられて之れが主任たり二十七日老臣毛利豐之進に大津郡指揮役を命じ代官役長屋又兵衛を以て其參謀心得と爲す又内藤三郎助に命じ小寺昌二郎に代り岩國軍監たらしむ二十九日使を四方に馳せ封内の關戍を戍嚴し又小姓大庭此面木梨精一郎を山代に使番野村右仲

を清末馬關に遣はす共に公の親旨を承け其地の將士を慰撫奬勵するなり軍政掛大村益次郎を生雲に遣はす石州口軍務に服せしむる爲なり二十九日益田孫槌に萩城代役を命じ有事の日は其家兵三小隊を以て山代口に出戍せしむ但其隊中現に第九大隊に編入せしものを除く六月二日內殿成り夫人移て之れに居る時に幕府既に我が支藩の歎願を斥け來襲の日測るべからざるを以て之れを士民に告示して警戒す其文に曰く

去月二十六日御支封樣御名代中藝州江波港に於て今般御歎願書幷此御方御家老中士民歎願書共被相添安藝守樣へ御依賴被差出置候處同月二十九日新港へ御使者被差越右御歎願筋於幕府御採用不相成段御傳達有之不得止次第にて御手切に立至り候付何時急襲も難測候條彌以不覺悟無之樣被仰付候事

而して防長二州の士民は藝藩に依り上疏哀訴す其文に曰く（以下二通の書は七月に至り一は藩を經て朝廷に達せり一は之れを諸藩に傳事は別章に見ゆ）

長防士民誠恐誠惶頓首再拜昧死して上表

伏惟天日照明有時て雲霧是れを覆ひ盡力竭誠不幸にして讒誣其間に生し候事古今之通患と奉存候主人父子多年力を公武之御間に竭候處不圖も今日之勢と相成進て天日之明を拜する事能はず退て自訴る所無之二州士民手足之措處を不知日夜天地に號哭仕候外無御座就ては鄙野無智之小人是非得失を辨得不申只管相考候は主人父子曾て恐多も天威咫尺之明詔を奉じ親敷將軍之委託を受け敢て寧處不仕候處一旦御譴責に相成百方歎願仕候も微衷を明す事不相叶爾來深く自罪し戒慎恐懼情實を露呈し日夜寃枉之雪かれ候を仰望致候處再び軍勢被差向御難題被仰出候事に相成候ては何共其故を不奉伺畢竟雲霧明を覆ひ讒搆上を誣候故にて決て聖明叡慮に無之と奉存候其證は癸亥攘夷期御布告相成候節於關東諸有司勅諚台命奉承無之より以來不臣の行欺罔之跡前後相望顯然明著遂に外夷を誘ひ攝海闌入せしむるに至候ては要脅最甚し如斯朝威日々御萎靡に被爲向正邪混淆是非顚倒仕候は偏に奸邪事を用候故に有之然ば今日之事疑無之候就ては臣子之分今日之急に差迫り候ては身を以て君難に殉ひ平

生之恩を報候外他念無御座二州擧て決死之覺悟罷居候全以奉對天朝不遜之心底は毫末も無之天地鬼神に誓ひ奉申上候幸に天地いまだ二州士民を遐棄せられず候はゞ再び雲霧を拂ひ天日を拜候時も可有之候得共恐くは千載冤枉を懷き地下に瞑目不仕事と奉存候故せめては鄙衷を御照臨被爲成下度一統昧死して奉哀訴候誠恐誠惶頓首泣血謹上

又別に書を諸藩に致し一藩決心の存する所を告ぐ其文に曰く

長防士民泣血再拜謹で諸藩明公閣下に白す主人多年勅旨を奉じ台命に從ひ東西奔走心力を竭され候處奸邪蔽明冤枉再生仰て天に號する所なく俯て地に哭する所なく今日之急に迫候事君臣之不幸御憐察可被下候然れども事既に此に至り候ては最早冤枉を辨解も不仕又哀號して御救援をも請奉らず二州士民各臣子之分を盡し死を以主恩に報ひ知己を千載之下に待ち公論を百世之後に仰ぎ候外心中無他事候誓て奉對天朝不遜之心底無之鬼神照明森列敢て赤心を披く所に御座候間一樣暴擧之者と不被成御思樣奉願候且亦弊國之存亡は固より

不論候處弊國之事よりして自然天下分裂之勢を開き外夷之術中に陷候樣可相成哉と是而已遺憾に奉存候就ては何卒諸明侯力を戮せ心を同し上天朝を奉戴し下幕府を扶け早く姦邪を誅鋤し忠良を登庸し天下をして正邪判然名義相立ち人心一致仕候樣御盡力有之度右樣無之ては數年を出ずして遂に神州をして外夷に棄與せられ候樣相成候事必然奉存候間深く御遠慮被爲在度身外之至願惟此一事に御座候偏に御亮察被下度泣血奉懇告候頓首謹言

四日出羽孫兵衛に命じ笠原隼之助に代り長府の軍監たらしめ引田新左衛門をして木梨連に代り德山の軍監たらしむ五日吉川監物其臣吉川勇記目賀田喜之助をして來りて公の起居を候し併せて前日來嘆願の顚末を申報せしむ事は別章に詳なり公之れを書齋に召見し諭告して曰く事已に今日に至る決死防戰の外復た施すべきの道なしと乃ち茶菓を兩使に賜ひ托するに十六連銃一挺を以てし之れを監物に寄贈す別に勇記喜之助に物を賜ふ差あり情報に據れば當時環攻軍の配置大畧左の如くなりしと云ふ

藝州口總督紀州侯德川茂承海田に營し先鋒二十日市に陣し第二陣草津に在り高田藩榊原氏兵大野に陣し彦根藩井伊氏兵玖波に陣し其先鋒原田中根小方に陣し大垣藩戸田釆女宮島に陣し幕府兵千人隊歩兵隊三兵隊廣島に留る（千人隊は小笠原壹岐守に屬すと云ふ）石州口は濱田藩及福山藩の兵横田益田市に陣し紀州藩別隊の將安藤氏之れを督し松江藩内の宇和田に屯す九州口は熊本藩の兵豐前足立廣壽山に營し久留米藩兵大里に陣し柳川藩兵城野新町に陣し安志及小笠原近江守等小倉支家の兵小倉藩老臣島村原兩名等と兵を七隊に分ち門司田之浦等各所を分守す

六日高杉晋作を以て海軍總督と爲す七日洞春公遺愛の軍器其他の重器を山口に移す同日幕府の軍艦上ノ關大島郡を砲擊す之れを開戰の始めと爲す幾も無く石州藝州小倉の三方面均しく兵火相交り長軍頻りに利あり（事は別章に詳なり）八日公氷上山に至り第一大隊陣營を巡視し銃陣操練を觀る時に江戸拘禁者前後歸藩す（幕府より一部は汽船一部は和船にて二回に廣島に送付し藝藩より岩國に護送して交付せしなり）遠藤太一郎波多野藤兵衛奥平數馬作間克三郎坪井信道森重百合藏小島庄助矢島新左衛門加來四郎兵衛宮田友佐幾度一郎治友近彌四郎林清藏其外足輕以下の卒二十八名幷百合藏妻清藏娘中間組源七母等先づ山口に抵る九日公父子便殿に出坐し遠藤以下の士を召し江戸幽囚中の事情を聞き其困苦耐忍の勞を慰撫す因て兩公大書院に轉坐し遠藤以下を第二席に坐せしめ順次杯を賜ふ足輕以下は中庭に坐するの例規なるも是日偶〻雨降るを以て板椽に坐せしめて杯を賜ひ公父子奥殿に入るの後ち猶遠藤以下の士卒一般に下物一種を陳し酒を賜ひ蔚情を散ぜしむ尋て（十二日）仲子孫太郎伊藤源助大野四郎右衛門足輕以下十九名山口に抵る欵待一に遠藤多一郎等と同じ十日井上聞多を清末に遣り清末侯を促し阿武郡生雲村に出馬せしむ石州方面防禦指揮の爲めなり後ち數日井上は先づ自ら石州に赴く十二日裝條銃隊第一第二第三隊の中各〻一番及三番中隊を土床口に差撥し（此日祖式宗輔の鎧峠關門守衛を免じ内藤員伍粟屋孫二郎神村熊次郎氏家彦十郎を以て之れに代ふ）十四日藩士生計の困難を救濟せんが爲めに令して俸祿の幾分を貸與す

御家來中所帶難澁之處當今之形勢にては上下一統不融通相成候然共高祿之面

々は米價高直故一端の操卷可相調筋に候得共兼て難澁之所帶邊にて藝石其他戰爭一條に付ては器械彈藥等兵備之物入須臾も相調不申ては難相濟甚難澁之趣に相聞へ候に付格別之御詮議を以白紙切手高百石に付三石宛昨年之振を以て當盆前貸渡被仰付秋に至り二の割石之内を以差引直樣通用被仰付今三石當暮に至り來務引當にして貸渡被仰付候事

藩制士卒に祿米を交付するの法は毎年八月祿額百石の率四石五斗の米券を與へ券面記載の各郡代官役所へ出し其米を受けしむ之れを堪忍料と稱す而して其餘の祿は米穀秋熟の後十一月に至り悉皆其券を交付す之れを二之割と稱し米を得るの法前堪忍料と同じ本文白紙切手と云ふは官府士卒の困難を慮り時に臨み此米券を制し士卒に貸與し賣買を自由ならしめ一時融通の便を開き秋成の後二の割券交付に際し前に貸與したる白紙切手の米額に應じ其券を減じて交付し償却に充つ而して米券記名各郡代官役の内萩府を隔つる數十里にして運輸不便の場處あるを以て各士の祿額を計り萩府より五六里卽一日程の代官役所食米運輸に便なる地の米券若干を與へ其餘の券を適宜に賣却し得る所の金を以て生路の用に充つるものとす

同日大組中間頭に命じ十八日より一中隊を率ゐ姑く山口に出衛せしむ十五日公、奥番頭渡邊肥後助を大島郡に遣はし戰狀を視察せしむ十九日諸港に令し他國の船舶を檢索し且つ兵器糧米輸送を抑止せしむ其文に曰く

一此度襲來之敵兵追々海上令徘徊候處日本製之船乘組居候部も有之候事に付商船に相紛れ容易に碇泊或は海岸近く乘廻り候儀も難測依之向後は御國通行之商船一切差留船中委細見究不審筋無之候はゞ通行差免候樣被仰付候事

一他國より兵器彈藥幷米穀等積込來候船之儀は通行差留置尤粗暴之取計無之樣可取捌事

一譜代大名之船は前條之物々には不拘一切差留置尤商賣船に相違無之段見究相詰候上は通行差免可然候事

一萬一此方之申諭承引不仕船も有之節は於其場嚴重處置可致候事

一右船之儀物筋へ相達候上取捌被仰付候尤急場難閣儀も候はゞ臨機之取計可任時宜候事

二十日淸末侯石州方面の戰地に至らんとし山口に來り公に謁す侯尙謹慎自ら居るを以て憚る所あり實は猶山口に留り未だ急に戰地に赴かず二十一日小姓井上兵部を赤間關に遣はし軍事の實況を視察せしむ內藤佐兵衛を藏元役とし現勤を除き武具方用掛と爲す二十二日遊擊隊總督毛利幾之進を以て小瀨川口諸兵總指揮官と爲し河瀨安四郎を以て用所役と爲し小

瀬川口進戰諸兵指揮役參謀を兼ねしめ進擊軍總督座事務取扱故の如し石川小五郎此時命に由り河瀬安四郎と改名す嘗て遊擊軍總管にして客歳八月毛利幾之進遊擊軍總督に任ぜられし以來總督座事務取扱を命ぜられて總督に副たりしなり久保無二三を以て益田孫槌の參謀と爲し井上小太郎と協議事を處せしむ同日使番役坪井竹槌を津和野藩に遣り其方嚮を質し且つ幕府派遣の軍監長谷川久三郎等の交付を求めしむ坪井の辭令は長幕所見を異にし遂に今日あるを致す是れ主として事情の不通に因る我公軍監を迎へ備さに意見を叙し之れを幕閣に達するの勞を托せんと欲すと云ふに在りしと云ふ

當時防長士民の名を以て津和野藩に投したる書あり或は曰く坪井之れを携へたりと其文左の如し

此度幕兵領内へ亂入無辜の人民を殺戮し米穀を掠奪し不正不義の所業相働候付無餘儀二州士民申合せ義兵を起し是れに應じ申候右に付貴藩御議論屹度承知仕度候其御旨趣明晰に被仰聞候はゞ一統心得方も有之事に御座候先達て以來城下へ御引受相成候幕吏長谷川久三郎須藤鎧三郎其外速に御召捕御引渡被成度奉願候萬一於貴藩御處置不相成候はゞ私共御城下迄罷出直ちに幕吏へ可及應接候

寅六月　　長防士民中

因て梨羽又次郎をして徒士銃卒若干を率ゐ野坂に赴き坪井の命を聽き護送の事に任ぜしめ又致人隊司令三浦政三郎をして其小隊致人隊は射擊者十五名を以て組織せるもの を率ゐて均しく野坂に赴かしむ同日野村右仲を小瀬川口及び大島郡に兒玉采女を馬關に遣はし坪井竹槌も亦津和野の使命を畢らは石州益田に至り均く戰士の勞を慰せしむ二十三日小姓佐々木武雄佐久間左輔を藝州方面に宍戸源太郎高杉辨藏を石州方面に遣はし司令士の補缺と爲す二十四日祿額百石以下の士にして戰死せし者に銀幣二百五十目を給與することを定む二十六日渡邊肥後助を以て北第二大隊用係と爲し野坂口に赴き佐々木式部と協議し守備に任ぜしむ同日又小郡嘉川村屯集の浪士十九名をして淺尾口に出發せしむ公因て之に謁を賜ふ二十七日公湯田附近を散策す二十八日梨羽又次郎等津和野より幕府軍監長谷川久三郎徒目附

須藤鎧三郎小人目附清水直次郎及び長谷川の從者六人を護送して山口に歸る因て慶福寺下宮野村にあり に置き禮を以て遇し從卒二十七人は之れを石州益田に護送す

四境戰の章參看すべし二十二日夜坪井竹槌津和野藩に至り幕吏の交付を要求せしに二十三日津和野藩の重役來り告るに其の要求に應ずるときは忽ち幕府の討伐する所と爲り藩國滅亡すべきを以てして哀を請ひしも竹槌は津和野藩之れを捕ふること能はざれば我れより進みて逮捕すべきの旨を述ぶ乃ち一時の猶豫を請ふて歸る時に梨羽又次郎等德佐に在り二十三日午後に至るも津和野藩の報なきを以て書を竹槌に送り同夜半に至りて尚報あらざれば其衆擧て津和野に進むべきことを告ぐ其書の達せしとき津和野藩鹽屋彌十郎竹槌の宿所に在りて之れを見即夜決答すべきことを約し竹槌は衆心を鎮定するが爲めに一たび德佐に歸る翌曉津和野藩重役書を以て竹槌を招く翌二十四日竹槌及び又次郎は津和野に至り老臣大岡平助物頭新井七之丞清水保右衛門目附役渡邊儀右衛門鹽屋彌十郎等に會し平助等は暫時の猶豫を請ひしも竹槌等之れを肯んぜず二十五日津和野藩渡邊儀右衛門山田管司を長谷川久三郎の旅館に遣はし長藩主より嘆願の旨あるを以て其山口に來らんことを求め且つ警衛として梨羽又二郎を野坂に差擬せし旨を告げ若し聽かずんば津和野藩の禍目下に迫ることを述ぶ久三郎終に津和野を出で護送せられて德佐に至る乃ち長谷川以下九人は山口に送り從者二十七人は二十八日致人隊及び兒玉小民部の部下兵若干を以て德佐より土床を經て益田に護送せしめ後ち數日戰鬪線外に放つ 二十九日二宮登人を以て北第五大隊軍監と爲し田上宇平太に代ふ

第二十四章　接幕事件の進行（其一）

公世子以下出藝に關する幕令○第四の内々演說書○宍戸等發藝○高森駐在○出藝期日猶豫の歎願○藝侯の内使山口着○公以下名代の決定○宍戸一行の再出藝○在藝使滯寓中の注意書○四家名代の演說書○幕令に對する藝藩の意見○國泰寺出頭の令○宍戸の疾病○幕命に對する在藝使節の意見

四月二日小笠原閣老は公父子孫三支侯吉川監物及び老臣宍戸備前毛利筑前を廣島に召致する幕命を發し限るに四月二十一日を以てし同時に宍戸備後助以下使節一行には歸藩を命じ又甲子年江戸藩邸籍沒に際し逮捕監禁する所の藩士等は妻子を併せて還付すべきを以て收受者を廣島に出すべきを命じ藝藩をして之れを傳達せしめ又別に竊に藝藩に示すに公父子孫は代人を以て事に當らしむるも妨げなし等の意を以てす藝藩乃ち寺尾生十郎をして先づ之れを我使節に内報せしめ既にして幕命の宍戸に傳ふべきものは更に小山彦太郎をして之れを宍戸の

館に致さしめ我が藩主父子及び支藩主等に傳ふべきもの亦小幡宗七郎龍神多圖見に付し之れをして齎し來らしむ八日山口に來る召致の期初め四月十五日を以てせんとせしも改めて二十一日とせり

（幕令）

毛利大膳へ

毛利大膳家老

宍戸備前

毛利筑前

右之者共へ相達儀有之候間廣島表へ可差出旨先達て相達置候處若病氣候とも押て來二十一日迄に罷出候樣可被申付候

四月

毛利左京へ

本家毛利大膳父子幷長門總領興丸へ申渡旨有之に付先達ては其方へ相達候儀有之廣島表へ可被罷出旨相達置候儀に付若病氣候とも押て來二十一日迄に可被致出藝候尤押ても難罷出候はゞ重臣之内一人可被差出候

四月

（德山淸末岩國前同文但し岩國へは本家の二字なし）

宍戸備後助

毛利大膳毛利長門幷長門總領興丸へ相達候儀有之候間來る二十一日迄に廣島表へ可罷出候若病氣候はゞ末家幷一門之内爲名代可差出候右之段早々罷歸り大膳始へ可申達候

四月

宍戸備後助

今般毛利大膳父子御裁許相達候に付ては一昨子年江戸表に於て御預相成居候大膳幷末家々來妻子とも廣島表に於て引渡相成候に付到着次第猶可相達候間請取のもの差出候樣可致候此段大膳始へ可申達候

四月

宍戸備後助始一同御用相濟候間早々當地引拂歸國候樣可被相達候

四月

松平安藝守家來へ達の覺

一大膳父子幷長門總領興丸等若病氣候はゞ末家幷吉川監物右名代をも相兼不苦候事

但末家吉川監物等も病氣にて名代差出候儀に候はゞ右名代のものは本家名代には難相成候事

一大膳父子幷長門惣領興丸爲名代差出候はゞ一人にて相兼候共不苦候事

一相達候期限に至り名代も不差出候ては不相濟候儀に付精々行達無之樣猶厚相心得可申談候事

一長府清末は遠路之儀に付時宜次第聊期限相後れ候ても不苦候事

右等の趣宍戸備後助幷此度使者として彼地へ相越候ものへ厚申含候樣松平安藝守家來へ可達候事

在藝使節は幕達を得て其日直ちに一面急使を飛ばして狀を山口に報じ一面二通の演說書を藝藩に致し日限は多少の延期を與へんことを請ひ又使節の陳供未だ至らざる所あらば更に下問を受けんことを請ふ（左揭二書は藝藩より之れを幕吏に出し指揮を請ひしに速に前命を本國に達するに力むべしとの意を付箋して還付せり此日使節は又幕命に對し備前筑前二人の出藝は公父子病を以て出る能はずんば其代人たるべきの意か將た別に二人に命ずる所あるべきの意か且つ二人若し重病を以て出る能はずんば如何と質問し二人は公父子名代の意に非らず別に命ずる所あるなり但病あらは其旨を申告すべし代人を出すに及ばずとの說明を得たり）

（其一）

今日御使者を以御達之旨謹で奉畏候然る處主人父子幷に興丸儀被仰達之旨有之當月二十一日迄に御當表可罷出との御儀に御座候得共重大之事件に付本末打合せ尙去年以來追々申上候通り士民一統無餘儀情實も有之說諭方等手數相懸り候は必然に候得ば主人父子興丸は勿論名代之ものにても急速罷出候儀如何可有御座哉就ては二十一日迄に當表へ罷出候樣萬々無覺束候半と只管心痛

罷居候何卒右期限少々御日延之儀相願度候間程克御取成可被下候樣奉願候以上

四月二日

（其二）

去冬大小監察御役樣方御下向御尋に付ては衷情底意無腹臓申出候樣との御事に付巨細申上候處孰れも被聞召屆御落着御承知にも相成大膳父子多年之心事闔國士民一統之情實ともに明瞭徹上仕候儀難有奉存候乍恐大小御監察御役々樣方は天朝幕府之御耳目に被爲代重大事件御承紀之勅命台旨を被爲蒙逐々御下向に候得ば素より公明正大至當之御耳目を以御見聞被爲在候事は申上候迄も無之是非善惡忠邪曲直御洞察可被爲在候處一旦御役々樣方においては已に巨細被聞召屆父子誠意闔國情實とも御落意御承知との御事に候得ば此餘御沙汰筋縱令於天朝幕府御裁斷被爲在候とも肝要御耳目に被爲代御直に御見聞被成下候御役々樣方御落意御承知之筋に相違は仕間敷とのみ奉存候其邊を以國内をも精々鎭撫相加罷在候處今度之御模樣振にては何か闔國意外の御沙汰にも可相成哉に申觸候ものも有之元より未發之儀眞僞は不分明に候得共去冬父子苦心焦慮之筋巨細申上置候處右之筋未だ徹上仕兼候にても可有之哉と尙又苦心焦慮罷在億萬一上下之情實齟齬よりして不容易皇國内大關係之次第にも立至り候ては遺憾千萬之儀に候得ば何卒此度御下向御役々樣方格別之譯を以今一應私共被召出篤と情實被聞召屆被下候樣相成間敷哉然る上尙も被聞召分がたき儀も候はゞ萬々不得止儀に付不及是非次第と令覺悟之外無之儀と苦慮之餘り此段申上試候間御採用被成下候得ば萬々難有奉存候此段不惡御取計被下度との事

會、内藤佐兵衛及び四末家の使者廣島に至る然れども既に二日の幕命ありしを以て内藤等齎らす所の支侯等出藝辭退及び國情陳述書は之れを提出せず宍戸一行より情を寺尾生十郎に告げ陳述書の謄本を交付す四日宍戸等一行は藝藩を介して明日を以て一同歸途に就くべきを幕吏に申告し又藝藩吏員及び寓寺の僧等

に物を贈り數月間の厚遇を謝し五日宍戸等廣島を發し翌六日高森に着す内藤佐兵衛幷に三支藩及び岩國の使も亦宍戸等と共に歸途に就く（小田村素太郎赤川又太郎等は六日廣島を發し七日高森に着す）七日小田村赤川は書を山口に送り政府員の中速に高森に來らんことを促す山口に在りては在藝使節前月三十日の書を得二日書を廣島に送り幕令愈〻下らば宍戸備後助等は其意見の如く幕命に從ひ退きて先づ高森驛に止り藝使の山口に來りて幕令を傳ふるを待ち公父子等に代りて更に廣島に赴くべく其順序は更に報道すべきことを告ぐ既にして使節より幕令愈〻下れる報を得て四日又之れに報ずるに宍戸備後助は高森に歸りて命を竢つべく小田村素太郎は山口に歸り事情を報告し政府の議を待ち再び高森に至るべく政府は又別に政府員一人を高森に出し協商せしむべきの意を以てす

（政府員よりの書）

三月晦日之御飛札相達別紙數通之趣共委曲致承知候先以其御地備後大夫初め各樣方御忠壯被成御滯在珍重之御事御座候扨は幕議兎角に動搖如何に閣老小笠原初め幕曹心事窮迫とは乍申同二十六日以來藝迄相達候次第實に不條理萬々於藝も幕長中間に立取扱振餘程苦心難堪事に御座候此御方に於ては昨年來國論確固たる事にて更に可爲驚駭事にあらず出先之幕吏不定論眼前天下之紛擾は知ながら非を遂候心底に相見へ不得止事に付備後大夫初め第一楯此度引取之幕令相下り候はゞ被仰越之通片時も速に高森迄御引取相成候樣にと存候藝使も明日中には當鴻城到着にて幕令可相達就ては御父子樣御出藝之上暴令相下候抔不思寄馬鹿押强き事不堪切齒憤懣之次第にて御貴族方御名代と申邊にも決て不相調其節は猶又從來之國情演述御斷之御使節も態と可被差立御名代之儀は追々申立之通り何處迄も備後大夫にて被爲相濟度右御使節一同高森より又々藝城へ可被差出との御内評議に御座候右手順等之儀は猶又篤と御會議之上追て何分之御差圖も可有御座昨冬大小監察下藝御尋之節も御支藩樣幷家老總代として備後大夫被差出於我藩は大夫之眞僞之差別なく又二州中に溫激兩端は毛頭無御座處を以飽迄可及理解御確定候間其御含を以乍御苦勞一應

高森迄御引取暫彼地御滯在相成候樣存候自然幕使御國へ差向候節は是又兼て御決定通御國境にて御引請相成一歩にても御國中へ踏込は堅拒絶勿論之事に候閣老初幕吏日增困迫朝暮變換之幕議何時暴發も難計次第に付此度之事件且來る五日迄紀彦榊等之諸兵持口出張之布告せしめ候段共御兩國中へ御布告相成り彌以不覺悟無之樣との儀被仰出候御都合に御座候内藤左兵衛其外御支封御使節共追々其御地參着之由就ては此内以來追々得其意置候手繼如何之御運に御決相成候哉此往之御都合振も有之左兵衛使節相濟候はゞ自分皈國先達て一人差返し何分之趣令御注進候樣御傳達可被成候云々(四月二日)

(同上)

一昨二日夜御仕出之御飛札昨夜半相達別紙幕達寫其外委曲致承知候此度備大夫初御引取相成候樣との御達の上は一昨二日自是得御意置候通迅速高森迄御引揚暫彼地にて御滯在相成何分之御指揮被相待候樣にと存候尤素太郎樣には藝城御發途相成候はゞ巨細之情實爲御注進一應被成御歸山被仰上猶以往々之所篤と御評決相成候上又々高森迄御出浮可被成候孰れ決局出藝一件は最前之御行懸りも有之乍御苦勞備大夫初是迄之御一手を以御取計被仰付との御事に御座候尤被仰越候通素太郎樣御歸山に不拘備大夫御氣付筋爰許粗御決議之趣共御打合として各間一人高森迄早速可罷出候當度之期限來る二十一日と有之候處昨年來幕藝迄追々國情及演說置候通士民彌增疑惑を生じ終に決局御所置振をも疾く致承知居候事故彌以鎭撫方難澁千萬就ては其御地より不取敢期限御猶豫之儀被相願候處如何にも御尤千萬に付藝使今明日中到着幕令相達候上は即今一應之御請且又右御演說通期限御猶豫之儀態と御使節被差立候御都合相決居申候左候得ば自然期限一兩日相延候とも申譯は相立可申と相考申候此度御達中に江戸幽囚面々相渡との事何卒一發に不立至内甘く御請取相濟かし祈所に御座候就ては請取人等の儀早速其御沙汰可相成候幕達巨細致披見候ては彌增不堪切齒憤懣今更可驚事には無御座候得共貴諭之通幕究迫之氣相を外し渠等不條理中自是は飽迄條理を立苟も天下之耳目ある人をして漸々御正

義之御正義たる所を知らしめ候儀肝要之御事奉存候尤一發之機は後れず早まらず全軍之氣鋒令充滿候程之時機不取失樣第一之御事に奉存候云々(四月四日

既にして廣澤藤右衛門高森派遣の命を受け將に七日朝を以て途に上らんとす會、第二奇兵隊暴發の飛報六日夜半を以て山口に達す此事我名分に關するの虞あるを以て廣澤は高森に至るに先ち急に上ノ關に赴き鎭壓の手段を施さんとし七日未明山口を發し午下富海に達し一書を高森に飛ばせ舟行上ノ關に赴く政府又人を高森に走せ變を報じ急に藝藩を介して狀を幕吏に報ぜしむ高森に在りては政府員至るを待ち一會議を經て後ち小田村をして山口に歸らしめんとせしに廣澤の報を得て其未だ急に至らざるべきを慮り八日朝將に小田村をして途に上らしめんとするに際し藝藩內使櫻井與四郎寺尾生十郎深町三郎左衛門將に其日午天を以て高森に憩ひ德山に一宿し翌日山口に至らんするの報に接す是に於て乎使節一行は書を裁して之れを山口に急報し且つ廣島を發する前寺尾生十郎の語る所に依れば幕府の別手組廣島に來り小笠原閣老等の速に處分令を發せざるを憤り頻りに之れに迫るを以て藩藩は將に其鋭氣を避け永井主水正等を城中に招き藝侯より幕府の亡狀を詰り其屈色あるを持ち漸次勸說する所あらんとするの意ありと云ふとのことをも記し且つ小田村は高森に於て一たび藝藩內使と應接し而して後ち藝使に先ち飛輿山口に歸らんとし此意をも山口に報ず既にして小田村は藝使に面晤し薄暮途に上り山口に歸る其夜使節は急使を廣澤に飛ばせ高森に至るを止め山口に歸りて藝使に面接せんことを勸め九日赤川又太郎高森を發し新湊より船に搭し十日朝廣島に着し脫兵事件の報告書を藝藩吏員に交付し翌朝藝藩吏員より之れを小笠原閣老に進致せし旨を聞き其夕赤川江波港を發し翌十二日夕高森に歸る別章に詳なり第二奇兵隊事件は宍戸等亦大に憂慮する所たりしなり

(廣澤より小田村赤川への書)

本月四日夜藝城より御仕出之御飛札昨曉到着委曲致承知候中略追々得御意置猶又當度之被仰越通り小弟高森迄出浮以後之御取計振篤と御打合仕度今朝鴻城

發途明八日には必々御地到着之覺悟に御座候折柄昨夜半上ノ關縣令より急報之趣有之疾御承知相成候哉相考候實は南奇兵隊陣營大混雜有之終に司令士初兵卒中暴發にて柳井邊出掛居候段申來り片時も難被閣次第昨冬來藝城において應接をも幕不條理中自是は飽迄條理を立漸々列藩へも御正義相糺候程に立至り是迄之苦心不容易事にて既に來る二十一日期限にも有之何處迄も曲直を爭ひ決て毛頭不次第之儀無之樣有之度就ては彌增幕府困究終には渠より兵端相開候程に致度左候得ば堂々大義名分凛然相立々派之戰爭とのみ存詰候處今日に到り自然右隊中之者藝地へ向ヶ暴動いたし候ては兎角此迄之苦心も水之泡と相成可申悲歎此時に御座候右懸念不大形事に付不取敢上ノ關邊迄罷越是非共鎭靜仕度事にて俄に未明發途當富海より乘船之手都合にて右件以往鎭不鎭之趣に寄候ては藝迄相達置候方都合宜布次第も可有之哉に付何れ出張手段を盡し候上にて來る十日晩迄には高森へ出浮可申相含居其上にて萬御示談可仕夫迄之處何も御見合可被下候藝使今晝後山口着可相成左候得ば明朝飯後於客館御引請相成都合に御座候當度之幕達一應之御請期限御猶豫願御使者として小笠原仁左衛門被差越右藝使御勤濟之上明後九日出立之筈にて十日晩高森泊に可相成左候得ば同晩は是非々弟事出浮右演說書等猶又御示談可仕相含居申候期限御猶豫願は聞不聞は扨置兎角急速附込置候方可然との事に相決居申候既に戰期も差迫り候折柄南奇一件實に可惡共餘りある事心事御推察可被下差急匆々如此に御座候他は拜青萬可申上候此段備大夫へ被仰上可被下候

（四月七日書）

（小田村赤川より政府諸員への書）

態と以急飛得御意候今朝岩國より先觸到着藝州櫻井與四郎寺尾生十郎深町三郎左衛門今午高森休德山泊り明日宮市休山口泊り之由申來候罷越候儀は未だ如何之用向歟存不申候得共拙生輩藝城發程前夜寺尾生十郎來訪申述候は幕議昨今餘程切迫に相成候近來幕之手に別手組とて旗本二三男を選び組合候一隊御座候此分過日大坂より藝地到着にて小笠原閣老其外防長御處置發令等猶豫

いたし候を致激怒是非とも發令爲致承服度段せり込既に大坂においては永井監察付御小人目附栗田耕一其外一人令暴殺候次第故自然彼等申分不相立候時は小閣永監を併てつめ腹にても爲切候勢にて小閣以下も殆ど困究之由就ては生十郎氣付にては此所十分彼之鋭氣をはづし避實衝虛悍馬を御する如く可然に付明朝は藝公より永監以下城内へ被召寄是迄之幕暴を難責し彼等屈色有之候上にて於藝州長防御處置に付見込も相付周旋振も有之段徐に說諭被致候手筈に相決候由右之次第に付藝政府より自然火急山口へ罷出候事も可有之に付此段内々御含迄に拙生抔へ申置との事にて引取申候今般櫻井以下山口へ罷越候儀も此等之事歟と奉存候扨又宍大夫には當月二日之幕達早速山口へ持歸不被申ては不都合之次第に候所生十郎抔へは先づ辭を設け如左申置べく候宍大夫舊冬以來條理を盡し幕府向へ士民情實被申述御落意御承知と迄に相成候所又候此暴令一發致候分を山口迄取歸り國内へ布告致候ては實以人心動搖又々疑惑を生じ鎭撫方も難澁に付不堪苦慮候尤御達書寫之分疾に山口へ差遣置候事に付幕令は寡君以下承知之事に候故爲旁一應高森へ滯居鎭靜向見合候次第に御座候と相述候都合に宍大夫申合取計置可申素太郎儀は生十郎話頭之趣其外爲注進急速歸山下意に候得共貴局より御一人高森へ御出浮相成との事に付宍大夫引合せ令合議其上にて貴局御方一同歸山之積りに御座候然處御繁劇にも可有之歟今以御出浮無之に付今午より當地出足歸山に決居候所へ前段藝人先觸到着に付一應於當驛應接相濟候上先越にて飛輿罷歸候事に付委曲之儀は御面談に付申候尤最早貴局御一人途中迄御出浮候はゞ宍大夫直に被申談度儀も有之に付是非とも高森迄御出可被下候此御用狀御途中にて御開封被成御承知此飛脚を以其儘山口へ御送越可被下候此段宍大夫被申付候御當役方宜敷被仰上可被下候（四月八日）

山口に在りては八日藝使小幡宗七郎龍神多圖見來着し客館に出で二日の幕令を傳へしを以て同日小笠原仁左衛門に命じ公父子及び老臣の書を齎し途中高森を過ぎ宍戸等に會見して廣島に赴かしむ（小笠原は即日發途せしに藝藩内使來藩の報ありしを爲め故さらに一日間宮市に滯在し十日再び發途せ

せしめ其日高森に至る

（公及び世子の書）

拙者父子幷興丸共被仰達之旨有之來る二十一日迄に廣島表罷出候樣との事御使者を以被仰達廉々奉得其意候長防國情之儀は委曲家老共より其御方御家老迄迫々及演說置候通無餘儀次第之處此度御達之儀に付ては國中鎭撫方彼此手數相懸り急迫之期限萬一及延引候も難計と痛心罷在候間此段御汲取被成下期限暫御猶豫相成候樣幕府向程能御執成致御賴候（八日）

（老臣の書）

大膳父子興丸幷宍戸備前毛利筑前共被仰達之旨有之來る二十一日迄廣島表罷出候樣との御事御使者を以被仰達候趣主人より申聞奉得其意候然處國情之儀は迫々及演說置候通去夏御進發中毛利淡路吉川監物登坂仕候樣被仰出候以來人心疑惑不一形折柄漸鎭靜を加へ末家中病氣にも有之惣代として宍戸備後助其外出途仕候處大小監察方御下向之御運び相成其御地相扣居御尋之次第猶

大膳父子多年之誠意闔國士民情實共巨細申上御落意御承知相成就ては頓にも平常之御沙汰被仰出候事と而已奉仰望居候處先般末家中幷備前筑前とも廣島表罷出候樣との趣被仰達奉得其旨候得ども兩人共昨年已來氣分相今以瑳々無御座且亦閣老小笠原壹岐守樣御地御到着後追々御軍勢御出張に相成國內彌增疑惑を生じ彼是以早速御地罷出候儀甚難澁之事に付無餘儀御猶豫相願候覺悟に御座候處右以前一應之御請をも不申出內又々當度之御達振被仰出其次第は難奉窺事に候得共闔國意外之御沙汰筋有之哉に傳聞仕一統煩念罷在左候ては去冬天幕御耳目として御下向相成候大小監察被聞召屆候道も如何可有之哉と乍恐士民一統擧て悲歎怨望仕臣子之至情切迫罷在精々鎭撫をも相加候得共前斷無餘儀仕合一朝一夕之儀にても無之自然延期にも可立至と大膳父子始私共痛心苦慮罷在奉恐入候此段御推察被成下期限暫御猶豫相成候樣幕府向宜被仰立被下度此段程克御取成安藝守樣へ被仰上被下候樣偏に致御賴候（八日）

毛利大膳

家老中

（宍戸の書）以下二書は政府員と小田村と山口にて宍戸に代り作成し小笠原仁左衛門に付し宍戸に示し廣島に齎し行かしめしもの

毛利大膳毛利長門幷長門總領興丸へ御達之旨有之候間來る二十一日迄廣島表へ可罷出若病氣候者末家幷一門之内爲名代可差出候右之段早々罷歸大膳へ可申達旨奉畏大膳初へ申聞候依之申上候以上（四月十日）

（宍戸の書）

一昨子年江戸表に於て御預相成居候大膳家來幷末家々來妻子共廣島表に於て御引渡被仰付候に付到着次第猶御達被仰付候間請取之者差出候樣可致候此段大膳始へ可申達之旨御達之趣奉畏大膳始め へ申聞候依之申上候以上（四月十日）

十日藝藩内使櫻井與四郎寺尾生十郎深町三郎左衛門山口に來り即日客館に上り其使命を致す畢て酒饌を供し從者は之れを別席に饗し櫻井以下各々金幣若干を賜て其勞を慰す

（使者口上覺書）

此間以使者御達被申候御父子樣初御末家中等當月二十一日迄に廣島表へ御越被成候樣との儀に付ては兼々被仰聞候御情實も有之御配意不少儀と萬察被致不取敢内使者を以御樣子御尋被申度御模樣次第にては存付之儀も及御内話候樣被申含候事

是れより先き藝藩は辻將曹植田乙次郎を大坂に遣り毛利氏の爲め周旋する所あらんとし其事未だ成らざるの間に於て長幕間の應接破裂を來さんことを恐れ特に内使を派遣し我政府と謀り我をして一たび廣島に赴くの命に應ぜしめ以て破綻を防がんと欲せしなり時に廣澤藤右衛門は九日大島郡に在りて前日高森より發する所の藝藩内使來山の報を得翌十日山口に歸り（途上藝使に鯖山に逢ふ）直目付林良輔と共に藝使に接し翌日林良輔より答辭を致し且つ力を延期の事に盡さんことを囑せり

（口上覺書）

此間以使者御達御座候父子幷末家に至共當月二十一日迄其御地罷出候樣との儀付ては兼て入御承知置候國中情實之次第も有之心配罷在候段御洞察被成下以御内使者存慮被成御尋御内話被仰聞委曲主人父子へ申聞候處御懇情不淺辱被存候御瞭察被爲在候通不一形苦慮罷在候父子幷末家中孰も病氣にて難罷出且國情之儀は改て不能申候得共鎭撫方精々致心配期限迄には名代一人差出覺悟に御座候此段厚及御相援猶乍此上宜樣致御賴候樣被申含候事

此度被仰達候期限餘り急迫之儀に付自然延期立至り候ては不相濟事と甚致痛心居既に以使者一應之御請期限御猶豫旁致御賴置候付乍此上何卒四五日程にても御延期相成候樣御盡力被下度致御賴候事

十一日毛利筑前林良輔更に櫻井等に應接し畢て酒饌及び銀幣各一を贈る同日宍戸備後助を以て公父子孫の名代と爲すに決し又三支藩及び岩國に通牒するに各其老臣中に選んで名代を定め之れをして廣島に赴かしむべきことを以てす

是日吉川監物の臣目賀田喜助公館に上り監物の意期限中に名代を選み派遣するを以て至當と爲すことを述へ正に公及び政府の意と合へり

（廣澤より宍戸へ の書）

前略私事一昨九日朝飯後大島郡勘場へ藝使櫻井初め罷越候段小田村より急報到來直に發足昨十日朝飯後歸山いたし折柄途中鯖山において藝使へ相對使節は昨晝到着餘程急之事に付即夕於客館御引請相成林侍御史私一同及相對候處安藝守樣御父子樣御存慮之旨等篤と承知仕當度御達振に付て御決定之處殿道御名代被差出候都合にて幕令等閑に打捨て置候樣の儀は毛頭無御座候邊を以不取敢應答仕候處餘程安心致候樣子に相見へ全體幕不條理勝にて決局御沙汰之趣も疾承知之事故迚も容易出藝無之事と相考夫にては是迄條理立拔候末終和戰決する一段にて呼出に不應抔との曲命を下し候樣にては兎角遺憾無量且彌增困窮之幕議故暴斷相發期限即事破れ候樣にては折角藝に於て辻大夫其外登坂盡力之次第如何可相成哉勿論藝存慮通り幕府向徹底は無覺束候得共右周旋成否相決する迄は何卒於廣島瓦解に不立至樣有之度との趣に相聞へ實に無餘儀情實可憐事に御座候就而は別紙寫の通り御答被仰出に付爲御承知得御意置

候然處此度之御名代御一門の内と被仰出候得共決局御沙汰相下り候處和戰相決の際にて實に重大之事件迚も適任之大夫方無之若大夫被差出一己之請答も不相成邊を以取計被仰付との趣も餘り幕を愚弄に當り且例之虛喝を以下し附候節は如何樣の變症出來も難計此度は實に御一大事之御儀にて終に戰と可相成は必然就ては其人膽の落付不落付の處を以全軍之氣鋒にも關係せしめ候事に付其迄御決議通昨冬來之成行掛を以尊大夫へ乍御苦勞御名代被仰付との御決議相成候就ては別紙寫の通り深き思召之旨を以被仰付との御事にて御直目附之内爲御使三丘幷御地へ被差越候御都合に御座候此段は其節委曲可被仰聞に付其内御含迄眞に御内々申上候左候得ば幕にも致方有之間敷公事にも喧嘩にも不相成次第此段は早速御支封樣へも御達相成べく既に當節爰元居合之部へ内々相咄候處岩人初大きに同意にて御條理屹度相立妙々と一統歡居申候藝人寺生へも一門名代可被差出其人柄は箇樣々々と申次第無腹臓私より極密にして相咄置覺悟に御座候此度之思召之旨は是非々々御奉命御盡力奉專禱候旁之趣眞の御内々爲可得尊慮如此御座候猶小田村追付御地罷出候節前件委曲御聞取奉願候其中時下御加護奉專禱候恐惶謹言

四月十一日

藤右衛門

備後助樣

眞臣

執事

尙々藝使櫻井初めへ別席の譯にして今夕於枕流亭招請其節御答被仰出御都合にて例之通御手厚被仰付候間此段御放慮可被下候

十三日公宍戸備後助に親書を賜ひ命ずるに名代の任を以てし尙執政より書を以て公の意を告げ且つ備後助を以て宍戸備前の中繼養子と爲すの命を傳へ直目附林良輔をして之れを齎らし三丘宍戸備前の采邑を經て高森に赴かしめ公又之れに托し備後助等に酒肴料金拾兩を賜ひ更に小田村素太郎赤川又太郎佐伯太郎左衛門藩醫松村玄仲に宍戸備後助の隨員を命じ且つ小田村をして先づ廣島に赴き備後助

を以て名代と爲せし旨を藝藩に報ぜしむ其書に曰く

今般御達相成候父子興丸幷家老宍戸備前毛利筑前共來る二十一日迄に御地罷出候樣との御事奉得其意候然處父子興丸共此内已來氣分不相勝備前筑前儀は追々申出置候樣今以不快罷在外一門之儀も病氣又は幼少等にて急速差出候樣相成兼兎角之内唯樣延引にも立至り候付名代として宍戸備後助差出候間萬端不都合無之樣致御賴候備後助事は備前血脉之者に御座候處近來備前不快勝にも有之候に付備後助養子の儀依願差免候間當度之御用向何卒此者へ被仰聞候樣被成御含幕府向へ宜敷樣御取計被下度尙末家中之儀も同樣可致御依賴に付是又可然致御賴候

四月

小田村赤川二人二十日高森を發し二十一日廣島に着して申告書を致し三支侯及び吉川監物も亦各〻病を以ての故に老臣（毛利伊織（長府）福間式部（德山）平野鄕右衞門（淸末）今田勒負（岩國））を以て名代と爲すことを報ぜり宍戸備後助は命を奉じ二十一日高森を發し其從者をして長淸二支藩の老臣と共に先づ關戸に至らしめ（德山岩國の老臣は先ちて廣島に至る）自から輕裝岩國に入り吉川監物に會見し將に退きて關戸に至らんとす會〻岩國の老臣吉川勇記來り途上異狀あることを告ぐ是に於て宍戸は其夜關戸に宿し（岩國より物頭をして部卒を率ゐ警衞せしめ人を近傍の間道に配して巡邏せしむ）翌二十二日朝遽に路を轉じ新湊より舟行廣島に達し長府淸末二支藩の老臣は其翌日を以て出帆す

（宍戸より直目付への書の一節）

私儀一昨二十一日高森出足岩國へ罷越監物樣へ拜謁相願候尤惣供人數等は長府淸末一同關戸へ直に差越候て私儀少人數にて岩國へ廻り候事に御座候爾後監物樣へ拜謁彼是御閑話相伺罷退候處吉川勇記を以御氣を付被置との御事にて申聞せ候は昨二十日夕七ッ時主從三人と覺しき體にていづれも兩刀を帶び一人はピストール所持二人はケベエール所持にて右劍銃へ大きなる風呂敷包みを掛け黃瀨川を渡り岩國より出張之關門を通り掛り候に付關門より見咎候處彼者等申分に德山之ものにて候處宍戸備後助今晩關戸泊之由に付彼方へ急

用事有之罷通候段相斷候に付關門番之もの印鑑有之哉と相尋候得ども所持不致急用に付右受取候間合も無之よし申事に付左樣なれば何ぞ宍戸へ當る書狀等にても所持候哉相尋候處此も所持不致と申候付左に候得ば決て通行不相成段申聞候處大急用に付是非通行不致ては不相叶との事に付不得止一人差添案内旁として爲罷通候處峠邊迄參り候處にて小生關戸泊延引之よし承り候に付直に引返し罷歸り黃瀨關門外にて小店に腰抔掛け一酌相催候積り之處黃瀨農兵等不審に相考氣を付候へば右風呂敷包は竈邊に有之候ては怪我出來も難計との事にて主人體之もの從者體之もの〈申付脇〈爲取除候よし右風呂敷中に土瓶備前德等之ものを包み居多分火藥に相違無之と察し彼是不審（備後助へ急用に付德山より罷越次第に候得ば其夜關戸泊に無之とも高森迄も早速可罷越筈之處無其儀引返し候段不審之第一條なり且德山人に劍銃抔所持可致樣無之言語等如何有之たるや關門番人不案内ゆへ不相分）に付黃瀨農兵等召捕候覺悟にて右小店之廻りを取圍み銃〈玉込等迄いたし候處先一應關門番へ掛合可申との事にて少々手間取候故彼等三人のもの其樣子相察し候哉無間立退小瀨を渡り罷歸候由然處二十一日曉天（曉七ッ時にても有之よし）鐵砲之聲等數多相聞候勿論其夜は小瀨村之もの別て氣を付夜中立廻り等もいたし候由川向に火繩抔振り候を見たるもの有之といふ右二十一日早朝より川向へ（藝州地にて中津原と申所也其下の村を大竹と云ふよし）人差遣し彼是詮議致候處一昨二十日所持之風呂敷包に入れ有之候土瓶火藥込之分を地雷樣にいたし其邊に松束等有之れを積上げ火を掛候より（旁書に）鐵炮と聞へし（は土瓶破裂之音のよし）中津原抔には此方よりいたし候事哉と相考居候よしに付昨日之樣子をも申聞せ且右不審之次第聞繕見候處二十日子時にても可有之哉大竹村にて道も無之茅原之中より右體之三人罷出候て其村にて土瓶等餘分（吉川勇記申口にては百計と申候へども其實は如何や不審）買得致候に付右村之者も不審と存居候處夫より酒店へ參り酒を呑候由右樣時を見合候て其後黃瀨關門〈七ッ時分罷越候にて可有之との事に御座候右にて相考候得ば多分小生關戸泊〈押掛放火等いたし小銃等にて打亂し候覺悟と被察候就ては明二十二日早天關戸發足掛け俄に道を變じ（旁書に）萬一も途中にて不慮出來候ては長途に迄なり新湊より乘船にて藝州江波着船可仕も有之入夜は必然に付慮候て無害との見込なり）と心算いたし船之儀御席にて吉川勇記〈相談致候處至極御同意に付何卒右樣

被成可然船之儀は今晩より早速彼港にて用意爲致置可申との事に付直樣御館
罷退關戸へ罷越長清へも内々其段申聞せ置二十一日夜關戸一泊此所岩國より物頭一員組子召連
出張昨日小瀬一件に付此夜は其邊間道等へ人配りいたし警邏甚だ嚴なり又々關戸へ吉川勇記罷越申候は右鎭撫上にて不
屆之儀有之候て不相濟に付早速藝州へ人差遣し境目掛り役方へ立野市郎深町三郎左衛門兩人藝
防境目掛りのよし爲懸合右等之儀有之候ては何とも人心愈以疑惑不一形右鎭撫旁此よ
りも人數差出置不申て不相濟段等申遣候覺悟のよし申事に御座候間至極御尤
に付早速右樣御取計有之度申置候事に御座候其後岩國より小生幷に長清一達
一同にては船差閊に付先明早朝之所は小生計罷越吳候樣長清へは船出來合次
第關戸迄可申遣段長清旅宿まで申來候由にて清末片見小次郎罷越候付其意に
任せ昨二十二日早朝小生計り關戸出足俄に新港へ罷越四ッ半時乘船此樣子に
ては着藝は入夜可申と存候處少々乘出し候上誠に順風飽帆にて思之外都合よ
ろしく八ッ半時江波へ着夫より直に上陸寺町旅宿罷越候事に御座候間先は御
安慮被遣候樣奉存候いづれ岩國よりも何歟可申上候得共前段之趣申遣置候に

付津々浦々等にても何となく被付御氣候樣に有之度奉存候右之通無存掛次第
にて船其外岩國へ不容易御厄害を奉懸候段早速岩國へ御挨拶被成置被下候樣
奉願候（四月二十三日）

廣島に在りては二十一日寺尾生十郎來り小田村素太郎赤川又太郎に告ぐるに閣
老等が宍戸備後助の此日の中に豫定に從ひ到着せざるを詰るの旨を以てす因て
小田村等は宍戸より途上病の爲めに一日を猶豫せんことを請ふの書を作りて之
れを致せしに同夜寺尾又來り幕府監察の意を傳へ廣島に先着せる德山岩國二家
老臣の書を添へしむ二家老臣乃ち又宍戸の爲めに期を緩くせんことを乞ふの書
を出す翌二十二日宍戸廣島に着し二十三日長府清末の二家老臣亦着す二十四日
使節は一行滯寓中の注意條項を定む

覺

一御銘々樣御内輪に於て御人數編伍之制兼て被定置度候事
一夜中回番之儀は殊更嚴密に有之度候就ては御銘々宿寺表通裏ヶ輪見回り共

無御油斷樣御申付可被成候自然途中にて御銘々樣同番之者行合候節は互に
名乘合混雜無之樣御申付有之度候事
一出火又は不慮の儀出來候節は御銘々樣備後助宿所へ一應御集合にて趣に由
りては佛護寺へ御落合仕候儀も可有之候事
一非常爲用心暗號兼て定置候事
一同斷混雜之節彼此見分難相成儀も可有之に付孰れも白手拭にて頭を包相方
の目印に可仕候間御銘々樣右手拭一筋宛末々迄も兼て御渡被置度候事
四月二十四日

二十五日四家老臣內演說書を藩に致し我宿論を反復す其書に曰く（此書小笠原閣老の却下する所と爲る）

私共主人へ御達之儀被爲在候付御地罷出候樣若も病氣にて押ても難罷出候は
ゞ重臣之一人爲名代差出可申との儀先達て從公邊御達の御旨も御座候處何れ
も病氣罷在難澁仕候に付爲名代私共差出候段先日御藩迄申出候通に御座候然
に今度御達の筋は於干下前以承知仕候道理無御座候得共定て宗藩幷私共主人
御處置之儀に可有御座就ては追々種々之風說等傳聞仕り萬一左樣之儀も御座
候ては國內之人心動靜之程大掛念仕候次第も御座候此儀に付ては宗藩家老宍
戸備後助幷に木梨彥右衛門共より巨細縷述仕置候通にて若此上嚴重之御沙汰
被仰出候ては國內士民臣子之分無餘儀情實難默止勢に相成遂には不一形變動
に可立至哉も難計尤私共主人之儀は一昨年以書面輔翼筋不行屆奉恐入何分御
譴責被仰付候樣奉願候心底今以一貫仕候得共其節主人共に於ても何卒宗藩父
子之儀は御仁恕を以御寬大之御沙汰被仰出候樣歎願仕置候之通にて況て國內
士民之儀は一昨年御追討御軍勢御陣拂相成候處を以長防事情明瞭徹上仕候御
筋と而已一統大慶仕追々平常の舊に可復と奉渴望候內昨年以來之御沙汰筋乍
恐如何之御次第哉と不堪疑惑廉も有御座候處追々御人數御操出今以嚴重御手
配被爲在候御模樣と相見人心益疑惑仕候次第に御座候此等之情實無餘儀筋も
御座候旁々主人共に於ても精々申合鎭定候得共何分不任心底儀と奉存候右に

付ては今度如何樣之御達振被爲在候哉は素より承知不仕候得共萬一人心之動靜に關係仕候樣之儀も御座候時は遂に奉對天朝幕府彌以奉恐入候次第にも立至り可申哉と痛心此事に奉存候最早斷然決議被爲成候御筋にも可有御座候得共此内以來末家中より國情之次第申上候儀無御座候に付此砌萬一御達之下始て彼是申立候儀御座候樣立至候ては緩怠之至奉恐入候に付不得止申上候儀に御座候尤國内士民之情實其原由等に於ては宍戸備後助共より淵底申上置候通に付今更陳述不仕候前條篤と御酌取被成下安藝守樣へ被仰上御序を以公邊向程克御執成之程只管奉歎願候以上

毛利左京内
毛利伊織
毛利淡路内
福間式部
毛利讃岐内

平野鄉右衛門
吉川監物内
今田靱負

是日寺尾生十郎我使節の館に來り二十七日前後閣老より宍戸備後助以下を國泰寺に召し處分令を下すべき旨を報し且つ藝藩の意見を述て曰く令に接し直ちに拒絶するは反て直名を幕府に與ふるの虞あり若かし一たび之れを受け徐に藩内士民の情願を以て幕府の再考を促さんにはと使節乃ち小田村をして答へしめて曰く備後助素より生還を期せず命を拒み罪を得る辭する所にあらず嚴令發するの日を以て事態決定の日と爲すの外あるを知らず假令一たび受けて更に請ふも到底變更の恩命に接するの望あらざるなりと

（藝人の論旨）

御國情到底御承服難相成儀飽迄承知居候得共何邊御達之下卽座にて直樣御拒絶と申儀如何にも御難澁に可有之右趣は御父子樣御儀は始終御謹慎御恭順を

被爲盡候御事に兼々被仰立候得ば右承服無之處は御領内臣民已下之無餘儀情實に可有之右承服難仕情實は宍戸君御承知とは乍申一應御達之面御父子樣へも不被仰上御領内臣民已下之面々へも御吹聽不相成にては宍戸君御一箇之御了簡を以天幕之命を御拒み被成候抔罪名を羅織仕り卽坐にて幕譴を被申付候も難測自然右樣幕府之譴怒に觸候得ば御謹慎位にては濟せ間敷哉元來宍戸君御一達は幕府之忌諱に相觸れ候事故何之手に成りと仕り右御一達を陷れ候て再度幕府用向へ關係不相成樣致置候へば遂に御國に於て別に人柄も有之に付兼て幕府注文通り之溫恭家を被差出候に相違は有之間敷との幕按に候得ば百計相除度一念に有之右究策よりして纔の事を罪名と致し自然不慮之幕譴を爲貧死地に陷候も難相測着々幕府の策中に御墮被成彼之所志を遂げさせ候も餘り御無策に可相成に付き反て彼の意表に御出被成候て一先御請込之上御歸國にて御父子樣へ被仰上候處御父子樣御心中は最前より今日に至り候迄御一貫に被爲在兎も角も可被遊候得共何分御領内士民之處承服仕兼萬々無據御斷り申出候と强く被仰立候儀御斷り立に於て壓力も急度相成御父子樣御心事は徹頭徹尾御一貫仕り士民之情實も貫徹工合宜敷彌御條理も立派に有之御名分も損不申樣にともは有御座間敷哉第一諸藩より御藩を望候處も此道に御座候得ば此所を御熟慮候て御處置被成度候最於私に右之儀を御强く申上候儀は無之候得共御内話に任せ心付候處を吐露仕候迄にて候云々

（小田村の所答）

貴說の通り一先請込歸國の上又々改て士民情實を申立御斷立仕候得ば卽座に幕府御役方之面を潰候儀も無之溫當之取計には御座候得共右御斷り立到底於幕府御聞入に相成候目途も御座候はゞ隨分其取計も可仕候得共右御聞入相成候儀も萬々無覺束候得は必戰之外致方も無之備後助儀は素より必死之覺悟に候故如何樣嚴重之幕譴被申付候共頓着は不仕御達之下卽座にて御拒絶仕候に可有之同人覺悟之通嚴重被申付候日を御手切之期限と存候縱令外家老を差出候樣御達有之候共決て差出候樣には不相成直樣四境を鎖し候て接戰を相待居

可申此外致方も無之儀と被存候云々

二十六日植田乙次郎亦來る其說く所及び我答ふる所共に前日に異ならず二十七日に至り小田村は更に書を寺尾に與へ前旨を反復す

前略幕府御達書面請込方之儀昨日も略植田君へ申述候通り兼ては御達之下此迄尊藩迄も入御承知候通之次第無餘儀情實を申陳御請込仕兼候道を飽迄申上試萬不得止節に至り候ては御達面本書は取下げ御猶豫を願置右御寫にても取下右を國元へ持歸り主人父子尙領內士民へも吹聽仕り折合附候上にて又々御地迄罷出御達面本書取下げ可仕手組にいたし置候得ども其儀も不相調備後助儀幕府御達之下速に拜承不仕處を口に御籍被成自然と御譴責を被申付候得ば素より萬死自から分と仕候身故甘心仕り御處分を可奉請候左樣立行候節は直樣右を御手切之期限と存じ四境をも相鎖候て御打入之期を相待居別家老を右代りに差出候樣御達相成候共御奉命仕候樣にも相成間敷哉ヶ樣之場に至り候得ば御打入之機會も卽今に可有御座候萬一諸君御高諭之通り幕府御達之下直樣出先之備後助御辭退ヶ間敷儀申上候ては第一恭遜之意も缺恐入候次第に付一先御請込仕在所表へ取歸り主人父子へも申聞せ領內士民へも說諭方無遺漏樣手段を盡試候上折合之付兼候邊を申出候得ば又々御辭退仕候に筋合も立可申歟とも被考候得共右御辭退邊は到底於幕府御聞入無之節は御打入之期少々徐々仕候迄にて御開平には至り申間敷且又一旦にても御達面を御請込仕候得ば卽刻其筋之御役方にても國元へ被差越土地御受取方にても可有之左樣相成候節は領內憤激は目前に相見やはり混雜を生候も必然に御座候得ば弊藩の進退今日に相究し孰好御目途も無之候得ば御藩へも不一形御厄害を懸け候事故見切儀結局可然哉とも奉存候併し老兄何角高案も被爲在候はゞ御內々御指揮に相預り度候何も拙生等之苦情御洞察可被下奉願候尙御差操も相成候はゞ又々御審議仕度候頓首不宣

四月念七日

尙々此書眞の拙生愚考之底を相陳候迄にて政府御局中において御披見可相

成ものにも無之只々内簡と可被思召候以上

寺尾生十郎様　　小田村素太郎

時に薩藩黒田了介曩きに山口を去り將に上國に還らんとし尾ノ道に着し廣島の形勢切迫を聞き急に還りて二十七日江波港に着し即日使節の旅館を訪ひ翌日又來り幕令は一旦之れを受け歸國の後更に出でゝ拒絶するの穩當なるべきを語る小田村赤川等の答ふる所植田寺尾に答ふる所と同じ

（黒田の論旨）（當時の記錄に依る）

當度之備後助殿は御名代之身に候得ば丸に御父子様御心に被成代度候左候得ば御父子様には最前より御恭順を被爲盡天幕之御沙汰に御違戻被遊候御心體は無之只々士民以下無餘儀情實之處より右幕令承服難仕邊之論出來に候得ば一旦御父子様處にては御請込有之暫時御引取被成改て備後助殿御家老之所に立戻り百方歎願相成候方條理も詳に相立御父子様御心情も初中後徹底仕候儀に相當り可申何分一先御熟考被下度云々

二十八日夜藝藩の使人桃井彦八宍戸の旅館に來り幕令を傳ふ曰く

（其一）

毛利大膳
毛利長門
名代
宍戸備後助

右之者御裁許申渡候間明後朔日四時國泰寺へ罷出候様可被達候

（其二）

毛利興丸名代
宍戸備後助
毛利左京名代
毛利伊織

右之者共申渡候儀有之候間明後朔日國泰寺へ可被罷出旨可被達候

毛利淡路名代
福間式部
毛利讃岐名代
平野郷右衛門
吉川監物名代
今田靱負

會、宍戸は瘍を發し命に應ずる能はざるを以て其癒るを待たんと欲し四家老臣も亦宍戸の疾癒ゆるを待ち共に出頭せんと欲し翌二十九日演說書を以て之れを請ふ

（宍戸の演說書）

御裁許被仰渡候に付明朔日四時國泰寺へ罷出候樣との御儀奉得其旨候然處頃日腫物相煩起居不任心底且持病之癪氣差湊旁急速罷出候樣相成兼奉恐入候尤精々療養相加へ快氣次第不取敢罷出候心得に御座候間此段被思召分程克幕府向へ被仰上被下候樣奉願候

四月二十九日

（四家老臣連名の演說書）

此度被仰渡之儀御座候付明朔日四時國泰寺へ可罷出樣との御儀奉得其旨候然處本家名代宍戸備後助儀頃日病氣に付急速罷出候樣相成兼候に付療養相加へ快氣次第不取敢罷出度段奉願候右に付奉恐入候得共私共儀も備後助一同御呼出之儀に付同人快氣仕候迄御猶豫被仰付度奉願候間幕府向宜被仰上被下候樣奉願候

四月二十九日

小笠原閣老は其請を容れず宍戸には病を力めて命に應ずべく若し命に應ずること能はずんば四家の名代は必ず出頭すべき旨を達す因て宍戸は再び疾を以て辭し四家の名代は命に應ず

（宍戸の演說書）

私儀病氣にて難澁仕候段申上候處明朔日四時國泰寺へ押ても罷出候樣再度被仰達奉得其旨候然處實以腫物相煩坐起不任心底且持病之癪氣差添萬々奉恐入候儀には候得ども精々療養相加罷出候付平快仕候迄御猶豫之程偏に奉願上候此段篤と被爲知召分幕府向へ不惡被仰上被下候樣奉願候

四月二十九日

（四家名代の請書）

本家名代宍戸備後助病氣押ても難罷出候共同人一同無御座候共私共明朔日四時國泰寺へ可罷出旨奉畏候

小田村赤川は植田寺尾に牒して其旨を通じ且つ老臣の着服及び通路等の事を照會し又事情を詳記して山口に報じ進退の意見を具し指揮を請ふ其報未だ至らず五月朔日處分令交付の事あり

（小田村赤川の書）

前略然ば當表應接日限之儀已に別紙之通今曉達來候得共備後助殿此内已來足部へ腫物相發し引籠被居候故不取敢演說書を以明日之處出席難相成趣被相斷御支藩中御名代の儀も同斷にて扨快氣之上右幕達請込之儀に付追々藝藩政府と打合も仕試候所兎角山口に於て前廉御伺取仕置候譯に落付兼候藝政府より追々示談に相預り候手續別紙に委曲書載尙又薩藩抔申分之處も一同書綴り差送申候前廉山口表において窺定之趣にては幕達本書は預け置右寫を持歸り尙又改て歎願仕り可申儀に御決着も有之候得共此邊之儀藝政府へ右手合試候處只今之勢左樣にも參り申間敷哉に付何卒別紙之手次に肉大夫被打合度藝藩より懇々說聞せ申候始終之處暴斷は難被引受儀は藝藩にても飽迄承知は仕居候得共幕達之下直樣御拒絕に相成候ては第一は肉大夫天幕之令に被戻候罪をば口實と仕拘留仕候歟又は不慮之處置にも可仕歟遂には御父子樣も天幕之意に御悖忤被遊候抔惡名を嫁候も難相測本より肉大夫には萬死も御辭退無御座御決心は不申とも分り候儀に御座候得共看々幕府之術中に御墜被成候儀如何にも

殘念之由切々申聞せ申候肉大夫始拙生共最前伺定候趣毫髮も變換可仕意は無之候得共但今日に就從來之處迄を掛け皇國之御爲且は御國之御爲を考候得は幕達之下直樣拒絶遂には肉大夫抔不測之危地に被踏込一死を被甘卽刻に御國四境を被鎖搆戰に被及候儀可然歟但しは藝藩人申所之通り一旦一寸請込改て藝地罷出徐々として斷り申出曠日彌久幕議之變動を待候策可然歟當度山口表に於ても於大坂薩藩建白之儀も御承知に可相成此期に至り他藩之周旋盡力を恃候事は萬々入らぬ事に候へ共藝國抔申分通り曠日彌久之内には薩藩建白之應しも可有之歟とも被察旁黑田了輔邊も日を延候儀を慫慂仕候今日に當り聊退縮心を以て彼此申述候儀には無御座候間書狀中之意味篤と御勘考之上急速御答被仰越可被下候此段御當役樣方へ被仰上候樣肉大夫被申付如斯御座候恐惶謹言

四月二十九日

小田村素太郎
赤川又太郎

二白前件之儀片時も早く御評定之上被仰越度候飛脚之者は此者より外功者之人御選にて被差越度存候何も至て切迫御出先之苦情萬御推察奉希上候以上

山田宇右衛門樣
木戸貫治樣
廣澤藤右衛門樣
中村誠一樣
藤田與次右衛門樣
野村彌右衛門樣

第二十五章　接幕事件の進行（其二）

處分令○四家名代と監察との應答○四家名代の嘆願○宍戸小田村滯留の命○再次の嘆願○四家名代歸國の命○第三次の嘆願○河瀨安四郎出藝○中村誠一等出藝○藩政府の決議

五月朔日四末家の名代命に因り將に國泰寺に出んとし辰牌（今の八時）小田村素太郎赤川又太郎幷に四家の用人（金子蔀（長府）飯田一郎左衛門（德山）片見小次郎（清末）目加田喜助（岩國））等先つ之れに赴く已牌四家の名代各々從者を率ゐ藝藩吏人の先導に隨ひ國泰寺に至る幕府の歩兵及び別手組數百人兵器を執り境内に整列し警戒甚だ嚴なり已下牌に至り大目附永井主水正室賀伊豫守牧野若狹守目附平山健次郎來る午牌命あり徒目附二人醫一人をして宍戸備後助の旅館に就き其病狀を檢せしめんとす因て赤川又太郎は藝藩永田權助と共に宍戸の旅館に歸り其來るを待ちしに再び命ありて之れを止む是に於て二人復た國泰寺に赴く蓋し小笠原閣老等は宍戸を以て病と僞るものと爲し檢證の令を發せしも使節一行の之れを拒まざるを見て其眞なることを覺り其事を止めしなるべし申牌前に至り小笠原閣老來る植田乙次郎四家老臣を導き座に出つ閣老順次に宗藩幷に四家に對する幕令を讀み畢りて四家名代席を退き次て永井主水正室賀伊豫守牧野若狹守平山健次郎更に別席に於て閣老朗讀の令書を交付す

支藩名代等より此日の光景を宗藩に報告せる書中に曰く宍戸備後助殿病氣に付五月朔日四ッ時御支藩中御名代計國泰寺へ御呼出に付御名代中幷付添之面々且宗藩より小田村素太郎殿赤川又太郎殿一同長府旅寓願成寺へ朝五ッ時過相揃素太郎殿又太郎殿御支藩付添之面々は先達て國泰寺へ罷出左候て凡四ッ時前頃より御名代之面々同寺へ罷出候處途中往返共案内として當藩より御徒士一人宛被差出候國泰寺外門際にて致下乘正面より上り控席迄當藩御廣間詰之者順次に一人宛誘引致着座候處當藩政府寺尾生十郎御用人遠藤佐兵衛政府植田乙次郎追々及出會且御達席習禮之儀申込置候處無程乙次郎生十郎習禮席へ誘引有之御用人佐兵衛より相授候には閣老より御達之節最初御支藩中一同二ノ間下より二疊目頭へ可罷出二度目御三末一同席へ可罷出三度目吉川樣計同樣可罷出四度目又々御支藩中同樣可罷出其都度々監察より御指揮可有之と申聞候右濟控席へ歸座致し居候處乙次郎申聞候は公邊御從士衆より習禮被相授候段申聞候付乙次郎誘引にて先席へ罷出候處習禮最前之通尤大監察より御書付御渡之節御禮席にて致脫劍候樣被相授候無間乙次郎申聞候は惟今閣老より御達有之段申達同人誘引にて三ノ間廊下杉戸内へ爲控置候處直に監察より差圖有之御支藩中御名代一同二ノ御間下より二疊目頭へ罷出致御禮候處壹岐守樣より大膳樣御父子樣幷興丸樣への御書付御讀聞せ有之畢て興丸樣への御書付御讀聞せ有之退席三度目吉川樣御名代同斷吉川樣への御書付御讀聞せ有之退席四度目御支藩中御名代一同々斷之處宗藩御家老中へ之御書付御讀聞せ有之相濟て先控席へ歸坐無間生十郎誘引にて最前之御達席杉戸内へ罷出控居處一ノ間之下

敷居際へ大監察永井主水正様室賀伊賀守様牧野若狭守様平山健次郎様列坐にて最前閣老より御達の順を以て御書付四度に御渡有之相濟一應退席之事

（幕令）

毛利大膳
毛利長門
毛利興丸

毛利大膳毛利長門家政向不行届家來之者黑印之軍令狀所持京師へ亂入禁闕へ發砲候條不恐天朝所業不届至極に付可被處嚴科處任用失人益田右衛門介福原越後國司信濃於出先條々之主意取失ひ及暴動候段罪科難遁恐入三人之首級備實驗猶參謀之者共斬首申付寺院蟄居相慎罷在候旨自判之書面を以申立其後御疑惑之件々相聞候に付大目付御目付を以御糺問之處彌恭順謹慎罷在候由申立之趣は御聞届相成候得共元來臣下統御之道を失ひ家來之者至犯朝敵之罪候段其科不輕不埒之至に候乍去祖先以來之勤功被思召格別寛大之御主意を以御奏聞之上高之内十萬石被召上大膳は蟄居隱居長門は永蟄居被仰付爲家督興丸へ二十六萬九千四百十一石被下候家來右衛門介越後信濃家名の儀は永世可爲斷絶旨被仰出之

毛利興丸

今度祖先之舊功を被思召其方へ家督被下候上は如前々長州萩へ居城致し大膳長門も同所に差置毛利左京毛利淡路毛利讃岐吉川監物へ萬事相委ね家政一新領内致鎭靜父祖之舊愆を補ひ候樣心掛專可被抽忠勤候

毛利興丸

其方家來共之内是迄過激之雖及擧動候者と悔悟改心致候に於ては一切御構へ無之候且右に加候百姓町人は勿論其餘之者共も速に其家に立戻り銘々本業相勵可申候尤別紙高杉晋作桂小五郎以下之者相尋候儀有之間早々廣島表へ差出候樣可被致候

高杉晋作　桂小五郎
小田村文助　村田次郎三郎

佐々木男也　波多野金吾
天野謙吉　北條瀨兵衛
佐世八十郎　林主税
山縣半藏　大田市之進

毛利興丸へ
宍戸備前

右之者先年來大膳家政取締向之儀厚く心懸候由之處當時退隱罷在候哉之趣に付今般大膳父子御裁許申渡其方家督被下家政向一新領内鎭靜候樣申渡候に付ては早々任用可被致候

毛利興丸へ

今般大膳父子御裁許申渡其方家督被下家政向一新領内鎭靜候樣申渡候に付ては先年來大膳家政向厚心掛候長井雅樂等同樣之者共其當時は退役又は咎等申付有之哉之趣に候間夫々任用候樣可被致候

毛利興丸へ
毛利左京へ
毛利淡路へ
毛利讃岐へ

於江戸表被下候屋敷場所之儀は追て相達候にて可有之候

吉川監物へ

今度大膳父子御咎被仰付且興丸（家督被下候條得其意其方共吉川監物一同申談家政向引請宗家を扶翼領内を鎭靜致し後來決て御苦勞不相成急度取締り相立候樣可被勵忠誠候

支家名代中へ

今度大膳父子御咎被仰付且興丸（家督被下候條得其意毛利左京毛利淡路毛利讃岐一同申談家政向重立引請宗家を扶翼領内を鎭靜致し後來決て御苦勞不相成急度取締り相立候樣可被勵忠勤候

別紙御裁許之趣毛利大膳毛利長門幷毛利興丸代宍戸備後助へ可申渡之處同人病氣押ても難罷出候に付其方共より大膳始へ可被申達候

毛利左京
毛利淡路
毛利讃岐
吉川監物

右之通主人へ可申達候

毛利興丸家老へ

今度大膳父子御咎被仰付興丸へ家督被下末家左京淡路讃岐幷吉川監物へ家政向引受監物は重立取扱宗家を扶翼領内を致鎮靜後來御苦勞不相成急度取締向相立可申旨相達候間家老共一同申談幼主輔佐之力を盡し取締向急度心附家政一新致候樣可抽忠勤候

支家名代中へ

別紙之趣毛利興丸家老共へ可申達候

支家名代中へ

今般申渡候趣早々歸國致し主人へ申達候上來る二十日迄大膳始夫々請書差出候樣可申達候

四家名代之れを受く乃ち監察に請ふに質問すべき所あるを以てす徒目附曰く一旦命を受けて退き更に稟請すべしと因て四家老臣は令書を受けて退き然る後ち更に出で、監察に質すに宍戸備後助を措き支家の名代に下すに宗家の處分令を以てするの其當を得ざるを以てす

（當時の應接書）

監察　伊織手前何歟申伺度儀有之候哉

我　伊織一人にて申伺候儀には無御座四人の者一同御伺申上度候甚以恐入奉存候得共此度本家へ被仰渡候御所置之儀宍戸備後助病氣に付私共へ被仰聞候との御事に候處迫て別段備後助へも御達し被仰付候譯に御座候哉

監　此度大膳父子へ御達之筋末家へ被仰渡候之譯にて最早備後助へは別段御達は無之候

我　不奉憚御席申上候段幾重も恐入候得共先般藝州家より被仰達候御筋も御座候通末家中名代之儀は本家名代には難相成候段承知仕候に付本家筋へ御沙汰之趣は私共承り候譯には有御座間敷と相考罷在候折角備後助罷出居病氣之儀も追々快方に候得ばいづれ不遠彼者へ御裁許被仰渡にて可有御座と相考候處却て意外之仰を蒙り誠以驚愕仕候次第に御座候

監　最前申達候末家名代之儀は本家名代には難相成と申儀は其方申通りに候得共今日御達相成候儀其方共主人より本家へ申達候樣被仰渡候譯に付其方共本家之名代に相立候儀には無之候

我　左樣には可有御座候得共主人共之儀は一向承知も不仕候て私共出先に於て卒爾に承歸候段も甚以痛却之至奉存候且又假令反命仕候にもせよ最早昨年以來本家之家老共より追々申上置御承知も被爲在候通之國情に付本家へ申達候末國内之形勢如何成行可申哉折角台命之儀に付捨置候心底は毛頭無御座候得共台命服膺仕候事のみ專ら相心得候ても前々も申上候通り之國情に付却て鎭靜仕候樣にとの御主意にも不相叶樣立至可申左樣相成候段は主人共に於ても痛却不過之御請仕候儀も乍恐無覺束奉存候右等之情實平常聊窺留罷在候に付卒爾に反命仕候段甚以痛心之至進退相究候右等之儀に付已に去る二十五日演說書を以て當藩迄申出御執成之儀相願候次第も御座候處御不都合被爲在候由にて御返却相成申候得共心底御酌取可被下候樣奉願候

監　當藩迄申出候との趣は如何の次第に候哉

我　格別之趣も無御座今度私共主人名代として罷出候處昨年以來種々之風說國内へ傳聞仕候儀も有之國内一統氣遣罷在候に付此度之御沙汰前以承知仕候筈は無御座候得共萬一人心之動靜に關係仕候樣之御所置被仰渡候時は主人共に於ても御受之儀も難澁可仕然るに右國内の形勢是迄末家中より申上候儀未だ無御座候に付御達被下始て彼是申上候樣之趣御座候ては甚以恐入候に付是

等之處豫申上置度書取にして申入置候次第に御座候

監　全體其方共には勅裁を歴て被仰出候台命を遵奉不仕候心底に候哉

我　奉恐入候仰に御座候勅裁之上被仰渡候御筋と御座候を違背仕候心底毛頭無御座折角鎭靜仕候樣に盡力可仕との御沙汰に候得共前時にも申上候通之國情無餘儀次第も御座候旁不行屆之主人とも其實効相立候段乍恐千萬覺束無き儀に可有御座候左候時は却て被仰出候御主意に相背候樣相成候間何卒國內安堵靜謐罷成候樣御沙汰奉渴望居候儀に付風說等承及掛念之餘爲念申上置尙亦今日も申上候心底に御座候申上も疎に奉存候得共此度被仰渡候御筋國內鎭靜輙く實効相立候儀と被思召候ては大に意味行違之事に付不得止申上候存念に御座候

監　左樣に候得ば主人共に於ても右御沙汰之筋を御請不仕違背仕候處存に候哉

我　全く左樣には無御座候素本家父子之儀は一昨年謝罪之儀申立謹慎蟄居御

譴責奉待候筋を以聊不相替候得ば今度御沙汰之旨申達候はゞ定めて甘じて御請可申上候得共從來舊恩を蒙居候士民共右情狀坐視するに忍ざるよりして彌以奉恐入候次第柄に立至り候は眼前之事に付末家之身分右樣成行候形勢承知乍仕輕卒に御請申上候ても手の下恐入候次第に相成可申と勘考可仕候其段私共平常乍不及伺留罷在候に付實事に不臨以前爲念御耳に入置度相考候譯に御座候

監　大膳父子に於ては甘じて御請申上候儀を士民之情狀とは乍申遮て相拒候樣有之候を國情々々と申立鎭靜不仕ては父子之罪を重ね候譯に相成可申左樣に候共宜敷候哉

我　父子之罪を重ね候を好み候譯に無之は不及申候得共現在鎭靜難相成次第柄も有之事に付右樣罪を重ね候形勢に不成行樣之儀を可奉願奉存候譯に御座候

我　幾重も恐入候得共右樣無餘儀次第柄も有之鎭靜向難澁之事に候處萬一輕

き義と被思召候ては大に行違之譯に奉存候

監　左候得者其方共には主人へ反命不仕と申譯に候哉

監　定めて難澁之事は難澁に可有之候得共勅裁を歴て被仰出候趣に候得ば末家之持方としては相成丈け盡力鎭靜仕候樣被致度事に候

我　靱負儀少々奉伺度趣も御座候處只樣御滯座相成恐入候得共先刻御達被仰付候本家々政向之儀に付三末家尙監物申合宗家を扶翼仕候樣猶又監物儀は重立引受取扱仕候樣との御渉汰筋誠以驚愕之至奉恐入候本家々政向申談候樣との御主意に候得者差向三末こそ重立引請候樣可被仰付筈に御座候處却て監物へ右樣被仰付候御旨意甚以疑惑仕候次第に御座候假令罷歸申聞候共定て當惑如何之次第哉と可奉存候に付是以乍恐奉伺度候

監　成程尤之次第に候得共左樣參り不申候長府抔に於ては元祖秀元一旦宗家相續被致候位之儀にて差向有限家柄には可有之候得共吉川之儀も元就時代には兩川　とも相唱萬事輔佐被致候儀に付當人に於ても同樣輔佐不被致候ては不

相濟筋に可有之尙又一昨年老公下藝之節は一人委任如形盡力被致候手續も有之事に候得ば決て御沙汰遵奉無之ては不相濟候

我　益奉恐入候卸趣意に御座候素より御承知も可被爲在通不行屆之監物元春其人と被思召候ては彌以恐入候且又一昨年老公御下向之節監物一人委任盡力仕候樣に被思召候ては是又恐入候京師大變後本家に於て早速取調末家等申談御詫可申立と相考候折柄馬關へ夷船渡來差向長府淸末等敵衝に相當り候場所柄之儀に付

監　左樣之儀彼是と申立候次第は御沙汰筋遵奉不仕候譯に候哉

我　奉恐入候此度御沙汰之御旨遵奉不仕心底決て無御座候得共奉伺度次第始末不申上候ては下情御分り兼被成候半と奉存候彼是枝葉之儀を申上候樣可被思召候得共一通りは不申上候ては安心不得仕候先刻申上掛候通り長府淸末之儀は右之通差當り差支候廉有之德山之儀は罪魁三人預方相成候彼是無據不行屆之身分周旋向被相賴當藩罷越候其後引續御陣拂之節迄も萬事取扱仕木口に

相立候故一人委任候様被思召候得共事々本家父子之主意を請相運候は勿論之儀外末家等へも申談仕候次第に御座候右之仕合に御座候を一人取分け御沙汰御座候段當惑至極奉存候本人へ申聞せ候とても御受仕苦敷可有御座奉存候付豫め申上置候譯に御座候

我　何分此御席にて彼是申上御滯座相成候段却て恐入候得は一應退下備後助へも可申聞尚又追て奉伺候儀も可有御座候此段宜敷被聞召置可被下候且主人共へ申聞候得は必定歎願差出可申其節何分宜敷御願申上候

是日薄暮四家名代寓に歸り相議し翌二日演説書を作りて藝藩に致し宗藩處分令は宍戸備後助病癒ゆるを待ち之れを下付するか否らざれば各家主人に下付せんことを請ふ

此度本家筋御處置の儀昨朔日不奉存寄私共へ被仰渡早々歸國本家へ申達候様主人へ可申聞候段御沙汰の御旨誠以奉驚愕聊存慮の處奉伺儀も御座候得共御達の下彼是申上候儀奉恐入尚又追て奉伺候趣も可有御座候段申上置一應退下仕候處差當本家名代の儀は私共主人相勤候様猶末家名代の者本家名代には難相立段兼て被仰達候に付本家へ被仰渡の事柄を私共承り候筋には無御座事と奉存候のみならず斯重大の事件主人共在所に於て私共式より傳承仕本家へ申達候儀且又本家父子同様謹慎罷在御沙汰相待候身柄右御取扱仕候儀如何相考可申哉と私共に於ても甚以痛心仕進退相究候爲體に御座候折角名代の儀は宍戸備後助差出候處先日以來病氣罷在候得共追々快方に差向候事に付何卒彼の者へ被仰付被下候様仕度其儀萬一御不都合の御儀共被爲在候はゞ責ては此度御裁許の筋主人より本家へ申達候様一應主人共へ被仰付可被下様左候て主人より私共へ申付候上にて御沙汰の御筋罷歸り申聞候様仕度奉存候夫迄の處此度御沙汰相成候御書付本家へ申達候向は暫く上納仕置度奉存候彼是之趣伏て奉歎願候此段安藝守様へ被仰上公邊向可然様御執成の程奉願候以上

五月二日

毛利左京内

毛利伊織

毛利淡路内
福間式部
毛利讃岐内
平野郷右衛門
吉川監物内
今田靱負

同日藝藩松宮半五郎宍戸の旅館に來り宍戸小田村の二人に滯留の命を傳ふ三日閣老より前日四家名代呈出の演説書に對し書旨聽るすべからず速に歸國して命を主人に傳ふべしとの指令を下せり因て四家名代は四日宍戸の旅館に會し尚前議を續き再び演説書を作りて藝藩に致し前意を反復す

去る二日書面を以御懇願申上候處右書面之趣は難相成筋に付早々歸邑主人へ可申達旨御附箋にて被差下折返申上候儀甚恐多御座候得共此分にて歸邑主人へ申達候とも御都合筋之處私共より辯解可仕樣も無之重大之御達書輕易に御受込仕歸邑仕候ては主人へ之申分も不相立一身之進退にも差閊居候に付此邊苦情被思食分今一應公邊へ御伺被下御筋合と申處詳細に被仰聞度奉賴候間此段安藝守樣へ宜被仰上可被下奉泣禱候以上（五月四日）

是日閣老藝藩をして命を四家名代に傳へ本日發程速に歸邑し令を主人に傳へしめ名代等が進致せし演説書は之れを却下す時既に夜なり因て答ふるに旅裝の整ふを待ち發程すべきを以てす亥牌寺尾生十郎來りて更に閣老の命を傳へ今夕必ず發程せしむ名代等已むことを得ずして直ちに旅寓を發す發するに臨み又嘆願書を致し主人より更に請ふ所あるべき意を陳す

過刻御使者を以被仰達候今四日中御地出足早々歸邑可仕旨に付直樣理裝仕唯今御地出足仕候然る處今般本家向御裁許之儀被仰渡差當り當惑之廉も御座候付乍恐不取敢奉嘆願候處書面之趣難相成筋に付早々歸邑主人へ可達之旨被仰出候右筋合之儀折返し奉伺候處御聞屆不相成候段被仰出候素より重き台命いまだ反命も不仕内彼是申上候は奉恐入候儀に付早々歸邑主人へ可申聞候乍併

兼て申上置候通之國情に付迫々主人共より御依賴奉歎願候儀も可有御座と奉存候間切迫不得止之情狀御憐察被成下宜敷御含置被下候樣以御序安藝守樣へ被仰上置被下度伏て奉泣禱候以上（五月四日）

宍戸小田村二人は滯留の命を受け其前名既に幕府の所謂激徒中に列せるを以て到底歸鄕の期なかるべきを慮り書を藩政府に致して前日の情況を報し且つ山田宇右衛門若くは中村誠一を派して直目附杉孫七郎若くは柏村數馬と共に廣島に至らんことを乞ひ又四家の老臣は一旦高森に留まらしむべきを以て廣澤藤右衛門の直目附一人と共に之れに至らんことを求め又土州及び肥前の老臣等幕命を承け支藩を遊說せんとする說あることを報じ宍戸の書中「此度幕府處置振大離間策を廻し候積に候處時勢大不案内隔靴搔痒可笑事に御座候乍併何卒御輕蔑無之幾重にも〳〵深重御熟慮審議一策も不誤其術中に陷り不申樣其裏に出候手段專要と奉存候就ては御末藩中をば能々御慰諭被爲成候て丸に同腹合心重荷を爲荷候樣無之候ては不相濟右行懸り不得止次第に有之たるよしに付強て御詰責樣之事無之樣有之度奉願候云々 又「士民一統無餘儀情實嘆願之次第は幾重にも激言昂辭を不用恭遜謹愼に至誠を盡し感動いたし候樣有之度何分とも根氣よく五十年にても百年にても折衝嘆願いたし候心得肝要に奉存候創地は兵力差向候外不相成候樣にいたし度事に御座候云々」といへり 又同時に使を高森遊擊隊の營に遣はし河瀨安四郎を招く河瀨直ちに廣島に至り宍戸等と共に事を議し五日歸國の途に就く同日客月二十九日小田村赤川より山口に送り指揮を請ふ書に對し政府の答書至る而も既に朔日の事あるを以て事畫餅に屬す小田村等因て更に書を復し現下の狀況を報ず

（藩政府の答書）

過る二十九日御仕出之御書翰別紙旁委曲致承知候御裁許申渡直に拒絕又は一應承諾迫て出藝歎願等之事猶又篤と御評議相成候處幕吏出藝之近狀にては一切拒絕申渡書寫取歸り大膳父子へ申聞猶又國內折合方見込相立候上何分可申出抔と申邊にては閣老小笠原初め不令承引段は眼前可有之本書御請取御都合に候得ば申渡之上實以存外之御沙汰被仰出奉恐入候闔國士民無餘儀情實は去冬已來追々申上置今更不能申上候得共此度御沙汰之旨にては士民一統疾傳聞仕居候通就ては兼て決議之趣も有之承服不仕は必然に候得共節角御沙汰被仰渡候事故無據一應御預り仕置歸國之上大膳父子へ申聞猶士民折合方之儀精々可令心配其餘父子初私共說得鎭靜方不任心底儀も有之節は何分之儀追々可申

上此段不惡御聞屆被成置候樣偏に奉懇願候と被仰立候て高森まで速に被引取
右手順を追ひ士民歎願幷御家老中御書面被差添改て備後助殿廣島表被罷出巨
細右書面之通にて彌以御請不相成御沙汰書御返却仕度斯迄國内情實無腹藏申
上候事にて一切御採用無之節は最早不得止次第泣血悲歎之至奉恐入候得共何
共致方無御座候依ては承服不仕との趣を以御討入にも相成候得ば一戰之外更
に無他念との趣を以斷然拒絶相成候儀と存候勿論薩藝二藩等之心入之次第も
有之且當節農事急務之折柄にて十餘日も戰期遷延相成候へば大きに都合能尤
も尾薩等上書之功は我藩手切之上ならでは幕之動搖も相見へ申間敷に付不可
恃事に御座候前件一應引取之都合に立至り候節は歸國之上にても決て御請難
相成趣は屹度詞も殘し置又再度歎願之手次も藝へ依賴不相成ては以來之手續
も不相調事に御座候只々此度之暴令を尖に御請相成跡へ繫も不被付置ては右
御沙汰を下し削地請取方は迫て之事に閣一段落を付閣老其外一先斷然引揚候
哉も難測殊に後之歎願藝にも引請不申樣成行候ては甚以不都合之至終に手足
も不屆樣立至り候ては遺憾不少次第にて彼此憤懣之餘り過激輩駈出候樣可立
至哉後患難測に付是非々々後へ屹度繫を付被置候儀肝要に存候右是迄懸合振
も有之至現場尖に御請不相成段は明瞭列藩へも相聞候樣丈に御張込は有之度
事に御座候乍併萬一も出藝閣老初去留又後來藝へ依賴成否等之所にて前件通
難被行御見込も御座候はゞ此度限り斷然御請不相成御手順之外有御座間敷御
事と存候此餘は兼て御委任被仰付置候事故時機に應じ御都合振も可有之御存
分御取計相成候樣にとの御事に御座候今日於御前御會議被仰付前件御決議被
仰出候事にて此段各樣迄得御意候樣筑前殿五郎殿被申付候間被成御承知備後
助殿へ被仰達可被下候（五月三日）

（小田村赤川の書）

三日山口立飛脚只今到着結局處置之儀縷々被仰下候得共最早朔日國泰寺に於
て押て暴斷相達し右始末早々得御意當飛脚と行違ひ相成右一件御承知相成候
得ば嘸々御憤懣とも想像仕候得共幕府之不條理不珍儀にて左迄立腹仕候にも

不足事に奉存候御疎も無之候得共益々御内輪を被相固御基本之處屹度不拔之勢彌御扶植懇願罷居候尚肉大夫抔拘留甚敷暴政に候得共孰も兼て覺悟仕居候前にて可驚儀は更に無之此往如何體失禮之扱尚殘忍之所業に及候共從容不迫にて幕府之罪名を天下に暴白仕候種とも相成り御國に取り御損は無之に付御出先之肉大夫抔へは御心を不被爲引候て御存分に御内政御盡力可被下候肉大夫幷拙生抔歸國不相成儀に付當表之手續尚往々之儀御面談も不相成故早急河瀨安四郎呼寄候て諸事合議仕置候今朝より河瀨歸國早速山口へも罷出候都合に付萬端拙生共心算御聞取可被下候

御支封樣方御名代も今曉迄に引拂一先高森へ落合諸君之内御出浮を相待候筈に御座候御名代中引取事に付種々珍話も有之何も河瀨より御聞可被成候幕達二通差送候間例之御用箱へ被納候て他日御編輯之種に相成候樣殊更散亂を御禁可被下候時下爲國家御加愛奉專祈候頓首（五月五日）

山口政府に在りては廣島の情報を得て議を決し四家の名代に下命して高森に滯留せしめ林良輔廣澤藤右衛門を遣り又中村誠一をして決議書を齎らし廣島に赴かしめ又同く小姓河北一宍戸基助を遣り酒肴料金二十五兩を在藝使節に賜ふ其決議に曰く

一直目付之内長清へ一人德岩へ一人被差越此度廣島表に於て幕府御處置抦甚以不條理千萬彌窮迫之上は如何なる姦計相廻らし候哉も難測就ては去秋御支封樣御出山之上決局御裁許振御決議之趣も有之御國論確乎御不動は不能申此期に臨み彌以御兩國一致戮力暴令相防度段屹度御依賴之旨被仰越度自然彼れ承引せしめず節は不得止決戰勿論との御事一貫有之度候事

俱長清へ柏村德岩へ林尤高森御用有之相兼候事

一藝城へ中村被差越尚爲御慰撫御小姓河北被差越候事

一高森御末家御名代引取迄直目付林政府の廣澤被差越候事

一御三殿樣爲御名代備後助被差出候處不圖氣分相にて朔日國泰寺へ御呼出不被得出就ては御支封樣御名代へ御宗藩御名代をも相勤させ候次第最前より

御達振とも齟齬せしめ不及落着段御問出相成度候事

一備後助殿幕之激徒名錄に載せ候共元來山縣半藏にて宍戸備前血脉之者に付新規末家に取立終に本家養子に仕候段現在之條理を追ひ一門無相違段飽迄

一貫

一此度乍恐廢削等之令御末家御名代へ決て相渡候にて可有之右未前件通何共不及落着殊更右御裁許振に於ては二州士民一統兼て決議之趣も有之勿論一切御請不相成就ては士民歎願書幷御家老御書面とも相添備後助より御返却

但請取之節は御末家御名代にて其條理を追ひ候は一先彼手より御返却御手順歟

一御支封樣に於て土肥家老引受振左之通

船にて馬關に於て長清へ相對新港に於て德岩へ同斷右船中付添として御中間通り之者にても被差越候事

晝休泊宿等に於て一切國事談無用又通ひの者水夫其外同斷

於御引請應接之節立會之面々士民合議書天朝列藩之書面等概略承知有之度同席へ岩へ遊擊德へ集義長へ奇清へ御楯より出席

但孰れも御當方御家來唱德岩へ竹中石川長清へ國貞井原

一爾來幕府への掛合振表向詞文字上にては是迄之條理を逐ひ溫順勿論に候得共最早如此不條理不次第に出候得ば是非曲直根强く相糺すの張込眞意に有之候事

一激徒と歎申幕にて名錄に載居候面々山縣半藏小田村素太郎出藝其餘は京師變動以來病死又は脫走等にて居合不申

先年脫走　高杉晉作　京師變動中行衛不相知　桂小五郎

當時素太郎　小田村素太郎　死去　村田次郎三郎

脫走　佐々木男也　脫走　太田市之進

脫走　佐世八十郎　死去　北條瀨兵衛

長病　天野謙吉　死去　林主稅

死去　波多野金吾　當時宍戸備後助　山縣半藏

右當時宍戸備後助にて有之元來宍戸備前血脉之者に付去年別家に取建候處備前義弱體氣分相にも有之實子未だ幼少に付備後助を養子に相願候事

山縣半藏

第二十六章　接幕事件の進行（其三）

宍戸小田村の拘留○宍戸小田村從者の請願○高森會議○決議書○四家名代の歎願に對する閣老の達○四家名代の嘆願○宍戸小田村放還の嘆願○二使拘留の幕達に對する四家の答書○閣老の達○奉命期限の延期○幕軍進入の期日○江戸幽囚人歸國○吉川監物の憤激○將來應接の順序○最終の嘆願○宍戸等の放還

五月八日中村誠一等山口政府の決議書を齎して廣島に着す其夜藝藩幕命を宍戸小田村の二人に傳へ明日國泰寺に候せしむ備後助病尚愈へず翌朝書を致して猶豫を請ふ其夕藝藩吏人來りて監察の口達を傳へ幕吏宍戸の寓に臨むべきの意を通ず

右御用之筋有之候に付今日國泰寺へ罷出候樣相達候處不快之趣に付御徒目付

宍戸備後助

御小人目付右旅寓へ被遣御用之趣申渡候筈に付其段爲心得可被達置候

右之節不快之儀にも候得ば急度禮服等相整候には不及候尤申渡候席へ罷出候節帶劍は不相成候事

小田村素太郎

右御用之筋有之候に付備後助旅寓へ罷出候樣可被相達候右御用向申渡席へ罷出候節帶劍は不相成候事

武兵衞河野大五郎小人目附永井謙介橋爪正一郎等來り幕兵寺町旅館の所在地の四方を圍み寓寺の内外を警戒し出入を許さず而して藝藩の目附宍戸小田村を導て幕使の前に出づるや幕吏は不審ありと稱し二人を松平安藝守に託保するの命を傳へ又宍戸に對し名代の用なき旨を令す

宍戸備後助

小田村素太郎

右御不審之趣有之松平安藝守へ預け置く

宍戸備後助

右名代御用無之候

畢て直に藍輿を以て二人を載せ去り尋て徒目附加藤文之助野村勇七其寓に來り書類を徵す從者答ふるに殘留せざるを以てす乃ち宍戸の手箱に及び二人の帶刀幷に懷藏物を收めて去る（此時宍戸小田村は旅館内に於て中村河北等と酒を酌みて永訣を爲し間に書畫を揮毫しつゝ目付の來るを待つ河北等は其間に書類を調査し有用の部は或は衣中に匿し或は館外に運ぶ藝吏の目附を誘ふて來るや宍戸等猶酒を酌み輙ち出てず藝吏屢〻之れを促す宍戸乃ち靜に腫物の部に繃帶を卷き家從の肩に依り步行困難の狀を裝ふて出づ目附の幕令を傳ふるや宍戸拜跪一言を發せず其指示する所に依り藍輿に入る幕吏乃ち輿戸を閉ち細繩を以て輿を縛したりと云ふ）子牌藝使復た赤川の寓に來り幕令を傳へ宍戸小田村の隨員に歸國を命ず隨員等直に嘆願書を作り赤川又太郎之れを藝藩に致し宍戸等と共に逮捕せんことを請ふ藝藩之れを小笠原閣老に致せしも直ちに却下せらる丑牌隨員等盡く旅館を出で江波港に至り翌朝出帆して歸國の途に就く（赤川は事あるを以て午牌出帆す中村誠一も亦之れと共に歸る歸國の後中村及び宍戸小田村の隨員待罪書を上りて命を待つ公之れを問はず）

（幕達）

右兩人附屬幷に召連候もの共は御用無之候間早々當地出立歸國致し候樣可被達候

宍戸備後助
小田村素太郎

右之趣毛利興丸へ可被達置候

（歎願書）

私共主人儀御不審之儀有之藝州樣へ御預け被仰付候段御申渡有之奉恐入候就ては私共一統早々引取候樣被仰達候處家來之身として主人を差置罷歸候段實以情事不忍儀に奉存候如何樣御取締り被仰付候ても不苦候間主人御裁許相濟候迄同樣被召捕付添被仰付度一應引取可奉待後命候間此段藝州樣へ被仰上宜御沙汰被成下度奉願上候以上

宍戸備後助
家來中

五月九日

時に四家名代は五日を以て高森に還り山口よりは四日を以て林良輔廣澤藤右衛門を遣はし名代等と共に幕令に對する方針を議せしめ之れを拒絶するに決し廣澤は河瀨安四郎に托し議決書を山口に致す其文に曰く

一肉大夫幷小田村呼返之御使節來る十二三日頃出藝相成候樣鴻城へ再度申越置候事

一來る二十日期限候處國情之儀今更不能演述兼て士民一統決議之趣も有之此度之暴令決て御請不相成段士民歎願書御家老御書面共鈴尾大夫御持參にて當高森驛へ來る十二三日頃迄御出浮にて御支封御名代中へ被相渡屹度御依賴有之度事

一右にて御名代中來る十七日頃に再度藝城出浮前件通り御沙汰御請不相成段御支封中御書面を以士民歎願大夫書面兩通相添期限前十九日に斷然御返却

小村素太郎
家來中

有之度事
但期限猶豫願は決て無益之事に可有之左候得ば本文之通期限前日斷然御返
却申出候得ば夫迄は請不請邊一切不分明樣所置幕策意外に出候方可然哉と
奉存候事
一右御沙汰書返却に付期限後何時干戈相開可申哉難測就ては追々被仰出之御
趣意を奉じ防戰持久之策略勿論之事に付御指揮無之內進戰無用之段猶又諸
隊總管へ御直に御嚴戒被仰聞度候事
九日寺尾生十郎岩國に來り小笠原閣老の命を傳へ四家名代廣島を發するに臨み
呈出せし所の歎願書を却下し曩きに下せし所の處分令に關係する申請は一切採
用せざるの意を示す
書面之趣難承置候間令返却候尤歎願之品に寄御裁許に關係致候儀に候はゞ御
採用無之候間其旨屹度相心得毛利伊織始め申達候樣可仕候事
十日四家名代又之れに對する歎願書を作り寺尾に托して之れを藝藩に致す

過る四日奉歎願候書面之趣御聞屆難被成に付御差下相成候尤も歎願の品に寄
り御裁許に關係致候儀に候はゞ御採用は無御座候間其旨急度相心得候樣御書
取之趣一應奉畏候然處此度本家へ御沙汰之趣に付國內人心に關係せしめ疑惑
を生じ道路相塞歸邑不容易高森驛滯在辛苦此時に御座候間此段御憐察被成下
此後追々不得止情實歎願可仕儀も可有御座候間宜敷御含置被下候樣以御序安
藝守樣へ被仰上置被下度伏て奉泣禱候以上
五月十日
毛利左京內
毛利伊織
毛利淡路內
福間式部
毛利讃岐內
平野鄉右衛門
吉川監物內

十四日藝藩の使人神尾尙太郎渡邊惣藏岩國に來り宍戸小田村拘留の幕令を傳へ岩國より宗藩幷に三支藩に傳達せしめんとす會〻廣澤兵助藤右衛門改稱高森より岩國に至る吉川氏之れを廣澤に謀る廣澤曰く五月朔日の處分令は未だ公然山口に達せずして支藩の手に在るを以て藝使は山口に來らざるを可とす長德淸三侯の名代尙高森に滯在するを以て各〻自藩に在るの意を以て高森に於て藝使の意を承くべきなりと吉川氏此意を藝使に通ず藝使之れを諾し十五日高森に來り幕令を諸名代に傳ふ四家乃ち答辭を致し仍考慮中に在る旨を告ぐ同日藝藩立野一郎新港に來り此前同月十日四家名代より進致せし歎願書に對する小笠原閣老の命を傳へ假令道路梗塞するも速に道を開き前命を宗藩に傳しむ

（諸家の答書）

此度宍戸備後助小田村素太郎御不審之趣有之御召捕相成候段閣老方より御達之趣宗家へ可相達旨以御使者被仰下候然處先達て宗家御裁許筋御達之儀兼て申上候通り國情難默止儀も有之未申達仕兼折角私共申合中に御座候間此度御達之儀も得と申合追て何分之趣可申上候

毛利左京
毛利淡路
毛利讃岐
吉川監物

五月

（幕命）

書面之趣は無餘儀事情可有之候得共二十日迄期限遲延候儀不相成候間支候者有之道路相塞候儀に候はゞ如何樣とも致說諭萬々一承服不致節は御裁許を拒み候に相當り候に付討破候て達命之儀取計可申自然手餘り候次第も候はゞ期限に不至內早々可申出旨可相達候尤御裁許に致關係候歎願書は決て取次申間敷候事

是れより先き山口に於ては廣島の情報陸續として至り諸老臣政府員屢〻公の面

前に會議し處分令に對しては仍諸老臣及び士民より事情を幕府に陳するに決し十一日河北一に命じ老臣及び士民の陳情書草案を携へ諸末家に至り意見を諮詢せしめ（即夜出發）使節の拘留に對しては幕吏の亡狀を讓め其放還を請はしむるに決し十二日野村右仲に命じ德山岩國を經て廣島に赴かしむ十六日野村岩國に抵り岩國の使人（諸末家の使命を兼ぬ）飯田四郎右衛門と共に岩國を發し翌日廣島に入り宗藩老臣及び四家の使命書を藝藩に傳ふ

（野村携ふる所の書）

去月二日御使者を以御達幕府御沙汰之旨大膳父子幷興丸同月二十一日迄廣島表へ可罷出猶病氣候はゞ末家幷一門之内名代として可差出末家三家吉川監物儀も同樣にて若病氣に候とも押ても出藝可仕押ても難罷出候はゞ重臣之内一人可差出尤分家名代之者大膳父子幷興丸名代には難相成儀をも御書取を以御達相成候に付二國士民情實切迫之中鎭撫手段を加宍戸備後助を御地へ御達期限通罷出候樣被申付候處於途中氣分不相勝期限一日後れ候に付其段備後助より御屆申出尙先着之末家々老よりも歎願仕御聞濟相成候由其後腫物相煩持病も相添引籠療養仕候内本月朔日國泰寺へ可罷出旨御達に付有體演說書を以申出候處病氣押ても可罷出樣再應之御達に御座候得共足部の腫物起居心底に不任容體に候故重て演說書を以出席御猶豫申出候得ば是又御聞濟に相成末家幷吉川監物名代は備後助に不相拘國泰寺罷出候樣との御事に付奉得其旨罷出候由之處當日に至り備後助旅宿へ御徒目付御醫師御差越病氣檢證可被仰付由御傳達早速右御役々御引受申上候心得にて御待受仕居候處御評議變に相成俄に右御役々御差越無御座段御傳達備後助へ被仰達候御裁許之旨末家名代之家老傳手を以主人より大膳父子幷興丸へ可相達段被仰聞孰も驚愕之餘去月二日御達之旨有之旁如何之御筋合候哉と御問申上候處末家名代へ直に被仰達候御筋合には無之名代之者より主人へ申聞せ主人より本家へ可相達旨之由に候得共備後助儀は右御達拜承一途に被差出病氣に候共長引候容體にも無之暫く御猶豫被仰付候得ば取繕御達拜承可仕旁御檢證之御役々被差向候はゞ其邊も御見

屆可相成之處俄に其儀も被差止候如何之御次第候哉と奉存候内右御用向は備後助へ不被仰達別段に備後助幷素太郎へ御用有之暫滯藝之儀御達有之故益國内疑惑を重ね候處九日朝急に國泰寺罷出候樣御達有之候得共氣分未得全快候故今少し御猶豫相願候處備後助旅宿へ御越にて御達相成候段御移有之不計も御一達御軍裝にて備後助共兩人等御不審之由被仰渡尊藩へ御預相成候段附添之者罷歸承之實に不堪驚愕之至奉存候備後助儀は此度名代一途之用向申付被差出候處彼者へは御達不被仰付候而已ならず却て御預被仰出候は何等之御次第柄に御座候哉曾て承知不仕元來國情騷然罷在候も如斯御事可有之歟と未家共其外登坂被仰付候節より國内一統疑惑百出而已罷居鎭撫方餘程手數を費し百方人心を安慰仕漸く備後助其外御當表迄差出候事に有之三監察天幕之御耳圖として落意御承知之上被仰出候に付舊來人心之疑惑も少く相解居候處此度之御始末に相成一統先見之處を以雜湊難訴仕候私共に於ても慰解甚難澁仕候次第御察し可被下候於尊藩に是まで不容易御盡力被下候儀末段之一事に至り箇樣相成候ては誠に痛哭之至にて其窮を訴ふる處無御座候必至覺悟仕居候得共何卒隣交之御高誼此上猶不被捨置弊藩之情實御酌取幕府御處置之次第今一應御伺被下備後助幷素太郎共に於て只主命に赴き候而已にて何も一已取計候儀無之に付急に御差返被下候樣御周旋之程伏て奉依賴候旁之趣幕府向可然被仰達被下候樣宜御取成安藝守樣へ被仰上可被下候樣奉願候以上

毛利大膳

家老中

（飯田携ふる所の書）

今般御達之儀に付宍戸備後助幷私共名代尊藩罷在候處其後備後助幷小田村素太郎儀御不審之趣有之尊藩へ御預被仰付候由何共其故を不奉存國情益疑惑を重ね更に落着不仕抑名義を明にし條理を正し正邪臧否判然明晰にして賞を得て天下悅服し罰を蒙て天下畏服仕候事卽ち堂々勅裁台命たる所以にして一たび令せられ候ては終始不渝御事に可有之候處最初支藩之者宗家名代には難相

成段御沙汰之處終に備後助病氣罷在候て私共名代之者へ御達書御渡之段被仰付備後助御用一途を以罷出居候處右御用不被仰達との御事猶又備後助幷素太郎別段御用有之由にて滯在被仰付候處不圖も俄に幽閉被仰付其名を明にし其理を正され候御事も無之御兵力を以て御迫りに相成敢て其罪の由る所を不能知殊更主命を奉じ罷越居候者御譴責を蒙候道理無之萬一事を誤り候事御座候共其主人へ屹度も可被仰付候處無其義候ては實に國内恟々益疑惑を重ね候樣相成候も無餘儀次第に有之別て御達振の儀は殊に名義を被爲明條理を御正し不被仰付ては國内悅服仕事無覺束却て勅裁台命を輕易に相考候樣立至り如何樣之儀出來も難計深奉恐入候に付備後助幷素太郎儀は格別御不審可被仰出筋は無之儀と奉存候間何分も急速被差返被下候樣御周旋之程伏て依賴仕候以上

毛利左京
毛利淡路
毛利讃岐

高森に於ては初議斷然幕令を拒絶するに決せしも十六日更に議して吉川氏より期限猶豫を請はしむ藝藩寺尾生十郎幕府監察の命を以て三條の質問を發す源左衛門延期を請はしむ藝藩寺尾生十郎幕府監察の命を以て三條の質問を發す源左衛門書を具して之れに答ふ小笠原閣老之れを諒とし吉川氏の請を容し決答の期限を廻て二十九日とし而して從軍諸藩に令し期に至り命を奉ぜざれば六月五日を以て諸方面防長進入の期と爲す

吉川監物

（吉川氏の歎願書）

本家大膳父子御裁許幷末家中へ被仰渡之趣去朔日於廣島表末家名代之者へ御達御座候段彼是奉恐入候然に闔國士民之情狀中々以私式容易に說諭行屆候儀無覺束次第は已に名代共よりも申上候由に候得共尙毛利左京始へ申合度儀も御座候處名代之者歸邑掛途中不都合之儀も有之漸此節罷歸候旁道路懸隔之場所柄迅速申談之都合難出來甚以痛心罷在申候就ては不取敢私より御願申出候

間微衷之程御亮察被成下此上奉恐入候得共當月二十日迄之御期限何卒格別之御沙汰を以當月二十九日迄御猶豫被仰付被下候樣公邊向宜御執成之程偏に奉歎願候以上

吉川監物

（問目）

一道路塞り又且々通行相成候樣開け候旨趣

一監物より末家中申合せ見度旨趣

一期限二十九日を限り申出候旨趣

（答）

一通路難出來旨趣は此度御裁許之條々台命とは申ながら兩國士民感服仕兼反命迄もなく途中より引返し歎願申上候樣途中に待受通路を支候事

一追々通路出來候趣は士民之歎願尤之儀には候得共名代之身分として主人へ反命も不致重大之旨趣歎願申出候筋は無之一應反命之上其主人々々より願出之儀は格別反命不致候筋は無之尤御請仕候儀には無之趣段々說得相加へ主人へ反命だけ之通路は相開候事

一御猶豫を相願申合見度旨趣は全監物胸中に有之事に御座候て重臣之者共は存居候哉も存じ不申候得共私共役儀相荷ひ居候身分には候得共一向承知不仕候事

一御期限二十九日と限り候旨趣格別目途相立候儀には無之候得共下地之持方として十分之儀御願相成候筋も無之先此上十日位御猶豫被下候はゞ一通り申談も仕見候心得を以相立候日限に御座候事

（藝藩への幕命）

松平安藝守へ

毛利大膳父子御裁許申渡右請書差出候期限差延候儀は難相成筈に候得共此度吉川監物差出候書面之趣無餘儀相聞候間願之通來る二十九日迄猶豫承屆候萬一期限迄請書不差出節は即御裁許違背に付速に問罪師御差向被成候間此段可

被相達候

（諸藩への幕命）

昨十九日吉川監物より差出候書面幷松平安藝守より相達候書付共二通相達候間得其意來二十九日期限に至り請書不差出節は問罪之師被差向候間來月五日諸手一同討入候樣可致候尤請書差出候はゞ速に相達るにて可有之候

江戸拘禁者此時を以て廣島に護送せられ居ること未だ幾ならずして送還せらるる

是れより先き河北一は長清德三支藩を歷訪し十七日岩國に至り吉川監物に謁し使命を傳へ且つ宍戸小田村二使拘留の現狀を陳ず監物の謹厚なるも亦之れを聞きて憤激し色を厲して曰く幕府に對する信義今に至り全く盡きたり決戰の外復た他策なしと吉川周旋記に曰く殿樣餘程御憤激にて御顏色殊に惡く不計も御座を被進被仰聞候は御名代を幽囚するは御父子樣を幽閉と同一樣備後助へ繩をかけたるは御父子樣を奉辱と申すものなり扨々幕の無道如此きに至りしや本支之分臣子之情痛哭何ぞ堪ん乍非才此內以來國事に奔走し垢を含み辱を忍び專ら恭順謹慎を表し百端嘆願致し候得共今日之形勢に相成候ては其道も絕へ果て萬不得已之時機に立至り武門之習ひ城を枕にして決戰するは素より不珍事に候目今益守備を嚴にして相待之外他事無之段縷々被仰聞一（河北）儀も感服罷歸候事と又河北一翁の談にも備後助拘囚の事狀陳述に及びたるに監物公は備後助に念々繩打たるよなと押し返して問はれ然りと答へたるとき監物大に奮激し最早幕府への信義は全く絕え果てたりとて氣色大に變じたりと云ふ監物の謹嚴なる是れまで幕府に對し信義を表すべしとの主義を持して捨てざりしも是に至りて大に其趣を異にせしことを知るべし

二十三日林良輔杉孫七郎廣澤兵助等四家の老臣及び副使と共に岩國瑞松寺に會議し河北一の齎らし來れる老臣幷に士民の歎願書に四家連署の歎願書を副具し四家の老臣をして之れを携へ廣島に赴かしめ又別に佐伯太郎左衛門をして我が諸老臣より藝藩老臣に與ふる書を藝藩に致さしむるに決し且つ將來應接の順序を定め二十六日四家老臣等江波港に至り歎願書及び副具の演說書を藝藩に致し佐伯亦其齎す所の書を致して歸る

（家老の歎願書）

嘉永度外夷之御所置よりして御國威日に凌夷し人心不服之機有之候に付御父子樣深御苦慮被爲在幕府へ叡慮御遵奉禦侮之御所置被爲在度段御建白被爲成候得共公武之御間御齟齬之趣有之遂に戊午以來異常之變を釀し內憂外患皇國未曾有之御大事に付御傍觀に不被忍辛酉之歲又々御建言何分も幕府に於て今一際叡慮御遵奉御盡力相成天下之疑惑を解き上下御一致禦侮之御策被爲在度

尙又大樹公御上洛勅諚台命を以御國是天下へ御布告有之度段をも被仰上候處
御採用之上台諭を以御上京叡慮御伺之處下田條約於關東被爲濟候上言上歎思
召勅許にては無之其後自關東拒絶堅固御約定且至當時假條約も御破却御拒絶
被遊度思召候との御事右は皇妹御東下之節五ヶ年乃至七八ヶ年には諸夷盡攘
攘可奉安宸襟候との御誓書閣老御連名にて被差出候御事右等之御次第を以叡
慮台意共攘夷御確定之段此時始て御伺定相成候儀は連々御末家樣方へ御通達
相成候通に有之終に大樹公御上洛君臣神明に被爲誓勅諚台命を以攘夷御布告
に相成候段は固より御承知被爲在候御事に候御父子樣においては御感激に不
被爲堪聊藩屏之御任御身家を以大難に被爲當度攘夷御魁被爲成辱も御褒詔賜
り候處不計も幕府に於ては御齟齬之御取扱振被仰出續て京都御差停に相成從
來御父子樣御心志を被爲勞開鎖二途は皇國重大之事に付前件御伺定之通り叡
慮御遵奉台意御承順被爲成曾て一箇御私見を以御去就不被爲成候は顯然之事
に有之候所一旦如此御次第に相成下に於ては一統疑惑憂憤之餘闕下近く歎願

仕度不得止之心事より脫走之變に立至り其砌外夷大擧致襲來候處前段之次第に
付奉勅攘夷も一變して一己私鬪之姿と相成無餘儀一先止戰之御取計にも被爲
及御愼被仰出候折柄御官位御稱號被召上東西御邸被相毀猶も只管積年御誠意
御徹上被爲成度同列之者以下數人を以て闕下不敬之罪を被謝尾州總督御陣拂
相成候處又候大樹公御進發と相成大坂表へ同列之者罷出候樣御達有之其後大
小監察御下藝天朝幕府之御耳目として御尋問之上一々國情民心御落意御承知
相成候も今日に至り候ては意外之御達被仰出此度御名代衆へ御渡相成候由承
知仕一統驚惑悲歎人情洶々罷居別紙之通申出候別て私共不肖重役之者として
御父子樣斯迄御寃抂被爲蒙候儀を不能奉雪候ては上は御先靈樣へ申譯無之下
は衆人之鎭撫制馭決て不相叶生を天地之間に容るゝ處無之此上は一死之外無
御座候實に臣子切迫之情不自禁抂て奉哀號候間何卒大正當之處を以斷然御所
置上は御先靈樣を被爲安下は二州生民を御救助被成下候樣泣血奉懇願候謹言

五月

（士民の陳情書）

謹で奉申上候事

乍恐御兩殿様多年之御忠誠一朝湮滅仕候而已ならず爾來御國難相連り候處御寃罪を雪ぎ鴻恩之萬一を奉報候事も不相成生を偸み日を曠く仕候儀多罪之至り誠以奉恐入候然處今般又々不容易御沙汰被仰出候由實に驚愕悲泣之至りに不堪候抑癸丑以來外夷之御所置よりして皇威日に凌遲人心不服屢内難をも生じ候次第に候御兩殿様是を被爲悲深く御力を公武之御間に被爲竭勅諚台命御遷奉日夜御勉勵被爲遊候處豈圖讒構百出御寃罪次第に相增候故臣子之至情切迫之餘甲子之變に立至候得共全以朝廷に奉對不遜之心底毫末も無之段は天地鬼神之所知に有之候處事柄不敬に渉り候を以奉恐入候次第に付國家之汚辱をも不被爲顧柱石之臣を罪に處せられ御兩殿様御恭順之御誠意を天朝幕府へ御露呈被爲成候御事に有之候處如何之浮説御取用相成候哉却て將軍御進發に相

成其後天幕之御耳目として三監察藝州御下向國情民心委曲御領掌相成候段被仰聞候に付ては御誠意貫徹之時可有之奉存候處又候今日之形勢に相成り候は實に上天覆育之御聖意には決て無之御事是偏に是非曲直を不問只管二州必滅の定算を暗に賛成仕候向有之故に候最早如何程御誠實を被爲盡候共決て御採酌は無之と奉存候然處御兩殿様兼て御奉上之御志厚く被爲渡候得ば抵て其指令之通り寸土をも削り小責をも御受被爲成候様之儀とも御座候ては却て御名義は不相立一歩退候得は一歩を進め遂に二州御泯滅に至御罪名のみ天下萬世へ遺り人々指笑を被爲招候事必定にて誠に不堪苦慮痛念之至に奉存候然は此御大難に當候ては如何にも其宜を不被爲失様其力を被盡社稷を御衛護無之ては上は御祖先の神怒を被蒙下は二州士民決て其怨を歸する所可有之存候私共是迄生を偸み日を曠くし何共無申譯此度一統議決仕候處有之假令公旨に出候ても上件之通り不條理成御沙汰有之節は誓て奉命不仕奉存候付乍恐兼て申上置候恐懼敬白

五月

（三支藩及び岩國の嘆願書）

今般宗家御裁許之趣私共より大膳父子興丸へ可申達との御旨尚國内鎭撫筋盡力仕候樣名代之家老へ御達し被爲在候處全體宗家々老宍戸備後助爲其一途差出候得ば此者へ社可被仰付之處其儀無御座剩へ滯在被仰付驚愕之至に奉存候殊に國内切迫之情狀は兼て申上置候通に付右之次第柄傳承仕名代家老共之歸途をも遮り候故暫高森驛滯在仕僅に一先歸邑仕候仕合に御座候就ては末家中申合度候得共彼是隙取期限餘日無御座候に付不取肯監物より二十九日迄期限御猶豫相願置鎭撫方之儀精々談合取懸居内願出之趣被遂御許容難有仕合に奉存別て申合盡力仕見候得共從來於士民は大膳父子奉天旨竭臣分度無他之心事に奮勵感激仕居今般不容易御達書之趣有之由追々傳聞仕如何之御次第哉と疑惑憂憤不一形切迫之情別紙之通り嘆願申出猶宗家々老共よりも末家中へ願出候筋實に無餘儀情實に有之加之宗家名代宍戸備後助儀御預け相成候由傳承仕候に付ては又候一層之悲憤を增し殊更說諭鎭撫其方便に絕へ何共不得止之次第於私共も難默止是非徹上不仕ては不相叶奉存候然るに前段の情態に罷居候を只管台命服膺而已に心付御威權を假り無理に押付候節は忽ち國内沸亂に立至り候は必定に有之私共支封之分として内は宗家始め沸亂之勢を啓き外は天下騷擾之端と成候ては祖先之微功不被爲棄御趣意にも相戻り何共不相濟儀にて卽國内鎭撫盡力仕候樣との御趣意に相背彌以奉恐入候儀奉存候窮厄之心事御酌取被仰付何卒天地廣大之御沙汰被仰出被下候樣奉歎願候右之次第に付ては私共へ御達筋之儀も于今兎角之御請申上候樣難仕奉恐入候此段幕府向宜敷御執成被下度奉懇禱候以上

五月二十五日

毛利左京
毛利淡路
毛利讃岐
吉川監物

（家老の書）

先般宍戸備後助幷小田村素太郎儀に付ては以使者致御賴猶末家中よりも申立候通御不審之趣も有之候はゞ備後助儀は大膳父子幷興丸爲名代被差出置候者に付一應大膳始へ可被仰達筋御座候處無其儀而已ならず剩御出席之御役々は軍裝被着銃隊をも被差向候模樣追々傳承仕國内一統不堪憤懣實に御不條理之次第決て天幕之御旨意には無之其表御出先之御處置にて既に亂階被相開候儀と相心得罷居候兼て御承知之國情殊に申立之趣無餘儀筋も有之候處今以爲何御答振も無之鎭撫絶手段此餘如何程之變事可令出來も難測候間其邊之儀幕府向へも可然御取計被下候樣奉賴候且御隣國之事に付此段併て前廉及御達候間御領民動搖無之樣兼て御鎭撫被成置被下度旁之趣宜樣御取成安藝守樣へ被仰上可被下樣奉賴候以上

毛利大膳

家老中

（應接の順序）

一今般被差出候三通御採用不相成書面及返却候節は第二演說書差出最早更に申立候儀無之段相答候事

一註釋論にても申來候はゞ備後助一件旁國情甚激迫致候に付三通書面之外には決て鎭撫不相成候段相答候事

一諸藩より使節を以種々和解論申來候ても國情之儀は舊來迫々申立候通りにて此度三通書面差出候處右御採用無之ては闔國士民決て承服不致段申斷候事

一再び御名代相招候事も有之候とも假令罷出候ても前日差出候三通書面之外一切申立候事無之右御採用不相成儀に候得ば罷出候事不相成段申切候事

二十九日藝使神尾尙太郎新港に來り小笠原閣老の命を傳へ二十六日四家老臣より致せし三通の書及び十七日野村右仲飯田四郎左衛門より致せし書を返還す四家老臣乃ち豫め議定する所に從ひ藝藩に致すの書を神尾に托し今や陳情の道全

く塞がるを以て退て封境を守るの外なく前日の書類は唯哀訴の旨趣を後日に殘す爲め之れを藝侯の座右に留めんことを請ふの意を叙し佐伯太郎左衛門亦防長士民より藝藩老臣に致す書を以て之れに托す是れ實に平和手段の終局たり

（諸家老臣の書）

演說覺

前日奉願候事件幕府御採酌無之貴藩に於ても御推援不相叶ては最早上下途絶し天地恩竭き仰て號ふ所なく俯て訴ること不能闔國人民生を容るゝ所無之次第にて斯く迄被仰付候は聖天子賢將軍天下赤子を生息被爲成候御盛意決て箇樣之御事は無之儀全く中間壅蔽之致す所と奉存候是迄何卒天日を奉拜度百方苦心仕るもかく御拒絶に相成ては最早哀訴の手段も盡果候乍併御取揚無之迚國内一統奉承服候譯には相成兼候付領内鎭靜仕候樣にと被仰出候御主意にも不相叶候得共不得止御達命之儀は此儘相束置候心得に罷在候此餘兵馬被差向候得ば天下生靈塗炭に苦候は勿論折角後來御苦勞不相成候樣にと被仰出候御主意にも是亦不相叶彼是不得止參り掛に付士民一統封境相守候形勢に立至候は必然之儀に有之主人共に於ても取押へ候樣にも難相成無是非次第に御座候間別紙三通何卒安藝守樣御左右に御差置被成下假令後來如何成行候共哀訴之旨趣深御亮察可被成下奉賴候尙此後幕府御沙汰之次第も御座候はゞ國界上にて奉待候間可然御取計之程奉仰冀候以上

五月二十九日

毛利左京内
毛利伊織
毛利淡路内
福間式部
毛利讃岐内
平野鄕右衛門
吉川監物内
今田靱負

（防長士民の書）

一翰致拜啓候然者弊藩之儀に付ては昨年來別て御配慮被成下御厚意致感銘候然處弊藩御處置之儀從朝廷は追々御寛大被仰出猶兩國安穩と迄被仰出候處終に幕府削封等之決議相成候由是迄主君寃罪を雪ぎ度種々歎願申出候得共御聞入無之威力を以て御取詰相成何共難及落着候殊に主君爲名代被差置候老臣をば銃隊被差向無故御拘留尊藩へ御預け相成候段言語同斷之御處置幕府之曲顯然明著にて三尺之童子も所知に御座候且又前斷之通銃隊被差向候事に付於我々も兵馬を以て應じ候は素より臣子之分當然之理に有之就ては堅く國境を鎖し守禦之手筈に御座候得共地形に因り無餘儀引退或は進出候事も可有之候之處たとひ御領内へ一歩相進候共掠略亂暴之儀は互に堅く相戒候間此段御含被下御領民精々御鎭撫所希候爲其如此御座候恐惶謹言

五月

松平安藝守様

長防士民中

御家老中様

既にして六月に入り四境の戰端開け我軍鋭利諸方面の幕軍を敗る時に小笠原閣老既に廣島を去り小倉に赴き閣老松平伯耆守廣島に在り宍戸等を放還し因て調和の策を講ぜんと欲し六月二十一日夜竊に宍戸備後助を幽囚中より招き其意を告ぐ宍戸は國情を述べ辭するに事の行はれ難きを以てす伯耆守懇說止まず宍戸乃ち士民願意聽許の證を乞ふ伯耆守仍て一書を作りて之れに與ふ宍戸披讀して兩判を請求し且つ曰ふ强て命を辭するは不敬に當るを以て姑く命を奉ずと雖ども歸國の後士民果して命を奉ずるや否豫め之れを保證すること能はず今後若し更に嘆願書を呈するあらば諒察を請ふと翌二十二日伯耆守は再び宍戸小田村を招見して放免の意を告げ命を藝藩に下して其意を明にし同時に又曩きに出藝を命じたる十二士も出藝を要せざる旨を示し之れを我に通告せしむ二十三日植田乙次郎立野一郎より書を岩國に寄せ之れを報じ小田村も亦之れと共に書を以て岩國山口に報じ二十七日二使歸途に上り船廣島を發す藝藩植田立野の二人をし

て送り往かしむ其日新湊に着し翌日岩國に入り吉川監物に謁して廣島の事情を告げ七月朔日岩國を發して山口に向へり

（松平閣老の兩判書）

一御兩所之恭順御謹慎之誠意慥に承諾且長防二國之士民無餘議情實も得と致承知不便之儀依ては於自分は及心丈夫々盡力可申入事

六月　宮津侍從

（幕達）

松平安藝守へ

毛利興丸家來

宍戸備後助

小田村素太郎

右兩人之者先達て其方へ御預被置候處御不審之廉も相分候間興丸方へ差戻可被申候

六月

毛利興丸へ

高杉晋作

桂小五郎

小田村文助

村田次郎三郎

太田市之進

佐々木男也

波多野金吾

北條瀬兵衛

佐世八十郎

林主税

山縣半藏

右十二人之者共先達て可相尋儀有之呼出申達置候處最早其儀に不及候

第二十七章　第二奇兵隊脫走始末幷諸隊暴發兵嚴罰

第二奇兵隊の脫走○廣澤と林半七○倉敷侵入○山口政府の鎭撫及び幕府への報知○淺尾襲擊○岡山藩との應接○川邊川の敗走○各藩への通牒○第二奇兵隊の編制更革○槇村半九郎の派遣○脫兵處罰案○八幡隊集義隊等の動搖○諸名士の論旨○諸隊戒飭令○立石引頭等の斬死○脫兵嚴罰

第二奇兵隊は始め南奇兵隊と稱す（詳細は諸隊沿革の章に記すべし）昨慶應元年四月兵員を百二十五名に限り奇兵隊總督山內梅三郎を以て其總督を兼ねしめ白井小輔（後ち世良）木谷修藏を軍監と爲し隊名を第二奇兵隊と改稱し本營を防州熊毛郡岩城山に置く兵員亦漸く加はる其十月山內奇兵隊に歸任す十一月二日隊中兵士窃に不平を懷くものあり沸騰して士官の命を用ひず山口に抵り嘆願する所ありと稱し岩城山の本營を出で鹽田村に至り光明寺に屯せしことありしも清水美作の說諭に由り脫營せる伍長髮を斷ち罪を謝せしを以て其局を結び清水は此時を以て總督に任ぜ

らる翌慶應二年春に及び隊中復た不穩の狀あり世良白井は赤根武人の事に座し謹慎中政府特に林半七を奇兵隊中に拔き第二奇兵隊の軍監兼參謀を命じ岩城山の陣營に駐在せしむ林着後僅に數日隊兵岩國農兵と爭論し歸て本陣に訴ふる者あり軍監書記等之れを戒諭すれども從はず四日の夜或は五日の夜と せるものあり隊兵各〻器械兵仗を奪て本營に迫り銃を發し暴動す書記楢崎剛十郎田村石見之助等鎭撫最も力めたるも應ぜず遂に楢崎剛十郎を營門前に殺し九日公楢崎の枉死を憫み香花料金五兩を賜ふ其黨百餘人在營者は百に滿たざりしも途中より加はれる者ありしと云ふ山口に至り嘆願する所ありと稱し立石孫一郎引頭兵吉櫛部坂太郎等之れを率ゐて去る

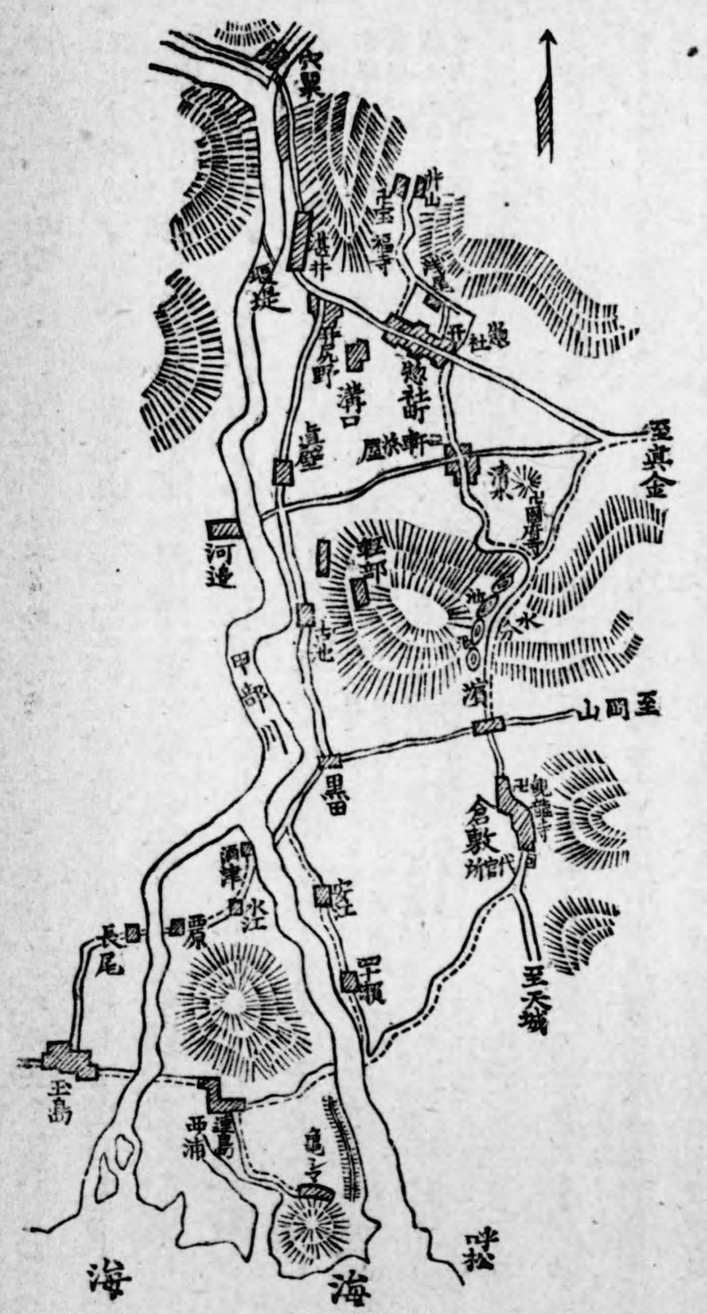
（清水の報告）

過る三日夜中岩國領餘田村に於て隊中藤田武熊島橘太郎外に小隊二人通路之節外より農家へ何時歟と相尋候處内より農兵松二郎と申者昨日之此頃と答候由左樣申ては不相分に付押て尋候得共右同樣之答致候に付右四人之者内へ入込雙方申結びに相成外に連出候處雜言手向等致候由にて及打擲終に縛し連歸懸候處岩國方農兵司令士駈付連歸は不爲致に付預け方致置候段申置陣屋へ罷歸候付長官之者申聞せ候には兼て岩國と御領達ひ之儀は重疊被仰聞も有之雜言失禮等申談候得ば尋常之取締方可致筈猥に及打擲縛し候段手荒之作廻不宜夫を此方より表方掛合相成候ては不容易御手數に立至り候間内濟之取計相成候ては如何哉と申聞せ候處左樣之儀なら氣付筋有之と申屹度取糺方も半途之内今五日暮六時過隊長兵士共不殘本陣相集り種々雜言亂妨小銃等を發し多人數にて楢崎隆藏剛十郎の初名を目懸是非縛し懸終に連出し理解を以申宥候得共聞入不仕理不盡にも陣門外にて斬首仕兵士は鹽田邊より田布施へ出大島郡を心差致脫走候間此段致御屆候以上（四月五日）

既にして脫兵は船五隻を遠崎村に艤し海に航す從ふ者九十五人大島郡安下庄に至り暫く安樂寺に憩ふ脫兵の巨魁立石は原と播州三日月の產なり生れて未だ久しからず作州の親族立石某の家に育せらる稍〻長じて劍道を好み造詣する所あり出でゝ備中倉敷の豪商大橋平左衛門に養はれ大橋敬之助と稱す後ち脫走して長州に入り南奇兵隊の起るに至りて之れに入り名を改めて第二銃隊々長と爲り應接方を兼ね後ち南奇兵隊の第二奇兵隊と改稱するに當り銃隊々長に擁推され書記役を兼ね最も隊中の望を得たるものなり引頭は當時第一銃隊司令士にして櫛部は五番小隊司令士たり立石孫一郎衆に告げて曰く

今日の擧既に櫓崎を殺し本營に暴動す罪免るべからず假令山口に至るも願ふ所容れられざるのみならず誅戮反て立ところに至らん寧ろ走りて事を他邦に擧げ功を以て罪を償はんには若かずと衆皆之れに從ふ一說に據れば立石は既に遠崎を發す同意せざるものありて船に搭せず故に九十五人を勸して去ると云ふ或は曰く大橋敬之助養父平左衛門に事へて孝なり養父嘗て近隣商某と米穀糶糴の事に關し爭論あり代官櫻井久之助某に偏し平左衛門を曲とす是れより平左衛門某と相惡む敬之助遂に養父の爲め讐を某に報じ脫して長州に入り姓名を變じて立石孫一郎と稱す事暴動事件三年前に在り立石が倉敷を襲ひしは一は讐を櫻井に報るの意ありしと乃ち航路を東方に轉じ九日備中國窪屋郡西浦に抵り上陸して連島に達し其夜發して倉敷の幕府代官所を襲ひ火を放ちて之れを燒き時に代官櫻井久之助藝州に在り難を免かる十日進て淺尾領井上村寶福寺に至り屯す當時の記錄に據るに倉敷を襲ひたる脫兵の數を或は百三十人許とし或は百五六十人計とす糧食其他器械等の搬夫途より加はりしを以て其數百を超えしならんか又立石は倉敷を襲ひし時其兄の事に坐して獄に下りしを救ひて養家に歸り父祖の墓に詣で觀龍寺に屯し市民を諭し各〻其堵に安せしめ獄を破りて囚人を放ち其中事に堪ふるものを軍に從はしむ故に市民糧を輸送し便を爲すもの多かりしと云ふ而して其實福寺に向ふや倉敷を發して濱茶を經原津村に至り水分山を超え三軒屋に出で此より隊を前後に分ち前隊は淺尾を經て寶福寺に到り後隊は湛井を經て同寺に會せりと云ふ是れより先き廣澤藤右衛門は將に七日朝を以て程に上り高森に至らんとす會〻六日夜岩城山の變報を傳ふる者あり而して未だ其狀を詳にすること能はず藤右衛門乃ち七日未明急に山口を發し先づ上ノ關に至ら

倉敷淺尾連島略圖



んとし途中林半七に遇ひ狀を聞き進で上ノ關に至る立石等既に去て往く所を詳にせず林は變後直ちに岩城山を發し道にして廣澤に遇ひ星馳して山口に着し政事堂に出で狀を報じ意見を陳じ善後の策を講じ脫兵は軍律を以て之れを嚴科に處せんとす公召し見て親しく之れを許し林をして復た星馳して岩城山に歸らしめ政府は又書を高森の小田村赤川に送り急に藝藩を經て變報を幕府に上らしむ

亦澤は山口の要務急を告ぐるを以て遂に高森に至らず日ならずして山口に歸れり當時直目附柏村數馬廣公の親命を以て變地に赴く蓋し亦鎭制慰撫の意に外ならざるなり發着歸日未だ詳ならず廣澤の途中林に遇ふや變報を幕府に出すの要を思ひ林に托して政府に告げしむ政府も亦廣澤と同意見なりしを以て文案を添へ直に書を高森に發せしなり

（政事堂より小田村赤川へ の書）

前略此度南奇兵隊脫走一件幕府へ屆相成可然との儀に付委細藤右衛門迄別紙を以申越候然處右は片時も早々相運候方都合宜布可有御座候付萬一藤右衛門未だ御地越着不仕候はゞ各樣方別封御開き其御運方相成掛候樣被成下度爲其如此此座候（四月七日）

（同く廣澤へ の書）

急速御發程御苦勞之御事扨南奇脫走一件疾御承知の由にて此儀は幕へ御屆相成候方後來の條理にも相拘旁可然段は貴兄にも其御含被爲在候事に付於爰許も今朝衆議之上愈右御屆相成候樣御決定候間於御地其段御運方可被下候云々

二陳御書面等於爰許可相整筈之處不能其儀候間何も可然御取計被成下度尙半七をも御方角へ引返候付此よりも委細御聞取可被下候

三白幕へ御屆之儀は趣次第之御含之由林半七途中にて承り候儘相咄候爰元詳議にてはたと（他）へ不令脫走大島郡邊其外御國內に居候共有無脫走屆相成可然策之一端にも可有之候

小田村等書を得て藝藩に致すの書を作らんとするに際し廣澤亦上ノ關より文案を送り來れるを以て政府の草案と參酌して報告書及び藝藩への照會書を作り赤川を廣島に遣り之れを藝藩に致さしむ事は別詳に詳かなり

（屆書）

周防國南郡に罷居候兵卒之內百四五十人如何之旨趣に候哉器械相携當月四日

夜令脱走候行方探索嚴重取糺可申付候得共其内不取敢致御屆候此段可然御取計被成下度致御願候以上

四月

（照會書）

大膳領内南郡屯集之内百四五十人計當月四日夜器械相携令脱走候に付萬一いか樣之所業可致哉も難計早速行衛探索召捕方手配等嚴重申付置候畢竟右旨趣如何之次第哉は慥に不相分候得共追々も申出置候通國内情實に付ては鎭撫說得方苦慮不一形候處一昨冬以來之次第も有之且昨冬主人父子多年之誠意士民一統之情實とも巨細被聞召屆被下候ては最早平常之御沙汰をも可被仰出御事とのみ闔國奉渴望居候處今般御達振にては何歟不取留道路之風說をも傳聞致し乍恐闔國意外之御沙汰振にも可立至哉と疑惑之餘憂憤に不堪より差起り候にても可有之哉何とも不相濟次第に付於國元は勿論捕方手配等急速嚴重申付候得共他國罷出候儀も難計爲念不取敢致御達置候間億萬一貴國罷越候はゞ被

召捕被下候樣致御賴候此段幕府向へも宜樣御屆被成置被下候樣仕度致御賴候

以上

立石等の寶福寺に屯するや淺尾の領主幕臣蒔田相模守報を得て急使を岡山松山（備中の松山）二藩に馳せ援を請ひ又別に使を寶福寺に遣り隊兵の藩名と來意とを問ふ立石出でゝ之れに接し告ぐるに長藩元第二奇兵隊志す所ありて北國に赴かんとするを以てし且つ數日の滯留を得んことを請ふ使再三往復して遂に迅速の撤退を求む會、松山藩の兵四百餘變を開き來りて淺尾に在り蒔田に聲援す立石等乃ち十二日の夜を以て寶福寺を發して野山村妙本寺に赴くの狀を爲し夜半急に宍粟村川磧より還りて淺尾の陣營を襲ひ十二日拂曉（蒔田の家臣より幕府の監察に出せし手續書に據る或は十三日とせるも）奪ふて之れに據る既にして岡山藩亦老臣池田隼人等をして千餘の兵を率ゐて之れに向はしめ松山兵と共に變に備ふ立石櫛部は卽夜岡山兵の軍營に赴き川田村善言寺に於て彼と應接する所あり蓋し立石等は岡山藩の我が毛利氏に同情を表し幕府の處分に反對するを知るが故に依賴する所あらんとせしなり岡山藩聽

汚損資料

かず十四日を以て戰書を與ふつ（岡山藩は一時躊躇の狀ありしも滯藝の閣老より追討の命到り且一鷗齋里見二郎等當時止まりて岡山に在り立石等の事に同意すべからざることを論せしに依り討伐の議決したりと云ふ）

（昨烏は始めて面晤欣然此事に候然は備前守殿寛大公正之處置殊に正義勤王之士に被爲在足下之黨攘夷之赤心可被嘉候得共今般公料騷擾敷隣領奪淺尾據其墟跋扈之狀其罪不輕不鎭之則庶民不能安政令勢ひ不得止事今十四日正午勢を揃雌雄を干戈の間に決可申尙佐藤瀧之助可申述候此旨隊將被申付如此に候謹言）

森下立太郎景鄕

四月十四日

立石孫一郎殿

櫛部坂太郎殿

軍配下

是に於て立石等は卽日淺尾を去り川邊川に沿て下り途に五隻の河船を儲ひ流に從て連島の東方龜島附近に至る是れより先き滯藝の閣老等は我報告を得又倉敷の飛報に接し十二日の夜を以て急に兵千五百を汽船二隻に載せて之れに赴かしむ十四日汽船黑崎に達し兵士上陸して玉島に屯す既にして立石等の一隊川邊川を下るの報を得直に之れを追ひ兵二百餘を河堤に伏せ隊兵の對岸に沿ふて來るを襲擊す隊兵驚き船を捨てゝ陸に上り積材に據り應戰最も力め日暮に至りて止み隊兵多くは暗に乘じ再び船に搭じて逃れ去り餘兵は四散せり

此時に當りて山口政府は是月十三日書を筑前小倉津和野の三藩に寄せ脫兵の事を報じ脫兵若し至るあらば之れを捕縛せんことを托す（此書は藝藩への分と少しく首尾を異にする外は同文之れに對し三藩より日後各〻傾承の回答あり）既にして倉敷の變報を得るや十八日再び書を前三藩に送り倉敷の暴徒は前に報ぜし脫兵の疑あるを以て若し至るあらば嚴正に處置せんことを求め且つ彼輩若し藩に歸らば國法に照し嚴科に處すべきことを告げ同日又老臣根來上總鈴尾五郎書を岡山藩の老臣に寄せ狀を報じ嚴正の處分を托し更に急使を廣島に遣り書を藝藩に致し事を幕府に報ぜんことを求め又別に書を筑前小倉津和野の三藩に寄せ狀を報ず（三藩への分は藝藩への分と首尾に小異あるのみ）

（岡山藩へ致せる老臣の書）

未得御意候得共一筆致啓達候然ば此方領內南郡屯集之內百四五十人計當月四日夜器械相携へ令脫走候付其段不取敢幕府向幷隣藩へも相達置候處乘船上筋

〈聞登り候由に付萬一孰れに於て如何樣之所業可致哉も難計早速召捕方手配等嚴重申付漁船數艘乘組藝州御手洗迄爲追掛候得共終に行方不相知不得止御手洗御番所役〈委曲相達置一先引取候處頃日承及候得ば過る十日頃備中倉敷邊〈浪士體の者多人數入込種々及亂妨候由萬一右脫走之者ともにては無之哉と深掛念罷在候就ては御封境近方にも有之不一形御手數可有御座甚以難御堪次第奉恐入候弊藩之情實御承知之通一昨冬已來之次第も有之彼是鎭撫說得方苦慮不容易候處折柄不意之儀出來何共痛心此事に御座候自然御領內立入候儀も有之候はゞ尙又乍御手數御存分に御所置被成下候樣致御賴候此段可得御意由被申付如是に御座候恐惶謹言（四月十八日）

（藝藩〈の書）

此內及御達置候通大膳領內南郡屯集之內百四五十人許當月四日夜器械相携令脫走候者共乘船上筋〈向け馳登り候由に付召捕方嚴重申付漁船數艘〈乘組御領內御手洗迄追掛候得共終に行方不相知不得止次第に付其段捕方として差出候者共より御手洗御番所〈相達置一先引取候事にて御承知可被成候然處頃日承候得者過る十日頃備中倉敷邊〈浪士體之者多人數入込種々及亂妨候由萬一右脫走者にて無之哉と深く掛念痛心之儀御座候就ては御封境近方にも有之自然御國內立入候儀も有之候はゞ乍御手數御存分御所置被下候樣致御賴候勿論一人にても領內罷歸候者於有之は國法通可處嚴科心得に御座候此段幕府向〈も宜樣御屆被成置被下候樣仕度致御賴候以上（四月）

山口政府は一面此の如く脫兵の處分を明かにせんとすると共に一面第二奇兵隊編制の更革を急とし二十日命を總督淸水美作に下して處理せしめ二十二日令して脫兵處置の方針を示し政府の意は嚴に之れを處罰して藩辱を洗滌するにあることを示し同日又槇村半九郎に委ぬるに脫兵の處分を以てし誅戮及び臨機處斷の權を授け林半七と協議して事に從はしむ槇村乃ち三條の處罰案を定め認可を得て翌日山口を發し暴動の地に向ふ

（第二奇兵隊編制改正令）

一總人數百二十五人
一中隊兵卒七十二人皷手共
右中隊司令一人　小隊司令一人　半隊司令二人　砲一分隊兵卒十六人
右分隊司令一人　輕砲司令二人　總管一人　軍監書記各一人交互兼掌
器械小荷駄兼掌三人
總計百一人
殘卒二十四人
但豫備小遣等引當
右第二奇兵隊御詮議之趣有之精選之上前書之通取立被仰付候付追て現名可被申出候尤是迄御定外之人數取立器械をも貸渡置候樣相聞へ此度改正被仰付候就ては向後過剩之兵被差留器械之儀は上ノ關御代官所へ致引渡候樣被仰付候事

（脫兵處罰案）

南奇兵隊之内立石孫一郎初め凡九十人許當月四日夜器械相携本陣へ差迫候付種々令理解候得共不致承知而已ならず本陣へ向け及發砲剩毛利隱岐家來楢崎剛十郎を殺害之上終に脫走せしめ遠崎より乘船上筋へ向け馳登候由に付召捕方嚴重手配被仰付藝州御手洗迄追掛候得共終に行方不相知候付不得止引取候處過る十日頃備中倉敷邊へ浪士體の者多人數立入御國名をたばかり備前其外へ種々及掛合終に及亂暴候由右は全南奇兵隊脫走之者に無相違樣相聞へ不一形御國辱に立至り既に昨年來幕府向御應接振其他飽迄御條理被爲立拔漸々御正義相糺候邊へも餘程關係せしめ又々世間疑惑之端を開き彼是御國恩を忘却し不忠不義之至可惡之事に候處備前其外より討手差向け令敗走頃日御國内へ立歸候樣相聞へ早速詮議被仰付候事に付不日被召捕可申猶又最前本陣へ亂妨に及び脫走之砌途中より拔歸候者迄重科難遁事に付他藩へ之響合にも相係り候儀故分明相知候上は速に誅伐梟首をも被仰付候事

但場所之儀は大島郡熊毛郡上ノ關三ヶ所最寄之地に於て被仰付候事

附姓名之儀は追て可申上候樣被仰出候事

本文猶又遂詮議候處本陣へ及亂妨脫走の砌途中より拔歸候者共儀重科死罪難遁候得共他國に於て令亂妨候者共よりは罪科輕き方に付格別之御了簡を以死一等被免永く被處遠流候事

（槇村の伺定書）

一南奇兵隊の陣營に亂暴したるも國外に出ざる者は死一等を免じ流罪

二南奇兵隊の陣營に亂暴せし者に非るも國外に附隨して亂暴せし者も亦同前

三南奇兵隊の陣營に亂暴し幷に國外に出で亂暴したる者は斬る

一たび第二奇兵隊脫兵の事あるや奇兵隊八幡隊集義隊義昌隊等の中事を好む者續發し藩外に出で暴擧せんとす當時人心激昂幕府の抑壓を怨み政府の爲す所を認めて猶柔と爲す者藩內に充滿す諸隊少壯者の如き脫兵の爲す所を見て反て之れを壯なりと爲し以て此事あるに至れるなり然れども政府は別に見る所あり其事或は一藩の名分に關せんことを憂へ大に力を鎭撫に盡し其既に事を發する者に對しては斷然たる鐵案を下し殆んど忍ぶべからざるを忍び以て禍根を絕つに勉めたり二十四日令して嚴に諸隊を戒飭し軍規を振肅し復た事を生ずるの憂なからしむ而して此等の暴擧を憂ふる者獨り政府員のみならず藩內の有力者は齊しく皆其憂を共にし以て政府をして內顧の煩なからしめんとせり蓋し此期に及びては概ね既に斷然幕府と絕つを大局の利益と認むるも部分發動の如きは無謀の輕擧たるを以てなり

（戒飭令）

南奇兵隊脫走以來不心得之者處々に於て諸人をかたらひ暴擧之萌不少樣相聞當今彌以切迫之御時勢御指揮を不待猥に拔駈體之所業有之候ては御軍律相背候而已ならず終に御國辱にも立至り不相濟候事に候條萌露顯之上は最寄り諸手を以說得鎭定勿論に候得共右不令承知萬一手に餘り候節は時宜により御差圖をも不待速に討取候ても不苦候事

津々浦々に於て無切手乘船不相成段追々嚴重に御沙汰之趣も有之候處當今彌以切迫之御時勢に付ては間〻脫走體之者種々船頭をたばかり乘船せしめ候儀も有之哉に相聞甚以不謂之事に付此往き御法相背候者於有之は當人は勿論船頭船子に至迄重々可被相咎候事

（廣澤より槇村へ の書）

先刻御書翰被下委曲致承知其節略及御答置候樣八幡隊兵卒脫走之萠有之候段今朝爲注進罷越是も浪士桃井某とか誘ひ無趣意之卒等他國にて一擧に及候得は多安く士分の位祿も被請候事と而已相考無謀無策之浮浪生迚も將帥之位は扨置兵卒中にても中等以下位之馬鹿者に鼓動被致從來之御國恩を忘却し兎角御外辱にも可立至擧動不少泣血悲歎之至奉恐入候是と申も南奇脫走より差起り倉舗邊頓に敗走と申事一切承知不仕より應援之心底と相見候事故此度御奉命之御處置振大きに差急事にて斷然被相行御國中處々へ例之通高札被差立候得ば決て肅然如深夜相成り爾來は軍律屹度相立無趣意之擧動相止り可申事と存候然處小郡邊擧動は速に討取候樣相授置候得共自然も乘船後間に合不申又々南奇之手に出候得ば上筋を差て可馳登候付自然上ノ關邊碇泊も難計に付貴樣歟又は打廻り之者にても此狀達次第麻郷勘場迄被差越此書翰之趣を以上ノ關邊諸兵之內を以急變に相應候樣御手組被成置室津邊探索萬一繫船候はゞ打取候樣御代官役其外申合其御取計相成候樣にと存候旁之趣爲可得御意如此御座候幾回も南奇御處置差急事にて何も御都合能御存分早急御取計肝要に存候

（四月二十三日）

（同上）

今朝態度得御意置候八幡隊暴動之萠露顯無間說得鎭靜に及び乘船迄には立至り不申都合德山表之樣位にて孰れ巨魁斷然所置可仕無餘儀事とは乍申泣血悲歎之至併只今之內蜂起は反て後日一陪差迫候節之規律締りにも相成り雨降地堅之譯にて可有之哉不幸中之幸歟と奉存候然るに可憐は彼無趣意之雜兵倉舗之敗走を不知一圓他邦へ出候（は何歟好仕事も可有之樣相考終に嚴科にも立

到り實に々々不便千萬御座候當度大御處置御國中へ發聞之上は肅然に立到屹度御取締にも可相成幾回も速に相濟候樣御配慮致御賴候且又右樣暴擧之戒猥に出津等之嚴禁猶又布告せしめ置候右爲可得御意如此御座候（四月二十三日夕）

（山田宇右衛門より木戸への書抄）

南奇脫走之輩暴發して器械佩刀迄も抛擲し可遁歸ものとは存も不寄去春以來國力費耗之際餘分之米銀を被充遣剩へ俵に坐し人夫を叱し候體至今日夢の如く幻の如く續之て又八幡之脫走有之由兼々虛喝之驕兵實地如何哉と苦思罷在候處敵を不引請內其驗を顯し是又國家之幸共可申乎總て驕兵之情實己之勝事を知て人之勝事を不知因之己一度勝時は其驕不可再制人一度勝時は氣鋒脫して不可再戰此理を熟知して諸隊之總督兼々兵理を研究し驕兵と不相成樣範軌に入置不申ては國家之大事と奉存候是迄兎角理屈を以上を難し或は上にて御手が不着は於下着け可申抔之辭氣其外衣服之制度を破り候類則是其配下之驕を扶長するものにして至今日配下之驕不可制勢と相成候自今着實之工夫を成し候はゞ前に所謂脫走は國家之大幸に有之申候前斷處置御熟考是祈申候（四月二十三日）

（井上より木戸への書抄）

一南奇一條實に殘念之至斯迄も御誠意を妨げ御國耻を招き且背軍令魁剩政府之命とたばかり外聞疑惑を生じ實に大罪至極此意趣外藩へも早々徹底仕候樣被仰付御尤千萬書面抔は寫取早々他所へ流布致候樣精々心配可仕候假令多人數迄も必ず嚴科に御處置御國內之者へも斷然御示奉祈候就て現場を以外藩へも相洩れ候方可然左すれば馬關にて十人上ノ關にて十人山口にて五人萩表にて五人も處置有之候得ば不日他所へも相知れ可申候又馬關抔は實に他所人入込候地故現物を見候得ば隣藩へは書面抔より神速と被相考候どふぞ御手數とは奉存候得ども必々右樣御處置奉祈候

又八幡隊三十人計りも脫走と風聞慥なる樣承り候間如何之事に候哉若し眞

ならば實に辺り候次第又御手煩事と奉存候（四月二十四日）

（山縣狂介より木戸へ の書）

井上兄へも可然今朝御傳言も有之候得共出懸候ゆへ速歸陣御待可仕候黑川驛にて相認候以上

昨夜之御芳簡宇翁へ早速相屆させ置候扨只今呑鵬先生より承候へば第二奇兵隊過る五日脫走仕候よし何とも氣遣しき次第御座候例之浪士一身上論よりして兎角二州之安危をも不顧愚夫々を欺き候策に可有之と奉察候就ては早速御手を被下候儀は勿論候處一時之愉快に乘じ嘉川亀集之浪士雷同仕候も難計に付御痴は無御座候得ども彼方へ速に御手を被就候樣奉祈望候長州之忠臣と天下長州を思ひ詰候浪士とは小同大異之義にて年來議論御座候しかし深謀遠慮は不可測候得共天下に耳目を驚し候人物も少き事候何分書餘拜青萬縷可申上候匆々敬白（四月七日）

既にして脫兵立石等は逃れて備前下津川に至り更に丸龜に奔り又大津中島に出で大船を儲ひ上ノ關岩見島の海上に浮び立石及び引頭は密に室積に上陸し二十五日を以て淺江村誓敎寺に至り寺僧に依り清水美作に訴ふるに哀情を以てし士卒の命を請ふ寺僧之れを立野清水の采邑に報ず清水は二人を捕へんと欲し長德寺の僧を遣り二人を室積に誘ひ翌夜島田橋に抵る伏兵急に起りて之れ圍む二人抗拒す逮兵已むことを得ずして銃擊し遂に立石を斬る引頭は逃れて民家に入り自殺す槇村半九郎の政府の命を奉じて室積に至るや立石引頭の二人已に清水美作の兵の爲めに死に就きたるを以て立石の首を梟し第二奇兵隊及び麻郷兵に命じ往きて岩見島海上の殘兵を捕へしむ其他大島郡岩國山代小周防花岡に於て逮捕せらるゝ者亦多し槇村林便宜の地に出張して槇村審斷し林檢證し各〻其罪に處し翌五月に至る死に處するもの前後四十八人他之れに稱ふ六月に及び槇村に金十兩林に金五兩を賜ひ其他二人に從ひ勞あるもの賞賜差あり八幡隊集義隊等の脫兵亦皆誅に伏す

（集義隊報告）

一筆致啓上候然ば集義隊中赤瀨英二御簇五郎英三郎山田十郎四人之者此内致入隊伍組等未致差置候内南奇之脫走に雷同し少々伍中之少年輩を相結び船等心配之樣子より及露顯山田英三郎御簇は大に悔悟し德山於斷頭場割腹致させ候赤瀨之儀は隊中を誘候少年輩より擊殺に及ばせ候右爲御屆如此御座候云々

四月二十一日

尙々本文之趣三隊へ相拘候處肅然如深夜鎭靜罷在候

（義昌隊報告）

西太郎左衞門儀南奇之脫走に雷同致し隊中之少年輩を誘引し既に脫出之企有之候處事及發覺候不容易御時節柄を不顧暴擧相企候段自深く悔悟仕候に付德山斷頭場に於て爲致割腹候右爲御屆如此御座候云々

四月二十一日

（八幡隊報告）

八幡隊中水戸新兵衞貫田源之進野村兼千代伊藤求馬中村吉五郎五人之者南奇之暴擧を慕ひ若年之輩數十人を盟約し過る二十二日夜令脫走候處於黑潟潮時を待居候に付追々說得仕漸歸陣に及び候得共多人數を誘導し暴氣を企候段不恐上次第に付右巨魁五人之者令斬首於陣門内梟首仕候間右爲御屆如此御座候

四月二十四日

（政府より奇兵隊へ）

一筆啓達仕候然ば奇兵隊波多野十吉有田常吉事於上ノ關宰判被召捕候付御處置振之儀昨二十五日筑前殿より總管衆へ御狀を以被仰越尙御受取方等之儀は各樣迄申進御承知可被成と存候然る處右兩人之者共只今彼宰判より爰元連出候付尙又締り付にして卽刻御地へ連越爲致候間御受取之上最前御沙汰之通早々其御取計可被成候爲右如此御座候恐惶謹言

（奇兵隊報告）

以手紙致啓達候然ば隊中有田常藏波多野十吉重科に因て斬首被仰付候段御沙汰相成候依之今夕其取計致候右に付死骸之儀は奇兵隊例格之通申談致始末候此段致御屆候以上

（同上）

以手紙致啓達候然ば隊中山本龍之進事有田常藏其外同罪之處今朝於船木致捕方今夕一同致斬首候右に付死骸之儀は奇兵隊例格之通申談致始末候此段致御屆候以上

尙々沓野猪三郎事右龍之進と過る二十六日夜於宮市相別候由捕方之者差出有之候得共今以行衛不相分捕方之上右同樣取計方致候間是又致御屆候以上

（廣澤より小田村赤川へ）

集義隊中浪士其外首謀之者四人程にて少年輩を皷動し右備中一擧へ應接之手段せしめ候段及露顯昨二十一日夕德山斷頭場に於て巨魁一人を右被誘候少年輩を以小銃にて擊殺殘り三人之者斬首等夫々及處置又奇兵隊砲卒之者四人萩

近海島へ渡り流人を誘ひ右擧へ出掛候處相島之流人を大島迄連出候處彼島流人承引不致相島の流人も大島へ居滯り終に流人四人程組し奥阿武郡迄出掛候得共何分小人數之事に付終に奇兵隊砲卒之者右流人を捨逃行候段屆出候付當節穿鑿中にて決て兩三日中には被召捕可申候左候得ば是又死罪當然に御座候何邊無趣意之雜兵等御厄害を釀成し可惡之至前件數十人死刑勿論難忍候得共國之刑典難免右被相行候上は世間へ之屹度申譯も相立可申寺尾輩に於ては折柄弟大島郡より歸途勝坂にて相對現場之次第不取敢相咄置猶又於鴻城も委曲入承知置候事にて暴動之趣は落着致し居候得共實に幕列藩への大疑惑端を開き寺尾より辯解も直に氷解仕間敷實に是迄之處殘念至極奉存候就ては前件之趣寺尾其外藝政府向へ早々折能き節被仰解置候樣奉禱候數十人之死刑難忍候得共後來軍律其外刑典屹度相立暴擧之戒には大に益有之被相行候上は肅然可有之と被相考何も悲歎之至御察可被下候畢竟驕兵之弊より差起り候事にて以後實着之兵可相成還て士氣作興に可立至此段は御安意可被下候云々

而して第二奇兵隊脱兵巨魁の一人櫛部坂太郎は岩見島の逮捕を遁れ豐後伊豫讃岐但馬の各地に流轉し遂に伊豫西條に遁れ三木某の家に匿る其行動亦往々海賊類似の聞あるを以て林半七命を受け部下十餘人を率ゐ之れに赴き西條藩に交渉し之れを逮捕して歸る時に翌慶應三年六月なり其二十六日半七に銀三枚を賜ひ其功を賞し第二奇兵隊書記伊藤三亮同小隊長相木又兵衛以下十人に賞賜各差あり半七に隨ひ捜索逮捕の勞あるを以てなり櫻井軍記亦櫛部と同く逮捕せらる二人投獄數日の後其年十一月十八日共に斬に處す

案ずるに當時長藩の態度は恰も滿を持して放たざるの狀あり隊兵等に在りては廣島談判の曠日彌久に堪へずして動もすれば自から事を擧げんと欲せり隨て暴動者の多數は事情憫諒すべきものあり而も藩政府及び使節の方針は飽くまで正路に據り名義を全くして天下大方の同情を失はざらんとしたり是れ第二奇兵隊其他の暴動者を嚴罰して苟も假借せざりし所以にして所謂揮淚斬馬穆なり故陸軍中將井田讓氏は當時藝州口出張大垣藩兵中に在り其人の談話に依るに當初倉敷一件は長藩の故意敎唆に出でしものと信ぜしに其後長藩の暴動者に對し斷然たる處分を行ひしを見て人皆其軍律の嚴肅に聳動したりと云へり蓋し眞なり此頃長藩軍人間の情態は左に掲ぐる山縣の書翰によりて之れを概見することを得べし

（山縣より木戸へ の書）

日々敵情切迫に押移り御苦慮不少儀と奉想像候此間高田兄より承り候得ば例之一事も御決議に相成候よし此往きは銘々意を用ひ大に盡す手段社肝要に奉存候此形勢砲聲一發一日もはやめ候儀二州且神州之幸と奉察候應接談判等速に御手切被仰付第一小瀨川口砲臺關門等造築藝國一藩之見込等尖に取紛候樣御手を被下候はでは賊勢日々培養我兵日々縮感大に氣膽を被奪士氣作興之手段被施内憂を釀成仕候樣相成候ては兎ても御取かへしは不相成候樣奉存候既に今日期限之事に付てはもはや頓にも要衝之地へ出張被仰付規律嚴整待敵之

覺悟こそ尤今日之御急務と奉存候昨日上使を以御直書付拜見被仰付候付ては孰も一統奉感戴賊軍突入之方行屹と相立候得ども深く國家を憂候者に至ては亦内顧之念も不少候就ては此間建言書一通差出させ候付今日に當り候ては馬上之御決斷只管所希御座候差向御兩國を必死之地に置候て策略は第二と奉存候砲聲一發直樣東西へ手を下し頗る遠大之謀をめぐらし候こそ肝要歟と奉存候はた先日御噂仕候總奉行論迅に御運ばせ可被下候附屬の役人等は兼て馬關出張人員にて相濟可申と奏存候是等は素より御六づかしき儀は無之事と奉存候尚又愚按之廉々申上候御取捨奉願上候餘は後鴻只砲聲一發日夜相待事御座候爲其勿々爲天下國家御自嗇々々頓首敬白

初夏二十一日　狂介

二白血氣壯年之士岩城山覆徹に出候樣有之候ては實以國家之一大事と日夜痛心鎭靜罷居候事御座候御洞察被成下候樣奉願上候以上

第二十八章　長薩聯合及び英佛關係

品川の在京幹旋○大久保の書翰○黑田の來藩○英公使會見一條○伊藤の歸關○高杉の汽船購入○伊藤井上の奔走○石川淸之助の幹旋○高杉伊藤井上の動靜○英公使の馬關寄港○戰爭中の英佛軍艦○薩藩內使の來藩○乙丑丸事件の收局○開戰後の長薩關係

慶應二年の夏期に於て長薩の關係は益〻酣熟せり京都方面に在ては品川彌二郎既に久しく薩藩の京邸に潛み薩人と益〻相親み旁ら京情を探聞して藩地に報し又道を求めて藩の主張を京紳及び他藩人に注入するを力め品川の薩邸に在るや薩人屢〻壯士等を集めて琵琶の會を催し品川は又歌謠類を作て日を消せるが如きこと品川の書中に見ゆ其事誠に閑散の如かりしと雖ども其實は然らず之れに依て大に其任務を果すの便を得たりしものゝ如し其四月一日木戸に送りし書中「琵琶之會兩三度有之此節妙手段に有之中々愉快之事も不少候」と云へるに徵するも箇中の消息を知るに足るべし大久保一藏は書を木戸に寄せ京攝の事情を報じ黑田了介は大久保等の意を受けて廣島より復た山口に來り又福島新三郎の京都より廣島に來り四月十九日京都發小田村素太郎を訪て上國の形勢を語り

薩藩が再征の出師を拒みたる顚末を告げ尋で岩國に來るあり岩國の横地外記東上して大坂に入り遂に伏見に抵り大久保一藏等と會談して歸るあり事皆聯合の地歩を進むるにあらざる無し馬關方面に於ても此精神は依然として繼續せられ英公使との關係も亦數歩を進めたり

（大久保の書）

猶々頃日會藩より叡山見分いたし候儀に付　鳳輦を促候などゝの物議騷然と相起候得共即今之次第にて迚も事に先ち斷策を用候事は夢々六ヶ敷全萬一之爲に用心する譯と被察候

一翰拜啓彌以時下無御障御安康被爲渡恐賀不過之奉存候扨先度は預御投書御念被爲入候御挨拶之趣拜承不堪痛却次第に御座候適御書被下候處終始不行屆而已平に御宥免所仰に御座候爾後御當地形光は品川君より被仰越にて候半野夫事此内下坂段々見聞仕候處幕府内輪之次第も益紛亂之模樣と被察京攝之間も彌不熟之樣子頃日一會之處頻に失望浮說流言耳底に喧敷即今之姿にては何れに歸向する處を不知藝若公急に上坂と申事候處是も延引とか藤堂因備も上坂之說有之候得共未其證を得不申も必不遠面白機會を生可申歟と潛に愚考仕候何も御亮察可被成下候且亦先般は黑田村田川村等罷出候處段々不容易蒙懇命候由不淺難有奉萬謝候尙亦今般黑田出藝自然尊藩へも罷出又候御厄害成上候事も可有之何分宜敷御賴申上候今日御家來就出立御答禮旁以麁毫匆々如此時下爲天下御保護專要奉祈候頓首拜具

四月二日　　大久保一藏

木戸先生侍史

追而乍紙端諸君江宜敷御鳳聲被成下候樣乍憚奉賴候

（川村與十郎より木戸への書抄）

先日者黑田了助儀も致出藝候付自ら尊藩へも罷出可申賦に御座候間當地之形も御聞取下候半（四月五日）

（中村半次郎桐野利秋より木戸への書抄）

尙々黑田了介には度々罷出不一通御世話に相成り候由是又御禮奉謝候（四月六日）

（赤川小田村より政村委員への書抄）

尙々昨日薩藩黑田了輔儀も山口迄罷越用向に依廣島出足仕候參候はゞ御引合宜奉希上候（四月七日）

（廣澤より木戸への書）書中意味遠云々の一條は何事たるや未だ詳ならず

黑田も明日延引相成明後日發途之由今朝不都合之次第篤と了解いたし候哉御配慮之程奉察候何分今日に至り意味違より是迄之次第破れ候ては實に不相濟事何卒乍此上能々御取成是願候先刻小遣之者へ御傳言之趣にては今晩貴家へ黑田罷出候由にて弟にも都合次第登堂仕候樣との御事致承知折角黑田事追々鴻城へ罷越且御國之事に付ては不一形心配いたし不堪感銘次第に付相對之上挨拶をも致度相含居候處是迄兎角駈違未だ不能其儀事故今晩登堂幸之事と相考何卒操合度胸算相立候處今晝政事堂において御承知之通鈴大夫氣附書儲君御刎紙被遊候分何と歟明日迄遂詮議候樣重疊被仰出外に隣藩への脫走達も屬吏へ申附置草案差越候處是又藝へ之達同文にて添削不致候ては不相濟彼是御用相嵩み明日出勤迄には取調へ持參之含にて萬々乍殘懷登堂不得仕此段不惡御聞濟黑田へも程克御傳言奉願候大島郡より早打罷歸り引續き藝使引受両日醉倒後右御用差積り殊之外困窮罷居申候明日之都合次第黑田へ鳥渡なり共相對仕置度含居今晩之處如何にも殘念奉存候他は拜靑萬御斷迄に匆々申上縮候

（四月十二日）

（品川より木戸への書抄）

先日より岩國人横道氏來着に相成居今日伏水邸まで海江田篠原同行にて罷出面會仕候中略大市翁昨日より下坂旨趣は此度將軍下播軍勢追々繰出しに付ては⊕藩へも出張之命有之よし然る處名なき軍に人數等一切差出す事は不相成と の建白翁持參にて閣老面會にて事情も篤と申込むと揚々として出立に相成申

（中村半次郎桐野利秋より木戸への書抄）

尙々黑田了介には度々罷出不一通御世話に相成り候由是又御禮奉謝候（四月六日）

（赤川小田村より政村委員への書抄）

尙々昨日薩藩黑田了輔儀も山口迄罷越用向に依廣島出足仕候參候はゞ御引合宜奉希上候（四月七日）

（廣澤より木戸への書）書中意味違云々の一條は何事たるや未だ詳ならず

黑田も明日延引相成明後日發途之由今朝不都合之次第篤と了解いたし候哉御配慮之程奉察候何分今日に至り意味違より是迄之次第破れ候ては實に不相濟事何卒乍此上能々御取成是願候先刻小遣之者へ御傳言之趣にては今晩貴家へ黑田罷出候由にて弟にも都合次第登堂仕候樣との御事致承知折角黑田事追々鴻城へ罷越且御國之事に付ては不一形心配いたし不堪感銘次第に付相對之上挨拶をも致度相含居候處是迄兎角駈違未だ不能其儀事故今晩登堂幸之事と相考何卒操合度胸算相立候處今晝政事堂において御承知之通鈴大夫氣附書儲君御刎紙被遊候分何と歟明日迄遂詮議候樣重疊被仰出外に隣藩への脫走達も屬吏へ申附置草案差越候處是又藝へ之達同文にて添削不致候ては不相濟彼是御用相嵩み明日出勤迄には取調へ持參之含にて萬々乍殘懷登堂不得仕此段不惡御聞濟黑田へも程克御傳言奉願候大島郡より早打罷歸り引續き藝使引受両日醉倒後右御用差積り殊之外困窮罷居申候明日之都合次第黑田へ鳥渡なり共相對仕置度含居今晩之處如何にも殘念奉存候他は拜靑萬御斷迄に匆々申上縮候（四月十二日）

（品川より木戸への書抄）

先日より岩國人横道氏來着に相成居今日伏水邸まで海江田篠原同行にて罷出面會仕候中略大市翁昨日より下坂旨趣は此度將軍下播軍勢迫々繰出しに付ては⊕藩へも出張之命有之よし然る處名なき軍に人數等一切差出す事は不相成との建白翁持參にて閣老面會にて事情も篤と申込むと揚々として出立に相成申

候右に付ては一昨日は國元より警衛人數等も着京に相成候得ば先詰人數も當分之處滯京に相成諸壯士とも扼腕して一發之砲聲を待居申候（四月十三日夕）

此時に方り高杉伊藤等が提起したる英公使會見の議は此月上旬山口に於て再三政府の議に上り公は徐に宇内の形勢に鑑み闔藩の利害に察し將來の關係を推し以て會見許諾に決したるもゝ如し（廣澤書中の善心は小吏井上某身を僧形に變じ屢〻藩外事情の探聞に從事したるものなり）

（廣澤より木戸への書）

今朝善心へ御托之芳翰委曲奉承知候先以少々御不快御樣子隨分爲邦家御自重第一奉存候扨一昨日來御前會議之件昨日被仰出之趣にては乍恐將來之處更に見留も不相附遺憾萬々に付既に昨夜數馬事來訪之事に付段々及論辯候處兎角是迄之深意相通兼就ては思召筋において如何可有御座哉と苦慮煩念仕居折角今朝出勤之上何と歟好手段共は無之哉諸彥待合候處宇翁事早朝林侍御史へ參り篤と理非及論談候處大きに落意承知相成り其段具に君上被及言上候處餘程御合點に及候哉に被相伺候由にて猶又政府より委曲被聞召上度との御事被仰出候由に御座候處生憎宇翁途中より腹合にて被引籠次第に付不得止弟事一人罷出不辯ながら誠心を盡し諸彥御見込筋逐一御両殿樣へ申上候處餘程御了解被爲在候樣奉窺候何分之儀は猶又篤と御熟考之上可被仰出との御事にて退居候處無程筑大夫被召出是迄之次第意味得と相通置候處利害得失巨細承知の上は實に後來之關係不容易次第に付可致相對との御事斷然被仰出實に御英斷難有御事に奉存候併極密取計候樣重疊被仰出候との御事に御座候藝への演說書は追々國精及演說置候趣も有之從來之行掛り改て書加へ不申短文の方可然と に御決定相成り且亦藝より急飛到着備大夫初彌昨日中引拂に付彼是直に申談度事有之高森迄早々出浮吳候樣申來候付弟事明日より五日之御暇にて彼地迄罷越候樣被仰出候前件猶此後藝迄御使節被差立候演說書其外差向事件概略相片附置候事に付中誠明朝より歸萩にても老臺宇翁諸御駈引相成候得ば藤田野村にて相辨可申何分宜樣致御願候下り掛宇翁尋訪委曲申談置覺悟御座候爲其

印刷不良資料

他拜青萬々可申上候草々頓首（四月六日）

既にして伊藤は豫報の如く長崎より馬關に歸れり（伊藤の直話に開戰間隙に長崎より薩藩伊集院某と稱し陸路歸國し筑前にて關吏に誰何せられ一時從僕を留めて僅に免れ黑崎より舟にて歸りたることありと云ふ何れ此頃の事なるべき歟）使事を復命し英公使への回答を促し及び調金の計策（在英留學生の學資幷に自己等二人の外行費）を果さんが爲めにして高杉は之れに付する井上に寄する書柬を以てし其盡力を請ひ幷に一たび崎陽に來り後來の大計を協議せんことを望めり（四月十日井上の木戸に寄する書中に「昨夜歸關候處春一昨夜歸關の由」云々とあるを見れば八日に着關せしならん書中子簡とあるは伊藤の字なり）

（高杉より井上への書）

先便申上候通此度子簡兄歸關に付一書呈上仕候先以御堅勝可被爲入奉恐賀候弟事も當分はラウダ處へ潛伏の覺悟に御座候乍爾政府其外へは上海へ罷越候樣御唱被下候樣奉賴候子簡歸關は金策等有之出掛候事に御座候御直に御聞取老兄にも御盡力奉賴候老兄にも樣子次第歸艦之次手に寸渡長崎迄御出浮被成候ては如何御座候哉御相對之上永久の謀を爲度御座候木圭先生は今以馬關御滯在に御座候哉別に書翰不差上候間老兄より委細御傳達奉賴候杉德などへ御致聲奉賴候政府へは一筆遣し申候倫頓府よりの書翰御一見之上政府御送金被下候樣奉賴候山崎を士官之禮を以て葬り候由是は君上よりミニストル迄御書面を以御一禮有之事と奉存候藝州之情實は如何に候哉懸念罷在候必戰なれば國家盛興と奉存候爰元にて幕の情實を窺候處不堪笑止事に御座候薩も餘程離間是亦可喜之至に御座候云々（四月日缺）

時に井上は山口に在り既にして馬關に歸り伊藤に面し委曲を聽取し直ちに書を政府員に寄せ幷に別翰を木戸に寄せ高杉の爲め事情を愬へ聽許を請ふ（左に掲ぐる井上の第一書は八日とのみありて月缺くるも蓋し此月即ち四月なること明なり其文意に據れば井上は既に去月二十八日の高杉等の書意を領し之れを懷にして馬關より山口に歸り木戸の意をも承け英公使會見問題等の爲め斡旋せしものなるべし此八日の書は山口にて木戸に寄せしものゝ如し前に掲ぐる廣澤の書幷に井上の此書に據れば當時木戸は疾ありて家に籠居せしなり）

（井上より木戸への書）（其一）

昨夜は御疲勞且御氣分如何被爲在候哉御保養專一奉存候（中略）黑田へ昨夜相對候得共格別之事も無之只當節之模樣窺ひ候迄に御座候とふぞ斷然之意を彼にも

見せ候樣御周旋乍蔭祈居申候弟之申上候樣宍備も高森迄引取候はゞ急速藏六篤御談合之上砲臺新築之事實に一策と奉存候且臨機實に益ある事故御工夫是祈候弟事も外事一條不成は内之念を絶ち候積り就ては成敗共に後之策色々仕置度候間公然留關の相成樣ならでは追々世人にも小郡へ引込の論噂仕候故曖昧留關も甚以如何敷候間何ぞ名を付て居られる樣御心配奉賴候昨日粗宇翁へは咄置申候不成時之遠策ともならば今日そろ々々金策之意を用ひ不申ては臨機困窮可仕候間可然御判考是祈候乍去此一件はどふぞ々々一策相行はれ候得ば日本一變之模樣相見へ候故少々は御苦辛可被成下候他は期後便縷々可申上候匆々頓首（月缺八日）

（井上より木戸への書）（其二）

別後益御多祥御精勤奉敬賀候弟昨夜歸關候處春一昨夜歸關之由委曲は御連名書へ申上置候間御覽被成下度候東行より送り候書翰呈貴覽候金少くて餘程込り候樣子就ては諸事老臺之重荷に相成候ても却て彼是御苦心と相考へ當度宇翁出關可然相考へ申候左すれば久保も相談候得ば彼是都合宜敷相考居申候一其後山狂へも御高諭之通り咄し又弟も元來始より後來之目的は無之事故成敗は左程に心頭に不關候乍併別紙申上候樣肥筑も君上崎陽まで罷出候位之形勢なれば四境切迫候得ば別て爲後來一策致度事に候故判然之事承り候に全く行てわるいと云說は無之府局諸事切實に本相立所詮ぬけ目なき樣に致候得ば後來之議論を押へ候位は出來候樣申事に候何も政府諸彥等被仰合此上は一かバチカ之事故只老兄之命に相從ひ可申候春畝至て差急ぎ候樣子故宇翁片時も早く出關奉祈候東行は最早上海へ渡り候樣諸彥へ申上置吳候樣との事故御連名書へは其都合申上置候間右樣御承知可被成下候（著者曰く本項の意は英公使會見問題高杉等洋行問題等に付ての議論なるべく御連名書と云へるもの散逸し事情の明瞭を得ざるは遺憾とす）

一太田も定て御面會御談判と奉察候如何之論に候哉定て誰も只是迄之政府一定之論立ぬを歎くのみと洞察罷在候委曲急速幸便次第老兄之御心事御熟決之所御申越可被成下候只弟は夫を相待居申候

一相成事に候はゞ宇翁御同意共御座候はゞ大きに仕合せ申候多事之節故望み通りは六ッケ敷と奉考候弟も歸り懸風迄引床に伏し居申候他は後鴻と申上縮候匆々謹言（四月十日）

井上は之れを以て未だ意を盡さずと爲し伊藤と謀り復た山口に歸り大に奔走し伊藤は又馬關より書を木戸井上に飛して切に其斡旋を求め且つ英公使との會見の如き速に之れを實行せんと欲するの意を陳じ井上は山口にて木戸に援り政府員に說き留學生學資送金等の事略其許諾を得て馬關に還る

（伊藤の書）

一書拜呈仕候先以両老臺益御壯健可被成御座爲邦家奉賀候世外老臺御出山後は彼是御高配之御事而已と拜察仕候何卒御發足前御願申上置候廉々被仰合御運被成下候樣偏に奉願上候崎陽の方も歸後一切爲何樣子相分不申日々懸念仕候間何卒片時も速に御決議被成下候樣奉祈候迫々巷說に承り候へば時情切迫之趣も有之當節は不一方御多端御苦慮之事共多く可有之と竊に御察申上候

一長府三吉内藏之助出關迫々面會仕候處此節は是非砲乎艦乎を買求度とて頻に心配仕居申候金も程克參り可申乎之樣被推察申候政府にても何卒被仰合野戰元込礮位は御取入被爲在置度御事と希望仕候迫々事勢切迫之模樣を以愚考仕候へば果然戰爭と被相窺候事に付器械抔は隨分能く損失仕候もの故中々臨事差閊候事出來可仕と奉存候御熟考奉願上候

一世外老臺へ御願申上置候金一條は是非御高配を以少々にても御運被下候へば無此上難有仕合と奉存候東行先生之論にても宇翁も曾て送學生之論有之金は御撫育より出すとの東行先生へ御噂有之旁爲と御謀り申上候て可然御處置を承り歸候樣と申事に御座候何分此邊御汲取不惡御取計可被遣候

一ミニストル論も事機相迫候上は急に相運置度事と奉存候戰爭相開馬關警衛位は英船を以爲致候策も可有之乎と奉存候尤右之論被相行候上ならでは六ケ敷候へ共被行候上に候へば戰爭を起し後之助を得候事不少と奉存候久保

抔は頻に急に被相行不申ては後憂難測と之論に御座候何分御英斷今日之大急務と奉考候書餘世外老臺御歸關を奉侍候て尚呈書可仕候云々（四月十八日）

（井上より木戸への書抄）

二十二日御認めの御書今二十四日相屆奉披見候野村其外資金も御盡力實に嘸々御苦心之段御洞察罷在候如命萩より急速送來既に昨日現物は到着誠に奉安心候春生も格別幸便有兼候故月末薩之酒匂同道罷歸り候積りに御座候

一東行子金之事も餘程御周旋之由實に金論は中に相立候もの不仕合彼よりは不心配之樣被思金銀局には私しを致候被相考旁以氣之毒千萬乍去此度は何も相運び候て御同慶奉存候

一楊井手附金證文御送り屆奉落掌候又壬戌丸之證文寫しも御送り此分も本書に無之ては甚如何敷候間後便御送り方奉賴候可相成ば精々春畝申合せキニーフル之方銃請取候樣可仕候壬戌丸之分は極密ガラバへ相談可仕候御安心可被成下候（四月二十四日）

伊藤は再び長崎に還らんと期したり而も船便等の都合の爲め未だ急に途に上ることを得ず四月二十八日伊藤より木戸への書中に「私儀も近日出發可仕奉存候處酒匂十兵衛出崎之由に付同行可仕と奉存候兩三日は延引可仕候」とあり又同日井上より木戸への書中「春畝も今三四日中には出帆可仕候」とあり五月三日井上より木戸への書中「春生も明朝より一應長崎へ參り申候」とあり酒匂は薩人にて物產交易事務の爲め馬關に來れる者なり然れども五月九日の井上より木戸への書に依ればオテント丸未だ發せざるにガラバの蒸氣船來りし爲め「何も不行と相濟春畝も延引」とあり酒匂はガラバの船にて崎行の豫定なりしも故ありて其時は止みたること同日井上の第二書に見ゆ始め伊藤の馬關に歸り去るや高杉は留りて長崎に在り既に長崎を發して上海に赴けるものゝ如く裝ひ一に伊藤の其事を果して速に長崎に還らんことを待てり此間高杉詩七絕二首あり其一に曰く暮朝心立亦魂飛莫奈胸間百患圍東望日峰南碧海凝眸只見有君歸其二に曰く去年遊俠此津還今歲浮游猶一般兩度志違心亦屈愧吾老死客途間と此詩稿は當時高杉の禍寓の襖に貼在せしを伊藤の尋で長崎に至るや之れを取り歸りしものにて原書今尙存せり會〻小笠原閣老四月二十一日を期し諸侯家二老臣を廣島に召致するの命を下せし報を得て以爲らく事體既に知るべし男兒國の爲め命を致すの時至れりと乃ち俄に西航の念を抛ちガラバと謀り小汽船オテントサマ（後ち第一丙寅丸）を購入するの約を結び其船に駕して馬關に歸り書以て政府の購入認可を得んことを請へり而して戰機は未だ長崎に於て想像せる如く切迫ならず且つ長崎にて傭ひし船員を送還するの要あるを以て將に一

たび汽船を長崎に廻航せしめ其身復た伊藤と共に一たび長崎に赴かんとし石川清之助亦相携へて程に上らんとせり當時石川は馬關に在り一たび長崎に赴き長崎より太宰府に歸り益々薩長密接に力を盡さんと欲せしなり而して高杉が小汽船購入の善後策は再び井上に大苦心を與へ井上は爲に情を木戸に愬へ切に破綻なからんことを請ひ又自己に關しては越荷方御用掛を免ぜんことを囑せり（井上は滯關の名義を得る爲め四月十八日に越荷方御用掛を命せられたり）既にしてガラバ所有の汽船偶〻長崎より來れるを以て船員は之れを其船に托して長崎に歸らしめオテント丸は遂に廻航を爲すに至らずして止み高杉は馬關に留まり石川も亦發せざること月餘に及ぶ（石川は六月五日馬關出發海路長に赴けり）而して汽船購入は公特に撫育資金を以て其價を支辨せしめ事緒に解決を得たり

（高杉の書）（此書中の宗之助は越荷方の一吏員なりと云ふ）

拜呈仕候宗之助を以申上候火船一條嘸々御局中議論有之儀と奉存候胸間切迫より二十一日御手切を眞實に思込みてより之決斷今更後悔之至に御座候乍爾孰れ不遠内か外か動搖も有之事と勘考仕候左候はゞ其節憤激此罪償度罷在候火船之儀は最早及相談候儀に付何卒御買入に相成候樣奉賴候兎角不及事ながら弟乘込船與に倒るゝ志御座候御憐察之上程能御差引奉願上候宗之助も未歸候得共夷人幷火焚等を長崎洋迄歸して參候覺悟御座候乘込人數之儀は於爰元相濟候河野又十郎其外水先等乘込之手筈致候明日明後日之内に長崎洋迄罷越候覺悟御座候此段御屆仕置候然後歸國萬端御差圖を受相定可申候然處半金だけは於爰元渡方之譯候間其御沙汰早々越荷へ被仰越候樣奉願候其他色々申上度事御座候得共多用中に付荒々如此御座候恐惶謹言

五月二日　　谷　潛　藏　拜

木　戸　貫　治　樣

山　田　宇　右　衛　門　樣

廣　澤　藤　右　衛　門　樣

（久保の屆書）

一筆致啓達候然ば此度御買入之約定相成候蒸氣艦長崎表において乘組人數雇入致乘廻候處右人物急に差返候約束に付一兩日之内より彼地乘廻直樣乘戻可致と存候然處爰元急に乘組せ候人物無之に付兩軍艦より乘組尙總督として河野又十郎乘船之都合申合置候此段至て差向儀に付御乞合をも不致候彌乘組人數之儀は罷歸候上にて御沙汰可被下候此段海軍局へも御沙汰可被下候恐惶謹言

五月二日

水戸貫治様　　久保松太郎（各花押）
山田宇右衛門様　　谷潛藏
廣澤藤右衛門様
中村誠一様

國貞直人様
藤田與次右衛門様
野村彌右衛門様

（石川清之助の書）

拜呈仕候黃梅之候先以益御安泰御座可被成奉恭賀候扨此度健助筑より歸り彼方之模樣も相分り大に安心之至御座候就ては劣弟も近々歸筑候樣申來候に付近日西歸之覺悟罷在候乍然今一應藝州表御應接之次第承候上歸筑仕度奉存候間乍御面倒相分次第急に被仰越被下度奉願上候健助儀此度薩人同道は仕不申劣弟宰府歸着之上追々模樣見分之ため差越候樣可仕と相考候扨御家僕京師より歸り其便に相聞候哉土州も少々眼目開候樣にも有之哉にて果て實に御座候はゞ宇和土兩藩は向來御後に隨從盡力候樣相成可申候亦一之樂に御座候先は右奉得尊慮度如此御座候頓首再拜

四月二十五日